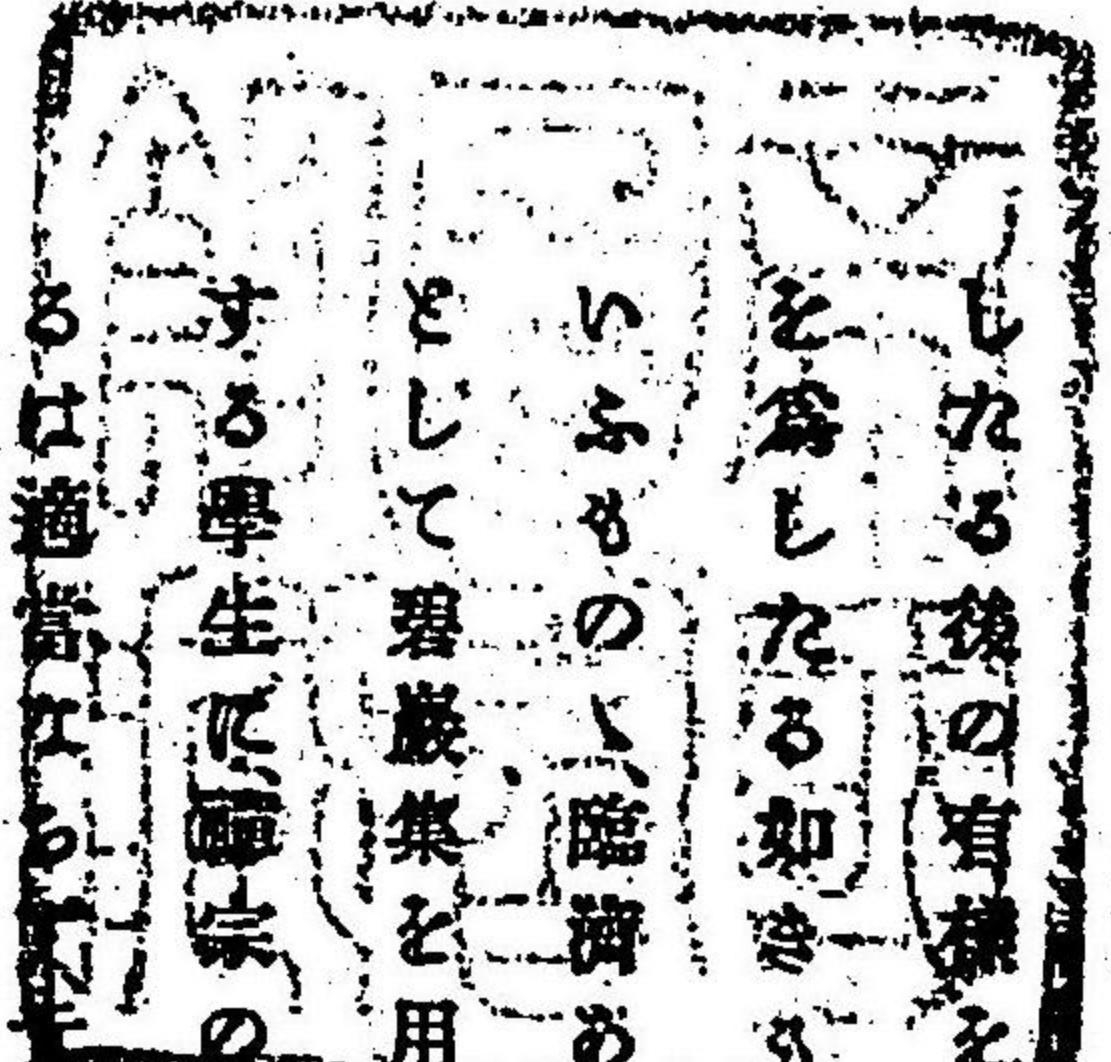


六祖法寶壇經講義

講師 大内青樹 講述
哲學館編輯員 筆記



昨年井上館主より佛教專修科を開設するにつき、禪宗部の教科書を何に定め
たらば宜しからんとの相談ありしが、碧巖集の如きは禪宗の學門修行の成就
したる後の有様を示したるものにして、恰も劍術や槍術の名人と名人が仕合
を爲したる如きものなれば、教科書とすべき性質のものに非ず、殊に一禪宗と
いふもの、臨濟あり、曹洞あり、黃檗あり、其の間各々風習を異にし、臨濟宗は主
として碧巖集を用ゐる曹洞宗は重に従容錄を用ゐる風習あれば、諸宗諸派に屬
する學生に禪宗の大鉢を教授せんとする本館に於て、一方に偏する書を用ゐ
るは適當なるべし、來禪宗なるものは、達磨の始めて支那に傳へたる宗旨なり、

(今日より論すれば如何様にも解釋し得べきも、彼れ固より他に異りたる宗義
を傳へたるに相違なきも、當時未だ以て一宗を形成したるものとは謂ふべか
らず、達磨以後二祖三祖等次第に相承して衣鉢を傳へ來りしも、尙初祖の當時

に異なることなし、禪一家の宗風茲に確立したるは實に六祖曹溪慧能なり、六祖の門下、南嶽懷讓及び青原行思の二哲あり、此より二流を生ぜり、即ち臨濟黃檗は懷讓より出て、曹洞は行思より出てたり、故に日本の禪三宗は俱に源を六祖に取るものにして、曹溪宗若くは六祖宗と謂ふも可なり、されは達磨を以て區劃を爲さば、日本になき所の北宗も加はらざるべからざるも、六祖を以て區劃を爲さば南宗と限り、臨濟も曹洞も黃檗も包括せらるゝなり、且つ夫れ後代の書や、妙味なきにあらざるも、亦隨て弊の生せるあり、六祖に於ては未だ其の弊あるを見ず、是れ余が六祖の說法を輯録したる六祖法實壇經を以て、本館佛教科の教科書と撰定したる所以なり、

大聖釋迦牟尼世尊五十年間、横説堅説の法、大小半滿權實偏圓等、其類八萬四千と稱す、然れども黃卷赤軸は月を指す指の如きのみ、月をだに認めば指に要なし、文字言句は門を叩くの瓦の類のみ、門を開くも尙瓦を握るの要なし、五千餘卷の一代藏經、要する所は以心傳心のみ、文字にあるべき理なきなり、昔者阿難三十餘年世尊に常隨昵近し、多聞聰敏第一と稱せられたり、然れども彼れ尙實地の修行や到らざりけ

ん、結集の時迦葉に叱責せられ、之がクヤンさに徹夜坐禪して羅漢果を得、漸く會に入るとを得たり、斯くの如く如何ほど佛の說法を配應するとも實地の悟を得ずんば何の所詮もなきとなり、

世尊嘗て靈山會上に在りし時、梵天金波羅華を供したり、世尊之を持ちて其時に限り何事も言はず、其の華を拈りて衆に示されしに、大衆其の意を曉らず、皆默然たり、唯迦葉一人のみ、之を見て破顔微笑せり、孔子曰吾道一以貫之、曾子曰唯、門人其の何の謂たるを知らず、此の間の氣脈の通するは他の得て窺ふへからざる所なり、世尊の曰く吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、之を摩訶迦葉に付囑すと、釋迦に八万の大衆ありとも、若し之れを傳ふるものなければ五十年間シヤバリ損なり、是に於て迦葉に付囑せり、乃ち迦葉を以て西天の第一祖とす、迦葉阿難に傳へ、是より展轉相承し、三に商那和修、四に優婆塞多、五に提多迦、六に彌遮迦、七に波須密、八に佛駄難提、九に伏駄密多、十に脇尊者、十一に富那夜者、十二に馬鳴、十三に迦毘摩羅、十四に龍樹、十五に迦那提婆、十六に羅睺羅多、十七に僧迦難提、十八に迦那舍多、十九に鳩摩羅多、二十に闍夜多、二十一に波修槃頭、二十二に摩訶羅、二十三に鶴勒那

二十四に獅子、三十五に婆舍斯多、三十六に不如密多、三十七に般若多羅、而して三千八百傳して菩提達磨に至る、之を天竺の付法相承とす。

菩提達磨は南天竺香至國王の子なり、其の師般若多羅の遺訓を奉して支那に來れり、時に梁の武帝大通元年なり、武帝は深く佛法に皈向し、太子亦佛典を研鑽し、宮中の信佛甚だ盛なり、帝心竊に誇る所あり、其の稱揚を得んとし、碧眼の胡僧を宮中に招請し、自ら問うて曰く、朕嘗て寺を造り、經を寫し、僧を度すると勝て祀すべからず、何の功德かあると、功德の相場を尋ねたり、達磨曰く、無功德と、帝更に問端を改めて、如何が是れ聖諦第一義、佛法の一番大切のところは何じや、達磨曰く、廓然無聖、法界は明らかにして佛など名くべきものは無い、帝曰く、然らば朕に對する者は誰ぞ、達磨曰く、不識、知ら無いと、茲に至て帝領悟する能はず、達磨亦其の機縁の契はざるを知り、去りて江(揚子江)を渡り、魏に行き、嵩山の少林寺に止まり、九年間面壁端坐せり、時に曠達之士、神光なる者あり、儒道の未だ盡さるゝ所あるを曉り、達磨の風を聞いて、往きて時を請ふ、達磨面壁打坐し、黙して敢て語ふる所なし、其年十二月九日夜大に雪ふる、神光立て動かず、黎明に至りて積雪膝を過ぎ、達磨之を見て憫み、問うて曰く、汝久く雪中に立て何事をか求めんとする、神光悲涙して曰く、惟願くは和尙慈悲甘露門を開きて廣く群品を度し玉へ、達磨曰く、諸佛無上の妙道は曠劫に精勤して行し難きを行し、忍に非ずして忍ぶ、豈に小徳小智輕心慢心を以て眞乘を冀はんと欲せんや、徒に勤告に勞せん、神光悔勵を聞きて、潛に利刀を取り自ら左臂を斷ちて抛つ、是に於て達磨其の法器なるを見、求むるも亦可なることありと曰ひ、名を慧可と改めしむ、神光曰く、我心未だ寧からず、乞ふ師ために安せよ、達磨曰く、心を持ち來れ、汝がために安んぜん、神光曰く、心を覓むるに了に得へからず、達磨曰く、我れ汝がために心を安んじ、竟ると終に其の衣鉢を傳ふ、是れ支那に於ける禪宗の遺傳なり、即ち達磨を以て支那の初祖とするなり。

二祖慧可(神光)三祖僧璨(信心銘)を著す、是れ禪の文字に表はれたる矯矢なり、四祖道信、五祖弘忍、次第に相傳し、一系分岐せざりしが、弘忍の下始めて二派に分る、即ち慧能は南宗を開き、神秀は北宗を開く、北宗は旁出にして、南宗は正統なり、六祖慧能の傳は本文に入りて詳にすべし。

禪宗の名は達磨の自ら稱したるにあらざ、禪とは梵語、具には禪那といひ、此に靜慮、

又は定と譯す、禪宗といふも六波羅密中の禪那を指すにあらざ、即ち此宗は専ら禪定を修して心性を悟得するにあるが故に、他より名けて禪宗と號したるなり、蓋し何れの宗と雖も禪定を措て實地の修行を爲すべからず、然れども佛教中悉に禪定を重んじ、所謂言語道斷心行所滅の極點を以心傳心し、直下に本心を領悟するを以て、此宗の特色とするが故に、他より禪宗と名けたるなり、

法寶壇經

行由 第一

此の書は六祖大鑿慧能禪師の説法を門弟の輯録したるものなり、法寶とは五祖弘忍の六祖に法寶及び所傳の袈裟を付すといへるに根據すともいひ、或は三寶中の法寶なりともいひ、甚たしきは寶林に壇を建て説法するに因て名くといふなど、種々の説あり、斯くの如き詮索は今の要にあらざ、壇といへるは六祖を韶陽の大梵寺に請し、土を封して壇を造り、以て其の説法の講處と爲したるに由る、經とは此の書佛説の跡に倣ひて輯録したるが故に門人の尊崇して經と名けたるなり、元來經と稱するは佛の説法にのみ限るが如きも、既に馬鳴の所造を經と

題したる例あり、強ち僭倣ともいふべからざるか、此書の中には後人の補入附加せし所尠なからず、そは文に入りて述ふべし

此の經に十段あり、或は十一段に分つもあり、非なり、行由は其の第一段なり、行由とは行狀由來の義にして、文中且聽慧能行由得法事意とあるより取れるなり、

時大師至寶林、韶州章刺史名與名官僚入山、請師出於城中大梵寺講堂爲衆開緣說法、師升座、次刺史官僚三十餘人、儒宗學士三十餘人、僧尼道俗一千餘人、同時作禮、願聞法要。

物々しく經文の跡に模倣し、先つ初に六成就を列ねたり、六祖慧能は其の入室せる後、唐の憲宗、大鑿禪師と證し、宋の太宗、大鑿真空禪師と加證し、宋の仁宗、大鑿真空普覺禪師と加證し、更に宋の神宗、大鑿真空普覺圓明禪師と加證せられたり、即ち禪師號は四朝の證號あれども、未だ大師の證號なし、されば茲に大師とあるは證號にあらざして、門弟等の尊崇したる敬稱と知るべし、寶林とは寶林寺なり、韶州の曹侯村に曹叔良なるものあり、雙峰山の溪谷に伽藍を建立して寶林寺と號す、又曹溪南華寺といふものは是なり、六祖、黃梅の東山を去りて錫を寶林に留む

るや、韶州の刺史(太守)章瓌(或は儻又瓌)に作る山に入りて請ふ所あり、六祖嘉納して韶州府の大梵寺の講堂に於て說法す、時に唐の儀鳳二年二月八日なり、
大師告衆曰善知識、菩提自性本來清淨、但用此心、直了成佛。

善知識とは師にも友にも用ゐる語なり、六祖大師先づ一座の大衆を呼びて善知識といふ、即ち友達扱ひをせらるゝなり、菩提とは支那に譯して覺といひ、又道といふ、道といふは義譯なり、道の語はもと喻より來る、支那人の最も尊ぶ語なり、西人道を譯して principle といふ、菩提を以て佛法の主義原則といふも亦得たり、天柱の註に、道之極者稱曰菩提、乃是自心異號、故經云欲知菩提當了自心、若了自心即了菩提、云云とあり、菩提とは道の至極せるものなり、道の至極せるものとは他にあらすして自心なり、自心とは吾人相互の自分の心の本性なり、されば菩提を知らんと欲せば自心を了すべし、自心を了すとは實の如く自心を知るなり、實の如くとは心の實性は本來清淨、もとより法爾自然にキヨラカにして垢つき汚かれたるものにあらずと、冒頭に此の二語を出して先づ佛法の大目的を示す、此の意十段の終りまで徹底するなり、然らば如何にして了すへきや、曰く但用此心直了成佛、吾人は既に自心を失ひ居るが故に、菩提と煩惱とを別にし、善と惡とを隔つ、此の顛倒妄想の心を喚び戻して、其の實性に復らしむれば、直了成佛なりと、前の二句は目的を擧げ、後の二句は方法を示したるなり、

善知識且聽慧能、行由得法、事意慧能嚴父本貫范陽、左降流于嶺南、作新州百姓、此身不幸、父又早亡、老母孤遺、移來南海、艱辛貧乏、於市賣柴。

六祖大師大衆に對して其の經歷を説けるなり、大師俗姓は盧氏、其の先は范陽の人なり、父は行瑄といふ、罪あり、曾て新州の嶺南(五大嶺の南)に流され、遂に居を茲に占めて百姓となる、六祖不幸にして、三歲(貞觀十五年)の時父を喪ひ、老母と孤遺と共に貧窮困乏を極め、艱難辛苦を嘗め、市に柴を賣りて漸く糊口せりといふ、
時有一客買柴、使令送至客店、客收去、慧能得錢、卻出門外、見一客誦經、慧能一聞經語、心即開悟。

或時一客あり、六祖に薪を買ひ、命して其の客店に送らしむ、六祖薪を送り届け、其の價金を得て門外に出づるに、又一客ありて經文を讀誦して居るのを見る、六祖

其の經語を聞き、忽然として心に開悟せりといふ。爾ふ所の經語とは金剛經の應無所住而生其心の文なり。五燈會元に曰く、一日負薪至市中、聞客讀金剛經。至應無所住而生其心。有所感悟。應無所住而生其心。とは、凡そ吾人は自に物を見、耳に聲を聞くなど、緣に隨ひ境に對すれば、必ず其の心の生ずるものなり。然るに吾人は常に我を認め居るが故に、境に對して愛憎好惡の念を生じ、之に住著するなり。此の住著の情執を離れて、心の發動を緣に任すが、應無所住而生其心なり。例へば明鏡の物を映するか如し、万象之に對すれば影生し、去れば影滅す。胡漢來るも拒まらず、美人去るも追はず、生滅去來一に緣に隨ふ。斯くの如く吾人の心の緣に觸れ境に隨ひて動くは、動く儘にて可なり、唯之に住著するなからんことを要す。勝海舟翁曾て西郷南洲を評して曰く、世の中に命を惜まず、錢を欲しがらぬ奴ほど始末のつかぬ者は無い。南洲は命を惜しまず、錢もほしがらぬ男だつたと、命を惜しまず、錢をほしがらぬは、住著する所なければなり。孔子曰く、從心所欲、不踰矩と、心の欲するまゝにして、而かも法に違はざるは、住著する所なきが故なり。孔子の言、海舟の談、俱に自ら應無所住而生其心の旨に契ふと謂ふべし。

遂問客、誦何經。客曰、金剛經。復問、從何所來。持此經典。客曰、我從新州黃梅縣東禪寺來。其寺是五祖忍大師在彼主化。門人一千有餘。我到彼中禮拜、聽受此經。大師常勸僧俗、但持金剛經。即自見性。直了成佛。

六祖、應無所住而生其心の經語を聽き、頓に感悟する所あり。復故の賣柴翁にあらざり、乃ち客に問うて曰く、爾する所は何の經なりや。客曰く、金剛般若波羅密多經なり。又問ふ、何れより來れるか。客曰く、新州の黃梅縣なる東禪寺より來ると、而して客彼の寺の事情を告げて曰く、彼處には五祖弘忍大師といふ大德ありて、化導したまひ、其の門に入るもの一千餘人あり。大師常に道俗を勸めて、金剛經を誦持せしめたまふ。彼處に在る者皆自ら自己の心の本性を徹見して、直下に即心成佛すと。

慧能聞說、宿昔有緣、乃蒙一客取銀十兩、與慧能、令充老母衣糧。教便往黃梅參禮五祖。慧能安置、母畢、即便辭違、不經三十餘日、便到黃梅禮拜五祖。

六祖、客の黃梅の狀況を談するを聞き、心大に動かきたるが如し、過去世よりの因縁

にやありけん、客六祖の意を察し、十兩の銀を取り出し、六祖に與へて、老母が衣食の費に充てしめ、黃梅に行きて、五祖の門に投すへきことを勧めたり、六祖争てか猶豫すべき、遂に母に請ひて、法の爲め師を尋ねるの意を告げ、辭し去りて、黃梅に到り、五祖を禮拜せり、時に咸亨二年なりきといふ、

祖問曰、汝何方人、欲求何物、慧能對曰、弟子是嶺南新州百姓、遠來禮師、惟求作佛、不求餘物、祖曰、汝是嶺南人、又是獼猴、若爲堪作佛、慧能曰、人雖有南北、佛性本無南北、獼猴身與和尚不同、佛性有何差別、

六祖黃梅の東禪寺に到り、五祖弘忍に參謁するや、五祖いきなり尋ねて曰く、黃梅は何處の者だ、何の用事あつて來た、六祖答へて曰く、私は嶺南新州の百姓、はるばる遠方より参りましたは、他の用はありませぬ、唯佛に成りたいと存します、五祖曰く、嶺南人か、此の獼猴めが、(獼猴とは田夫野人を戲むる語)トウして佛になれようぞ、六祖曰く、人には南北あれども佛性に南北なし、賤しき私と和尚とは違て居ても佛性に何にも差別はありませぬ、

天桂のいへりし如く、祖曰、汝是嶺南人、以下四十四字は、傳燈錄に據るを可とす、傳

燈錄五祖の章に曰く、

咸亨中有一居士、姓盧、名慧能、自新州來、參謁師、問曰、汝自何來、曰、嶺南、師曰、欲須何事、曰、唯求作佛、師曰、嶺南人無佛性、若爲得佛、曰、人即有南北、佛性豈然、

世間禪に參する者、常に趙州、狗子無佛性の公案を拈弄し、未だ黃梅の無佛性を參究する者あるを聞かず、惜むへじとなす、所謂趙州無の公案に曰く、狗子還有佛性也、無州云、無と敢て問ふ、水に火の性ありや、也た無や、花に月の性ありや、也た無や、乃至佛に狗子の性ありや、狗子に狗子の性ありや、元來水は是れ水、花は是れ花、何を苦んでか、水に火の性の有無を問ひ、花に月の性の有無を問ふの要あらん、是を問ふは餘計な世話なり、狗子佛性の有無を詮索するよりも、先づ人間自性の有無を商量せよ、五祖曰く、嶺南の人に佛性なし、如何ぞ佛と成るを得んと、是れ密に嶺南の人のみ佛性なしといへるには非ず、蓋十方界の一切衆生都て佛性なきなり、何ぞ一切衆生の佛性なきのみならんや、三世の諸佛、歴代の祖師も亦皆佛性なきなり、既に衆生も佛も佛性なし、何を喚んでか佛とし、何を喚んでか衆生とせん、煩惱菩提、生死涅槃、畢竟閑名字のみ、然るを尙一切衆生悉有佛性と説けるを聞き、佛

性の了すべく作佛の得へきありと思はれ、早く是れ兩頭三面、風なきに浪を起し、平地に骨堆を生じて、娘生の眉目に孤負せん、若又強て生死を厭ひ涅槃を欣ひ、煩惱を棄て、菩提を求めんと欲せば、是れ猶釣を操りて山に上り、斧を提げて淵に臨むが如くならんのみ、五祖無佛性の話、實參具眼底の人に非ざるよりは、如何ぞ遺棄の消息を解せん、然るに六祖は曰く、人には南北あり、佛性豈に然らんやと、六祖の講見妙は妙なりと雖も、尙人と佛性とを別にし、衆生と佛とを隔つの嫌あり、當時未だ到らざる所なきにあらざるか。

五祖更欲與語、且見徒衆總在左右、乃令隨衆作務。慧能曰、啓和尚、弟子自心常生智慧、不離自性、即是福田。未審和尚教作何務。祖曰、這獼猴、根性大利。汝更勿言、著槽廠去。慧能退至後院、有一行者、差慧能破柴踏碓、經八月餘。

五祖その法器なるを知り、與にニツクリ語らんと思ひたれど、弟子等の左右にありて、彼等が嫉妬の見を起さんことを恐れ、去りて衆と共に作務(仕事)すべきことを命じたり、六祖可かすして曰く、吾は自心の本性に常に智慧を生じ、此の智

慧は別に自性を離れて働くにあらず、心の本性は本然不生にして、靈鑑明徹なるが故に、視聽能く妙に通じ、寒暖慮らずして知る、直に是れ真如の性覺、其者が自爾として常に知るなり、故に自性即ち是れ福田にして、吾今既に目的を達し居れば、此の外に福田をするに及ばずと思ふ、未審、此の外に何の仕事をも爲せと仰せらるゝかと、福田とは、幸福を植え付くるの田といふことにして、人の日常辛苦して動作するものは福田の爲めなり、支那人は佛法修行を以て幸福を求むる爲めと思ふなり、福田は目的にして、作務は手段なり、六祖は既に其の目的たる福田は達し居ると思ふか、故に手段たる作務の要なしといへるなり、然れども六祖若し自性は福田たるを知りて作務を厭はれ、是れ斷見に陥るものと謂はざるべからず、自性即是福田たるを知らは更に却來して作務するを要す、例を眞宗に取らば、信心獲得すれば目的は達したるなり、然れども信心獲得したるが故に念佛申す必要なしと思はれ、是れ斷見に墮するなり、信心獲得したる後は、頭を回らして益々報謝の稱名を相續せざるべからざるが如し。

五祖六祖の理窟をいふを聞きて暗裏に點頭すれども、此の獼猴、根性大利(しよと

い男だ餘計なこと言はずに、アツチへ行けと叱して去らしめたり。檀越は既屋なり、一本後院に作る、後院を好しとす。

六祖亦其の意を察し退いて後院(臺所)に至るに行者(臺所)に奔走周旋する給仕、隨濟にては俗子多く之を勤む、曹洞にては離僧なり指圖して薪を割り米をつかしむ、斯くして作務すること八ヶ月餘なり、此の一節傳燈錄に對照するに曰く、

師知是異人。乃訶曰、著槽廠去。能禮足而退、便入碓坊服勞。於杵臼之間、晝夜不息。經八月。

祖一日、忽見慧能曰、吾思汝之見、可用、恐有惡人害汝、遂不與汝言、汝知之否。慧能曰、弟子亦知師意、不敢行至堂前、令人不覺。祖一日、喚諸門人、總來、吾向汝說、世人生死事大、汝等終日、只求福田、不求出離生死苦海、自性若迷、福何可救。汝等各去、自看智慧、取自本心般若之性、各作一偈、來呈吾看。若悟大意、付汝衣法、爲第六代祖。火急速去、不得遲滯、思量即不中用。見性之人、言下須見。若如此者、輪刀上陣、亦得見之。

天桂曰く、祖一日忽見慧能といふより下、慧能偈曰に至るまで、總て一千有餘字、略甚九醜陋、義も亦疎淺、知る是れ後人の卑辭なることを、中傳燈幾許の間言虚語なし、尤も好しとす、然るに今の人、鼠膽漏見にして、一句一字を改轉するを憚る、故に敢點削聊せず、註脚を下して、之を談し之を辨すと、適評といふべし、傳燈五祖の章に曰く、

師知付授時至、遂告衆曰、正法難解、不可徒記吾言、持爲己任。汝等各自隨意、述一偈。若語意冥符、則衣法皆付。

且らく此の節の文を讀まん、五祖或曰六祖を見て竊に曰く、吾れ夙に汝が用ゐるに足るの才器なるを知る、然れども惡人等の妬みて汝を害するとあらんも測られされば、之を恐れて汝と語らざりきと、五祖何ぞ斯くの如き人情めきたる耳、爾をなさん、六祖答へて曰く、弟子も亦師の意を察し、差控へて堂前に至らずと、六祖亦豈に斯くの如き陋劣なる根性あらんや、此の節後人の擲入附會せしものなると疑ふべからず、

五祖一日總ての門弟を召ひ集めて説いて曰く、世人生死事大なり、汝等終日營々

として福田を求むるも、生死の苦海を出離するを求めず、汝等自心の本性若し迷ひ居らば、福田も救ふに由しなし、汝等去りて各自自心を顧み、自心の本性を拉し來りて、一偈を作り吾に示せ、若し大意を悟得する者あらば、所傳の衣法を付囑して、第六代の祖となさん、速に去れ、咄嗟言下に見得せよ、思考工夫する者は役に立たぬぞといへり、生死事大とは、凡夫迷人は生を受し死を憎む、生死元來作者なし、只凡夫自ら其の分別に生死するのみ、若し直に生死無常の當昧寂滅なると了達せば、無始生死の海道、乃ち是れ生佛一門、壽直の菩提路なり、是故に道ふ諸佛世尊此の一大事因縁を以ての故に世に現すと、諸の衆生は之か爲に困苦し、佛菩薩は之を以て方便す、迷悟邪正、兩端の差路のみ、將た刹竿頭上、筋斗を打翻するが如く、僅に一機を過たば、則ち毒海に墮在せん、豈に是れ一大事因縁ならずや、出離生死苦海とは、生死の苦海を脱し、涅槃の樂境に入れといふにあらざり、生死といひ、涅槃といふ、總へて自心の分別計度のみ、生や生に任せば、生々不生、死や死に任せば、死々不死、何の處にか生死の惡むへく、涅槃の樂むへきあらん、是の故に處して滞らず、行いて流れず、緣に應して得ふるなく、時に隨て去就す、念々北くるを退は

ず、心心止まるをといめず、直に心念無性なりと了する、之を出離といふ、所謂出離は出去離絶の謂にあらず、只所知の見を亡するにあるのみ、
●輪●刀●上●陣●亦●得●見●之●とは、多くの劍を車の輪の如くに作り、振り廻して敵と戦ふ兵器を輪刀とも輪鋒とも言ふ、是の如き、思量工夫を用ゐるべき暇なき、危機一髪の間にも、見性の人は直下に見得するをいふ、利根の者機を見て作すに驗ふるなり、
衆得處分、退而遞相謂曰、我等衆人不須澄心用意、作偈將呈和尚、有何所益、神秀上座現爲教授師、必是他得、我輩謾作偈頌、枉用心力、餘人聞語、總皆息心、威言我等已後、依止秀師、何煩作偈、

五祖七百の門弟中、神秀といふ者、其の上座弟子頭にして、常に師に代りて門弟の教授師たり、時に門弟等、師の前を退きて、互に相談せるに、我等如何程、潛心焦慮して偈を作るとも、何の所詮なし、神秀上座に非ずして誰か之に當るものあらん、却て心力を勞するは無益なりといへば、然りく我等は自今秀師に依止せんとして、一人の偈を作る者なし、憐むへし、車載斗量の愚僧輩が無氣力、昔も今も變はることなし、天柱崩倒して曰く、可惜許七百箇窮鬼子、不快漆桶とさまを見ろ、目も鼻も

ない漆桶ども

神秀思惟諸人不呈偈爲我與他爲教授師我須作偈將呈和尚若不呈偈和尚如何知我心中見解深淺我呈偈意求法即善覓祖即惡却同凡心奪其聖位奚別若不呈偈終不得法大難大難五祖堂前有步廊三間擬請供奉廬珍畫楞伽變相及五祖血脈圖流傳供養神秀作偈成已數度欲呈行至堂前心中恍惚偏身汗流擬呈不得前後經四日一十三度呈偈不得秀乃思惟不如向廊下書著從他和尙看見忽若道好即出禮拜云是秀作若道不堪枉向山中數年受人禮拜更修何道是夜三更不使人知自執燈書偈於南廊壁間呈心所見偈曰

身是菩提樹 心如明鏡臺 時時勤拂拭 勿使惹塵埃

天柱曰神秀思惟といふより以下の數百言特に是れ龍辨無實の語當に撒脱に抹殺し去るべし大師何を以てか秀師胸中に隠私する所の事を測度して特に大梵講堂人天の衆前に訶揚せんや然も亦秀師初め忍大師の會に在り誓心苦節推汲を以て自役して其の道を求む忍師之を默識して深く器重を加へ之に開て曰

く吾度人多矣至於悟解無及汝者と斯を以て知るべし門人偏に彼我の見を以て妄に輪贏を説く者なるを蓋し書を覽る者は自ら好手眼ありて能く決擇すべし故に道ふ盡く書を信せば書なきに如かすと云傳燈錄に曰く

時下會七百餘僧上座神秀者學通内外衆所宗仰咸共推稱云若非神秀曷敢當之
神秀竊聆衆譽不復思惟乃於廊壁書一偈云身是菩提樹心如明鏡臺時時勤拂拭
莫遣有塵埃傳燈には莫遣有塵埃に作る五燈會元には今文と同しく勿使惹塵埃に作る諸本異同あり

此の節の無實隠妄の言たるは實に天柱の論する所の如し神秀は北宗の開祖なり傳燈既に學内外に通し衆に崇仰せらるると稱す此の人にして何ぞ此の愚を爲さん假令神秀にして此の事ありとするも當時確坊に勞するの六祖何ぞ上座神秀の私事を知らん假令六祖の之を知るとありとするも豈大梵講堂の公席に他人の私事を訶發するの理あらんや若し六祖にして此の事ありとせば六祖亦齒牙にかくるに足らざる庸僧と謂はざるべからず想ふに南宗の末徒北宗の徒と争ひ其の敵祖をよとしめんが爲に此の騰構隠妄の言を弄したるものなるべし此の一節中神秀の偈を解すれば足れり他は盡く抹殺して可なり

神秀の偈雖僧も尙一顧の價なきが如く蕙如す然れども六祖の偈に比すればこそ一段劣るが如く見ゆるも決して輕視すべきものにあらざ身是菩提樹五尺の自身即ち菩提道場なり菩提とて肉身の外に存するに非ず心如明鏡臺吾人相互自心の本性は本然清淨にして明鏡の如し明鏡や花來れば花映し月來れば月映じ万象之に對すれば盡く其の影生ず然れども明鏡も若し磨くことなく放棄し置かば塵埃にくもるべし心性本然清淨なるも懈慢することあらば煩悩の塵埃心鏡を垢汚し以て生死に流轉せん故にいふ時々勤拂拭勿使惹塵埃と

秀書偈了便却歸房人總不知秀復思惟五祖明日見偈歡喜即我與法有緣若言不堪自是我迷宿業障重不合得法聖意難測房中思想坐臥不安直至五更

此の一節亦是れ神秀を譏誚するの妄言濫說のみ既に人總不知といふ六祖焉之を知らん六祖亦豈に他人胸中の煩悩を暴露するの陋を爲さんや宜しく剷滅し去るべし

祖已知神秀入門未得不見自性天明祖喚盧供奉來向南廊壁間繪

畫圖相忽見其偈報言供奉却不用畫勞爾遠來經云凡所有相皆是虛妄但留此偈與人誦持依此偈修有大利益令門人炷香禮敬盡誦此偈即得見性門人誦偈皆歎善哉

傳燈錄に曰く

師經行忽見此偈知是神秀所述乃讚歎曰後代依此修行亦得勝果其壁本欲令盧士盧珍繪楞伽變相及見題偈在壁遂止不畫各令誦念

神秀の偈を書きたる廊下の壁は五祖盧珍といふ者をして楞伽の變相を畫かしめんとせられしに茲に偈を題したるものあり五祖之を見て神秀の所爲なるを曉り讚歎して曰く後代此の偈に依て修行し固く心鏡を守りて菩提に趣向し常に拂拭修練せば惡道に墮することなく大利益を得ん凡所有相皆是虛妄色を形に顯したる者は皆虛妄なり此の偈を茲へ置けば最早畫をかくに及はぬと門人をして香を燒き禮拜誦念せしめたり

祖三更喚秀入堂問曰偈是汝作否秀言實是秀作不敢妄求祖位望和尚慈悲看弟子有少智慧否

神秀五祖の親嫡ならずと雖も、今は同門七百の上座たり、後には北宗の開祖たり、何ぞ弟子有少智慧否云々の痴言を吐露せんや、是れ亦後人の惡言たるは疑ふべからず、

(二四)

祖曰、汝作此偈、未見本性。只在門外、未入門內。如此見解、實無上菩提了、不可得。無上菩提、須得言下識、自本心、見自本性、不生不滅。於一切持中、念々自見、萬法無滯。一真一切真、萬境自如如。如如之心、即是眞實。若如是見、即是無上菩提之自性也。

五祖神秀に語りて曰はく、此の偈若し果して汝の作りしものならば、汝は未だ自己の本性を徹見するに至らず、只門外にありて未だ門内に入らざるものなり、此くの如き考にては、無上菩提を求むとも遂に得べからず、無上菩提は言下に自己の本心本性を見得するを得べしと、言下とは肝要の語にして、言といふも言語に限ると思ふべからず、一機一境すべての上に、分別を用ひず工夫を假らざることをいふなり、其の言下に自己の本性を見る有様を次に述べて曰はく、一切時中、いつでも時を擇ばず處を問はず、念々目に見、耳に聞く所すべて法に任せば、毫も礙

滯することなき、目に色を見、耳に聲を聞きて滯るは、我より見取りをつけて、執着するが故なり、例へば花を見て喜び、紅葉を觀て悲む如き、皆我心により見取りをつけて、或は喜び或は悲しむなり、花や人を喜はしむる爲に咲けるにあらず、紅葉や人を悲しましむる爲に紅なるにあらず、花は是れ花、紅葉は是れ紅葉、何をか喜び、何をか悲しまん、若し夫れ客觀の万境に一任して住着する所なくんば、塵色堆裏曾て滯る所なく、万法一真、万境一如のみ、如とは如似なり、不體を義とす、所謂魚行似魚、鳥飛如鳥にして、魚は是れ魚、鳥は是れ鳥、花は是れ花、月は是れ月、平等に即する差別、然も魚や鳥や花や月や、森羅万象、一として如ならざるをなし、(差別に即する平等)既に客觀の境も如なり、主觀の心も如なり、一切諸法平等一如にして、二如あるとなきが故に、如如の心といふ、既に物心万法皆一如なれば、縁に觸れ境に對して住着すべからず、管に万境に對して住着すべからざるのみならず、呼で如となす所にも亦住着すべからず、此の如如の心は即ち眞實なり、無上菩提とて取て違きに求むべからず、如如の心即ち無上菩提の自性なり、若し此の意を了得せば、行動云爲すべて任運にして、盡地盡界往くとして通せざるなく、憎なく愛なく、

(二五)

順遊に惑はず坐起のつから安かるとを得べし。
汝且去一兩日思惟更作一偈將來吾看汝偈若入得門付汝衣法神
秀作禮而出又經數日作偈不成心中恍惚神思不安猶如夢中行坐
不樂。

五祖續いて神秀に告げて曰はく汝去て一兩日間考へて更に一偈を作り持ち來
れ若しその偈にして吾心に契ふとを得ば汝に衣法を付屬して第六祖とせんと
又經數日の下廿四字は後の附黨者が誓說開闢たるは明なり一筆に勾下し去て
可なり

復兩日有一童子於碓坊過唱誦其偈慧能一聞便知此偈未見本性
雖未蒙教授早識大意遂問童子曰誦者何偈童子曰爾道猶未
大師言世人生死事大欲得傳付衣法令門人作偈來看若悟大意即
付衣法爲第六祖神秀上座於南廊壁上書無相偈大師令人皆誦依
此偈修免墮惡道依此偈修有大利益慧能曰上人我此踏碓入箇餘
月未曾行到堂前望上人引至偈前禮拜時有江州別駕姓張名日用

便高聲讀慧能聞已遂言亦有一偈望別駕爲書別駕言汝亦作偈其
事希有慧能向別駕言欲學無上菩提不得輕於初學下下人有上上
智上上人有沒意智若輕人即有無量無邊罪別駕言汝但誦偈吾爲
汝書汝若得法先須度吾勿忘此言

六祖勢に白杵の間に服すること茲に入ヶ月ある日一童子の來りて偈を誦する
あり童子にたゞして神秀上座の作る所なるを聞き童子此文上人とあるとし
て偈を題せる南廊に導かしむ時に別駕刺史の副官の如きもの張日用なるもの
側にあり六祖請ふて之を讀ましめ聞きたりて曰く吾も亦一偈あり別駕代りて
書せし別駕驚き輕蔑の辭詞を以て汝も亦偈を作るかこれは珍事なりと六祖曰
く無上菩提を求めんと欲せば初學を輕んずること勿れ智は必ずしも人の上下
に拘はらず下位の人に上智なるあり上位の人に無智なるあり其の智を問はず
して人を輕んぜば我見止む時なく無量の罪過あらんといへり此の初學無上菩
提不輕於初學との語果して六祖の口より出てしや否やを知らずと雖も好し
何人のいひし所なるも金言といふべし夫れ學は以て練修の久しきを貴ばん然

れども宗教に於ては修學の長短淺深を問はんや、要は唯信不信を以て判ず、のみ、信は以て一世を盡ひ、學は以て百代の宗と仰かるゝ人にして、往々生死岸頭に立ちて彷徨狼狽するもの多からず、一文不知の村童野蠻と雖も、そが不抜の確信は水火を避けず、死に臨みて平然歸するが如きあり、宗教に於ては、學識や爵位や世間高上の地位に置くもの、すべて貴きにあらざ、要は唯信、仰のみ、信仰を有せる者は初學も尙大善知識なり、張別駕は六祖が俊利なる舌鋒に當るべからず、乃ち語を轉して曰く、餘計なこと言はずに先づ信を述べよ、吾之を書せん、と、然れども心竊に感ずる所やありけん、汝若し法を得ば第一に吾を濟度すべし、此のことと忘るゝ勿れといひしは甚たゆかし、

此の段五燈會元に對照するに左の如し、

盧在碓坊、忽聆、爾偈、乃問同學、是何章句、同學曰、汝不知、和尚求法、圖令各述心得、此則秀上座所述、和尚深加歎賞、必將付法傳衣也、盧曰、其偈云何、同學爲、誦、盧良久曰、美、則美矣、了、則未了、同學呵曰、庸流何知、勿發狂言、盧不信邪、願以一偈和之、同學不答、相視而笑、盧至夜、密告一童子、引至廊下、盧自秉燭、請別駕張日用、於秀偈之側、寫

一偈、曰云云

慧能偈曰

菩提本無樹 明鏡亦非臺 本來無一物 何處惹塵埃

書此偈已。徒衆總驚、無不嗟訝。各謂、言、奇、哉、不、得、以、貌、取、人、何、得、多、時、使、他、肉、身、菩、薩、祖、見、衆、人、驚、怪、恐、人、損、害、遂、將、鞞、擦、了、偈、曰、亦、未、見、性、衆、以、爲、然。

正宗記等には惹塵埃を有塵埃に作るといふ、非なり、又傳燈錄には無樹を非樹に作り、明鏡を心鏡に作り、何處惹を何假拂に作る、共に種かならず、五燈會元は今文の如く正せり、

菩提と曰ひ、明鏡と曰ひ、樹と曰ひ、臺と曰ひ、身と曰ひ、心と曰ふ、是れ皆妄想分別の假名、虛相のみ、神秀いまた此の妄分別の境界を超出すること能はず、まて、身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如しと云ふ、已に身と心との二つを見て、是を菩提樹に比喩、明鏡臺に喩ふ、菩提の相對には煩惱あり、明の相對には暗あるべし、已に明暗を認め煩惱菩提が氣に掛かる、如何ぞ其煩惱の暗を離れて菩提の明に向ふことを

希はざる可けんや、ソコで時々勤めて拂拭えて塵埃を惹かしめざるやうに、修
 行せざる可からずと云ふ、是れ彼の神秀の心得かたにして、初心のもの、尤もま
 さに務むべきの急たる所なれども、此の幼稚なる工夫を以て、直指單傳の正法眼
 藏に據するは、驢鞍橋を以て阿爺の下領となすよりも甚だしき間違ひと謂ふべ
 きなり、故に慧能は敢て神秀の偈を駁せるにも非ず、固より駁すべき價值あるに
 も非ず、雲泥の違ひある地位に立ちて、たゞ有りのまゝに一切諸法の眞面目を赤
 裸々露堂々に吐露して、菩提本無樹、明鏡亦非臺と曰ふ、豈たゞ菩提明鏡等の閑家
 具なきのみならんや、煩惱生死六道四生の認むべきも無く、三身四智十力四無畏
 十八不共法、三十二相八十隨好など云へる、婆々だまし子供ちどかしの要すべ
 きも無し、正眼に見來れば、天際日上、月下、樞前山深、水寒、この間に何の煩惱菩提
 をか擇ひ、何の生死涅槃をか論せん、コ、の様子を彌勒大士は山、是山、水、是水、水と曰
 ひ、慧能は本來無一物と曰ふ、本來とは時間的に一切諸法の無始無修なる姿、無一
 物とは空間的に一切諸法各自活潑無礙なる有様、ユメ、無一物の三字を以て
 世の謂ゆる空々寂々の姿と誤解すること勿れ、己に是れ一切諸法自由無礙にし

(三〇)

て固々獨立獨尊もどより他の造作を受けず、他の安排を假らず、何の淨穢とか
 塵埃、何の迷悟とか論せん、故に言ふ何處惹塵埃、豈たゞ塵埃のみならんや、何の處
 にか清淨を惹かんとも見よ、何の處にか正覺を惹かんとも見よ、
 此偈を書し已りて徒兼總て驚き陸訝せざる無しとある、其れは勿論のことなる
 べけれども、何ぞ多時すなはち八ヶ月の間、この肉身の菩薩をして、米搗などをさ
 せたことで有たぞ、勿躰なきことをしてけりと、徒兼は言ひたりとするも、六祖の
 口より今自から之を言はれたりや否やは疑はし、疑はしけれども實は然ありし
 なるべし、ソコで五祖は其囀さの高きを聞きて、他人の嫉妬に慧能が害を受けん
 ことを恐れて、其の本來無一物の偈を、鞋にて塗抹し、未だ見性せずと言はれたと
 ある、慧能元來見性を要せず、五祖の未見性と言ふは、敵なきに矢を放つが如く相
 似たり、慧能元來文字を要せず、五祖の將鞞擦丁は、遠て慧能の爲めに萬歳を唱ふ
 るが如く相似たり、ソレとも知らずに衆以爲然、その意氣地なき加減、皮下に血あ
 るもの他に一人も無かりしを見るに足る、傳燈に曰く祖後見此偈曰、此是誰作、亦
 未見性、衆聞師語、遂不之顧と、

(三一)

次日祖潛至碓坊見能腰石舂米語曰求道之人爲法忘軀當如是乎乃問曰米熟也未慧能曰米熟久矣獨欠篩在祖以杖擊碓三下而去慧能即會祖意三鼓入室祖以袈裟遮圍不令人見

(三三)

次の日五祖ひそかに碓坊に尋ね行き六祖が石を腰につけて米を搗くを見道を求むるの人道の爲に形骸を顧みざる當に是の如くなるべき乎と歎稱せり僧堂裡に坐禪するのみが求道にあらず佛前に珠數つまぐりて念佛し翻經するのみが修行にあらず石を腰にし米を舂き篩を手にし掃除するも亦佛法修行の相ならざるなし五祖乃ち問ふていはくど一ぢや米はつけたか六祖いはく能くつけて居りますがまだ粉糠を取りませぬと或は是れ目前の小事を拉し來りて行解の熟否を試みたるものと解釋し米熟するや否やと問ふは本性は分つたかといへるなり熟する久し猶篩を欠くとは分つては居りますが付法の儀式がまだ済みませぬといへるなりと餘り深き詮索を爲すの要なからん五祖杖を以て三たび碓を撃ちたるは念佛者が南無阿彌陀佛三邊唱ふると同じ而して知らず曉らずの間に會心默契する所あるなり佛と迦葉とか拈花微笑もその味ひは一徹のみ他人は得て窺ふべきにあらず此の擊碓三下を以て次の三鼓入室を知らしむるなどいふは附會の説のみ卜者の怪説と何ぞ擇ばん

六祖三更の三點眞夜中に入室す袈裟を以て遮圍して見せしめずといふは他人の窺ひ知るべからざる様子を示したるものと見るべし人をして見せしめざる秘事ありと思ふべからず此の段五燈會元に對照するに曰く

逸夜祖潛詣碓坊問曰米白也未盧曰白也未有篩祖於碓以杖三擊之盧以三鼓入室

爲說金剛經至應無所住而生其心慧能言下大悟一切萬法不離自性遂啓祖言何期本自清淨何期自性本不生滅何期自性本自具足何期自性本無動搖何期自性能生萬法祖知悟本性謂慧能曰不識本心學法無益若識自本心見自本性即名丈夫天人師佛三更受法人盡不知便傳頓教及衣鉢云汝爲第六代祖善自護念廣度有情流布將來無令斷絕聽吾偈曰

有情來下種因地果還生無情既無種無性亦無生

(三三)

六祖は最初市に柴を賣りて、客の金剛經を誦するを聞きて發心したりしことは、既に陳べたるが如し、然るに今又こゝに於て金剛經を聞き、應無所住而生其心に至て、大悟すといふは、甚だ解し難し、是れ天柱の所謂頑土塊破木頭の偽言のみ、殊に何期の二字の如き、又頓教を傳ふといふが如き、字句の上より見るも、太た種かならず、後人の附加にかゝるは明なり、此の段傳灯によるを可とす、曰はく

告曰、諸佛出世、爲一大事故、隨機小大、而引導之、遂有十地三乘頓漸等、旨以爲教門、然以無上微妙秘密圓明眞實正法眼藏、付于上首大迦葉尊者、展轉傳授、二十八世、至達磨、屈于此土、得可大師承襲、以至于吾、今以法寶及所傳袈裟、用付於汝、善自保護、無令斷絕、聽吾偈曰云

有情來下種、云々の偈の意は、凡そ心の自性なるものは、本來清淨にして不生不滅、種もなく、性もなく、因もなく、果もなし、然るに一たび無明の妄情を起してより、染淨因果の種子を下し、惑は業を生じ、業は苦を感ずといふ如く、因となり果となり、迷悟を分ち、染淨を隔つるに至るなり、若し直に自性のありのまゝを了し見よ、生滅の差別は即ち不生滅の平等にして、情と無情と生と不生と同一心性相一如

なり、何の處にか凡聖染淨の差別あらん、要する所は但盡凡情、別無聖解、たゞ差別の偏見を以て看取をつける凡夫の情執を拂ふに在り、この外に別に尋き悟もなければ、むつかしき理屈もなし、然るに凡情の迷執を除きたる外に、尙有り難き悟ありと思ふは、所謂桎梏を脱すと雖も、更に金鎖に繋かるゝものにして、迷の玄關は通りぬけたれど、更に悟の關所に滯るの過あり、この種の人、世間甚だ多きか如し、歎すべきかな、

祖復曰、昔達磨大師初來、此土人未之信、故傳此衣、以爲信鉢、代代相承、法則以心傳心、皆令自悟自解、自古佛佛惟傳本體、師師密付本心、衣爲爭端、止汝勿傳、若傳此衣、命如懸絲、汝須速去、恐人害汝、慧能啓曰、向何處去、祖云、逢懷則止、遇會則藏、

傳燈達磨の章に曰く、師祖慧可祖而告之曰、昔如來以正法眼、付迦葉大士、展轉囑累、而至於我、我今付汝、汝當護持、并授汝袈裟、以爲法信、各有所表、宜可知矣、可曰、請指陳、師曰、內傳法印、以契證心、外付袈裟、以定宗旨、後代流傳、疑慮競生、云吾西天之人、言汝此方之子、憑何得法、以何證之、汝今受此衣法、卻後難生、但出此衣、并吾法偈、用以表

明其化無礙。至吾滅後二百年。衣止不傳。法周沙界。云々。今五祖衣法。六祖に授くるに當り、衣は達磨以來付法の信鉢とする傳家寶なる旨を告げ、且つ衣は争闘の端となるものなれば、汝に止めて傳ふると勿れといふもの、初祖の意を承くるものなるを知るべし、而して法は心を以て心を傳へ、曾自悟自解せしむといへるは、已に自心を以て自心を傳ふるもの、何ぞ他に從て得んや、佛に在て増さず、衆生に在て減せず、天真清淨、無始無終、修證を假らず、直に自性を了する、是れ自心を以て自心を傳ふるもの、即ち自悟自解的の法なり、傳付といふも其の實一法の傳授すべきなし、たゞ師資證契、冥符即通するを強て傳付と名くるのみ、然かも佛々祖々、遞代相承して衣法傳付の軌範あるものは、これ佛法正傳の轉印を表するのみ、若し錯りて表範に法ありとおもひ、表信的の衣を争ひ、法を競はし、佛法の命脈懸糸の將に絶えんとするに幾し、故に衣を傳ふるを止めたるなり、(密付本心とあるは、秘密の義と解すれば大なる謬なり、問髪を容れざる親密といふ意なり)

六祖衣法を受け了りて其の向ふ處を問ふ、蓋し法運未通の際なればなり、五祖曰く、懷に逢はし止まれ、會に遇はし藏れよと、言ふは懷集四會二縣の間に止巖隱棲して、暫く興法の時機到るを待つべしとなり、此段傳燈に對照すれば左の如し、

能居士跪受衣法。啓曰。法則既授。衣付何人。師曰。昔達磨初至。人未知信。故傳衣以明得信。今信心已熟。衣乃爭端。止於汝身。不復傳也。且當遠隱。俟時行化。所謂授衣之人。命如懸絲也。能曰。當隱何所。師曰。逢懷則止。遇會則藏。

慧能三更領得衣鉢。云。能本是南中人。素不知此山路。如何出得江口。五祖言。汝不須憂。吾自送汝。祖相送。直至九江驛。祖令上船。五祖把船自搖。慧能言。請和尚坐。弟子合。搖船。祖曰。令是吾渡汝。慧能云。迷時師度。悟了自度。度名雖一。用處不同。慧能生在邊方。語言不正。蒙師傳法。今已得悟。只合自性自度。祖云。如是如是。以後佛法由汝大行。汝去三年。吾方逝世。汝今好去。努力向南。不宜速說。佛法難起。

文義平易註釋の要なし、五祖弘忍大師は上元二年壽七十四にて寂す、

慧能辭去。祖曰。發足南行。兩月中間。至大庾嶺。日和尚少前。少僧。日和尚無

衣法已南矣。問誰人傳授。曰能者得之。衆乃知焉。逐後數百人來。欲奪衣鉢。一僧俗姓陳。名慧明。先

是四品將軍。性行麤糲。極意參尋。爲衆人先。趁及慧能。慧能擲下衣鉢

於石上曰。此衣表信。可力爭耶。能隱草莽中。

(三八)

五祖の門弟等師の衣法を米搗きの慧能に付囑せしとを曉り、迹を追ひて其の衣鉢を取りかへさんとせり、其の中に慧能といふ一僧あり、衆に先ちて走り、將に六祖に追いつかんとす、六祖之を見て乃ち衣鉢を一磐石の上に置き、此の衣は信を表するの具のみ、取らんとせば取れど、去りて衆の中に隠れて竊に窺ふ、此の段傳灯によるに曰く、

遠州崇山禪師、明都陽人、陳宣帝之裔孫也、國亡落於民間、以其王孫受、因有將軍之號、少於永昌寺出家、慕道頗切、往五祖法會、極意研尋、初無解悟、及聞五祖密付衣法、與慮行者、即率同意數十人、隱跡追逐、至大庾嶺、師最先見、餘輩未及、慮行者見師奔至、即擲衣鉢於磐石曰、此衣表信、可力爭耶、任君將去。

慧明至、提撥不動、乃喚曰、行者、行者、我爲法來、不爲衣來、慧能遂出坐磐石上、慧明作禮曰、望行者爲我說法、慧能曰、汝既爲法來、可屏息、諸緣勿生、一念吾爲汝說、明良久、慧能曰、不思善、不思惡、正與麼時、那箇是明上座本來面目。

慧明磐上の袈裟を取らんとするに動かず、乃ち喚んで曰はく、我は法を求めんが爲に來る、袈裟を得んが爲にあらざると是に於て六祖出て、石の上に坐す、慧明禮して說法を請ふ、六祖既いて曰はく、先づ諸緣を屏息すべし、一念を生ずる勿れと諸緣とは吾人か見るも聞くも立つも座るも皆諸緣也、諸緣は分別に起る、分別を離れて之を緣に任せ境に隨ひ、私の分別を用ゐず、住着する處なきを屏息といふなり、別に諸緣を屏除し、息滅すといふにあらざ、一步過らば灰身滅智の小見に陥るべし、坐禪せば四條五條の橋の上、ゆきゝの人をみ山木と見て住着することなからんを要す、而して尙ほ一步進めは、ゆきゝの人をゆきゝの人と見ながら坐禪し、高境歴々分明の儘なることを得べし、良久とは閉口の場合をいふとあり、維摩の一默の如きをいふ場合もあり、今は慧明が茫然として自失せるをいふなり、六祖次て諸緣を屏息し一念を生せぬ時の有様を述べていはく、不思善、不思惡と、吾人は善惡邪正と彼此相對して分別するが故に、愛憎好惡の念を生じて、本性がくらむなり、故に若し善をも思はず、惡をも思はず、分別を離れたる時に、汝が本性即ち本來の面目が顯るゝぞといへるなり、即ち本來の面目が顯るゝ時は、善の思

(三九)

ふべきなく、惡の思ふべきなし、是もなく非もなく、超善惡なるなり、

慧明言下大悟。復問曰。上來密語密意外。還更有密意否。慧能曰。與汝說者。即非密也。汝若返照。密在汝邊。

慧明六祖の說法を聽て、言下に豁然として大悟せり、而して再び問へるには、今まで承つた外に尙ほ五祖より相承せられたる有りかたき秘密のとありやと、六祖曰はく、今述べたるとは何も秘密といふ譯はなし、汝若し返照して内に省りみれば、密は汝にあらん、元來他人より傳附せらるべきものに非ざるを知るべしとなり、返照とは、肝要の語にして、又却來とも、退歩ともいふと同意味なり、即ち、あともとりすることにて、眞宗に所謂還相もこの事なり、承陽大師は重に退歩の語を用ひ、退歩の學を學すべしともいへり、百尺竿頭一步を進むといふも亦此却來の意也、明日、慧明雖在黃梅、實未省自己面目、今蒙指示、如人飲水冷暖自知、今行者即慧明師也、慧能曰、汝若如是、吾與汝同師、黃梅善自護持、慧明教誡を蒙りて喜び禁ずる能はず、吾れ五祖黃梅の會下にありて年來研尋すれども、未だ安心を得ず、唯道を他に求めて毫も自己本來の面目といふ處に氣つ

かざりしが、今は指示を蒙りて自性を了するを得、恰も實地に水を飲みて冷暖自知するが如し、冷暖自知とは實地に知るをいふなり、熱きことを知らぬ者に如何ほど熱さの講釋をするも分るものにあらざ、之を覺らしめんに燒け火箸を當てし見よ、其の熱き實地を知らしむるを得べし、吾は行者を師と仰がんといへば、六祖いはく、汝若し爾か思はし、吾と汝と共に五祖を師とせん、善く護持せよと、護持とは吾等佛者が互に遵守すべきとなり、古人も、相續や大難といはれ、最も大切に於て難事なるは此の正法護持にあり、勉旃く、

明又問。慧明。今後向甚處去。慧能曰。逢袁則止。遇蒙則居。明禮辭。遂下。五祖の口吻に倣ひて袁に遇はし止まれ、蒙に遇はし居れといふ、後人の追造なる

と論を待たず、

慧能後至曹溪。又被惡人尋逐。乃於四會避。獵人隊中。凡經一十五載。時與獵人隨宜說法。獵人常令守網。每見生命。盡放之。每至飯時。以菜寄。煮肉鍋。或問。則對曰。但喫肉邊菜。

六祖曹溪に至り、又惡人に逐はれ、難を四會に避て、獵師の仲間に入りて網番すること十五年間なりといふ。天桂師のいふ如く、時與獵人以下四十一字は借用すべからず、獵人等に說法せば人の怪しむことなかるべし。又生命を見て盡く之を放つ者をして網番を爲さしむるの獵人もなからん。後の味者が遷造説、虎を畫かんとして却て狗を成すが如く、巧を弄して拙となすもの、抹殺し去るべし。

一日思惟時當弘法不可終遂遂出至廣州法性寺。值印宗法師講涅槃經時有風吹旛動。一僧曰風動。一僧曰旛動。議論不已。慧能進曰不是風動不是旛動。仁者心動。一衆駭然。

儀鳳元年六祖廣州の法性寺に至る時に印宗法師なる人涅槃經を講す。この時風ありて旛を吹きて動かす。一僧風動くといひ、一僧旛動くといひ争ふ。此くの如きは今の小學兒童も猶知る所なり。六祖曰はく、仁者心動すと、是の味ひは大學の講師も知らず、風獨り動かす旛自ら動かす、動くものは分別の妄塵なり、只三緣に由て動靜を見るなりと、大衆之を聞きて駭然として驚く。傳燈六祖の章に曰く

至儀鳳元年丙子正月八日屆南海遇印宗法師於法性寺講涅槃經。祖實止處廣闢。

暮夜風颺利幡。兩二僧對論。一曰幡動。一曰風動。在復問答言未契。祖曰可。答俗流。輒預高論。否。直以風幡非動動自心耳。明日遽祖入室。徵風幡之義。祖具以理告。印宗不覺起立曰。行者定非常人。師爲是誰。祖更無所隱。直叙得法因由云云。

印宗延至上席。徵詰奧義。見慧能言簡理當。不由文字。宗曰。行者定非常人。久聞黃梅衣法南來。莫是行者否。慧能曰不敢。宗於是作禮告請。傳來衣鉢。出示大衆。宗復問曰。黃梅付囑如何。指授。慧能曰。指授即無。惟論見性。不論禪定解脫。宗曰。何不論禪定解脫。謂曰。爲是二法。不是佛法。佛法是不二法。

印宗六祖が論ずる所を聞き、驚きて上座に延き、更に問ひ質すに、六祖の答ふる所、言は簡明にして道理肯綮に中り、而して毫も文字に拘はらず、文字に執着するの弊は文字を見ざるよりも害あり、盡く書を信ずれば書なきに如かずと云もこの謂なり。印宗益々驚嘆し、行者は實に尋常の人にあらず、かねて五祖黃梅の嗣法者南に來れるとを聞き居りしが、行者は其人にあらずやと、六祖曰く不敢、どう致しましてといふ内に然りと答ふる意味あり。印宗乃ち立ちて禮を爲し、傳來の衣鉢

を大衆に拜觀せしめんことを請ふ(直くに形式に拘はりて衣鉢を見たがるは俗流の常なり憐れむべし)印宗更に五祖指授の様子を問ふ六祖曰く指授と申しては御坐らぬ唯本來の面目を見現はすのみ此れをするにも禪定解脱を論する如き名相に拘はりたるをなさずと印宗曰く何故に禪定などを爲さざるか曰く佛法は不二の法なり二法は佛法にあらずと言ふは技に迷とか悟とか染とか淨とか又は善惡是非の如く物を二と見るは佛法にあらず佛法は不二なり不二ならば一かといふに然らず然らば二なるか否不二とは二あるものを二と見ず差別の儘を平等と見るが不二なり故に不二と一とを混すべからず詳にいへば不二とは二而不二なり森羅萬象の差別その儘が即平等にして差別に執着せざるが所謂不二の法を知るなり

宗又問如何是佛法不二之法慧能曰法師講涅槃經明佛性是佛法不二之法如高貴德王菩薩白佛言犯四重禁作五逆罪及一闍提等當斷善根佛性否佛言善根有二一者常二者無常佛性非常非無常是故不斷名爲不二一者善二者不善佛性非善非不善是名不二二種

之與界凡夫見二智者了達其性無二無二之性即是佛性。

印宗又問ふどうして佛法が不二の法なりやと六祖曰く貴僧今講釋しつゝある所の涅槃經中佛性を説くものこれ佛法不二の法たることを明すにあらずやと涅槃經第廿二卷德王品の大意を取り來りて高貴德王菩薩が佛に四重禁不殺不偷盜不邪淫不妄語を作し五逆罪殺父殺母殺阿羅漢破和合僧出佛身血を作り又は一闍提等は善根佛性を斷すへきや否やと問へるに佛の言はく善根には常と無常との二種あれども佛性は常にあらず無常にあらず又善と不善との二あれども佛性は善にもあらず不善にもあらず之を不二と名くと此くの如く世間には總へての物を二つにして孰れか一方に偏よれども佛性は善にもあらず不善にもあらず常にあらず無常にもあらずその偏よらざる所が不二の法なりと又涅槃經第八卷文取意の五蘊(色受想行識)と五蘊より働き出したる十八界(六根六境六識)とは凡夫は之を二と見れども智者は然らず其の相は二なれどもその性は無二なり無二の性即ち是れ佛性なりと經を引ひて佛法不二の理を説明せり

印宗聞說歡喜合掌言某甲講經猶如瓦礫仁者論議猶如真金。

天桂師曰く、印宗は久しく經論を談し、已に居然たる先輩の大法師なり、而るに我
慢の情未だ忘れず、勝負の心尙在らしめば、安そ能く賢を尊ひ、道を重じ、己を舍て
人に従ふと、一に是に至らんや、六祖は固に古佛の流亞にして、印宗も亦六祖の
儔類なり、聖賢の聚會豈に偶然なるのみならんや、想ふに夫の擔道の人は、實に當
に是くの如くなるべき乎と、

於是爲慧能剃髮、願事爲師。慧能遂於菩提樹下、開東山法門。慧能於
東山得法、辛苦受盡、命似懸絲。今日得與使君官僚僧尼道俗同此一
會、莫非累劫之緣。亦是過去生中供養諸佛、同種善根。方始得聞如上
頓教得法之因。

六祖の剃髮したるは唐儀鳳元年我天武五年正月十五日にして、二月八日に至り
法性寺の智光律師に就て滿分戒を受く、其の戒壇は宋朝宋那跋陀三藏の置く所
なり、眞諦三藏の植え置かれたる菩提樹下に於て東山の法門を開く、東山とは五
祖黃梅を指す、此の一節は六祖身命懸絲の難を免かれ、此の日衆に對して說法す
るは實に是れ宿昔因縁の致す所なるを尊ひ、一會聽法の大衆をして法緣難遭の

想を生せしむるなり、

教是先聖所傳。不是慧能自智。願聞先聖教者。各令淨心。聞了各自除
疑。如先代聖人無別。

我が説く所の教は先聖佛祖より相傳する所、是れ慧能が自ら發明し自ら製作す
る所にあらず、先聖の教を聞かん人、各心を清淨ならしめ、若し聞き了りて疑惑を
除く事あらば、先聖と同しくして別なるとなからんと、その教誨の老婆心切なる
思ふべし、

一衆聞法、歡喜作禮而退、

以上第一段行由了る、

般若 第二

次、日韋使君請益、師陞座告大衆曰、總淨心念、摩訶般若波羅蜜多、

請益とは、シンエキと讀み、其の上になほ物を益すといふ意味なり、淨心とは、淨は
清淨なり、清淨は汚穢なきなり、汚れなきは空寂なり、空寂なれば無礙自在なり、若
し心の内にいろ／＼の事を著へ置くときは空寂ならず、無礙自在ならず、要する

に無我無心なるを淨心といふなり、今無我無心の空寂清淨の心を以て、摩訶般若波羅蜜多を念せよとなり、

復曰善知識。菩提般若之智。世人本有之。只緣心迷不能自悟。

菩提般若とは皆自心の本性に名けたるなり、此の菩提般若の智慧は、世間の人無始以來盡く之を具有せるなり、然るに世人自ら衣内に玉を抱くを知らずして、力めて活計を求むるが如く、本來自性の清淨なるを知らず、是を以て自ら迷ひ、自ら悟ると能はずとなり、

須假大善知識示導見性。當知愚人智人。佛性本無差別。只緣迷悟不同。所以有愚有智。吾今爲說摩訶般若波羅蜜法。使汝等各得智慧。志心諦聽。吾爲汝說。

世間に愚人と智人とあり、然れども智慧は相の上の差別なり、其の本心本性は同一佛性にして、本來差別あるとなし、只この自性を知了すると、せざるによりて、迷悟の不同あり、迷悟の不同あるが故に智慧の別あるなり、この故に摩訶般若波羅蜜の法を説きて、汝等に般若菩提の智慧を得せしめんとなり、是れは愚人に與

ふるの慈悲なり、

善知識。世人終日口念般若。不識自性般若。猶如說食。不飽口。但說空。萬劫不得見性。終無有益。

摩訶般若を唱ふるとは、唐朝以來世に行はれたるが如し、今も尙禪家には十方三世一切諸佛諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜と唱ふ、假令世人終日終夜口に般若を唱ふることも自性の智慧を知らざれば、猶ほ口に御馳走の話をなすも、腹のふくれざるか如く、他人の財産を算ふるも、自分の用とならざるが如く、但口に空般若には空を説くが故に、今所詮の教を擧げ來るなり、を談するのみならず、万劫億劫終に見性するの時あらざるべし、

善知識。摩訶般若波羅蜜。是梵語。此言大智慧到彼岸。

先づ摩訶般若波羅蜜の文字を説明するなり、之を今の梵學者に聞くに、正しくは摩訶(maha)般若(prajna)波羅蜜多(paramita)と發音すといふ、之を翻譯すれば摩訶は大なり、般若是智慧なり、波羅蜜は到彼岸なり、到彼岸とは、最上、完全、又は圓滿といふの意なり、

此須心行不在口念。口念心不行。如幻如化。如露如電。口念心行則心口相應。

(五〇)

口に念して心に行せされは終に何の益なきとは上に示せるが如し故に般若は須らく心に行すべしと心に般若を行すとは大論に以不着不住法行般若若作是念若能如是行如是修是行般若とありて執着する處もなく住着する者もなきが般若なり故に一切の法に於て取捨の見を用ゐず住着するとなきが能く般若を行すと名くるなりされば心に行せずして但口に念するのみなれば幻化露電の忽ち有りて忽ち無きが如しされど口は心の口に於て心も亦口の心なれば心に行して口に念し心口相應言行冥符せざるべからず一念頓に自心を了すれば言々道に契ひ念々宗に通し一事一法として甚深般若の作用にあらずといふことなし

本性是佛。離性無別佛。

佛といふもの元來吾人衆生の自性を離れて外にあるにあらず吾人が心の本性是れ即ち佛なり黃檗の曰はく諸佛と一切衆生と唯是れ一心なり更に別法なし

覺心即是佛佛即是心心即是衆生衆生即是佛衆生と爲る時此心滅せず佛と爲る時此心亦添はず但一心を悟る更に少法の得へきなし學道の人直下に無心ならざれば累劫修行すとも終に道を成ぜず如かず言下に本法を認取せんには此心是れ本原清淨佛蠢動蒼生と佛菩薩と一體只妄想分別の爲に種々の業果を造る本佛の上に實に一物なし盧通寂靜明妙安樂なる而已然かも本心は見聞覺知に觸せず亦見聞覺知を離れず但見聞覺知の上に於て解を起すと莫れ亦見聞覺知を離れて心を覺めざれ不即不離不住不著世人諸佛皆心法を傳ふと道ふとを聞て將に心上別に一法の證すべく取るへき有りと謂へり遂に心を將て心を覺む知らず心即是法法是心心を將て更に心を求むべからず千劫を歷とも終に得る日なし如かず當下に無心ならんには便ち是れ本佛也と

蓋し禪宗は自力門の極頂に達せるもの自力門は客觀を主觀に歸し方法を吾が方寸におさめ吾が心の外に佛も無しと立て他力門は主觀を客觀に歸して佛を吾の外なる向側にありとし此の佛の外に佛もなく我もなしと立つるなり自力他力の二門其の重きを措く所主觀と客觀と全く異なれども歸する所は同一に

(五一)

して、共に佛と衆生とを別にするは迷にして、佛と衆生と一致すれば悟なり、故に其の立脚點は二門正反對なれども、歸着點は同一なることを知るべし、
何名摩訶摩訶是大。

已下更に摩訶と般若と波羅密とを分ちて細説す、今先つ摩訶即ち大の義を説く
なり、

心量廣大猶如虛空。無有邊畔。亦無方圓大小。亦非青黃赤白。亦無上下長短。亦無嗔無喜。無是非。無善無惡。無有頭尾。

摩訶即ち大といはるゝものは何物なりやといふに、吾々の心是れなり、この心や邊量あるとなきが故に廣大といふ、而してこの心の廣大にして無礙自在なると、猶ほ虚空の如しと喩ふ、心即ち是れ虚空といふにはあらず、方圓大小、青黃赤白、上下長短、嗔喜、是非、善惡、頭尾なしといふは、方圓大小、聲色、長短等の諸物を離るゝ不生的一物有りといふ意にあらず、心性無性、心量無量、性相色空、俱絶する絕對無限なることを顯さんが爲に、方圓大小等無しといふなり、

諸佛刹土盡同虚空。世人妙性本空。無有一法可得。自性真空。亦復如是。

諸佛刹土といへは、直に藥師彌陀の淨土なりと思ふべからず、日本臣民といへは吾等も其の内在るか如く、諸佛刹土の中には自分を別物とすべからず、土とは立場なり、立脚の地なり、人間には人間の立場あり、畜生には畜生の立場なり、刹土は皆佛土にして、諸佛も衆生も同一法界、無相無住にして、虚空界の無量無邊なるが如し、妙性本空と自性真空とは其の名異にして、昧は一なり、俱に是れ吾人自心の異號なり、空といふも一切空無なるにはあらず、有に即するの空なるが故に本空又は真空といふ、即ち此の自性清淨心には善と惡と一法の得へきなく、諸法の空すへきなきが故に、假りに本空妙空と名けたるなり、

善知識。莫聞吾說空。便即著空。第一莫著空。若空心靜坐。即著無記空。

佛祖の空を説くは、諸見を離れしめんが爲のみ、然るに空と説けば直に其の空に執着し、無記の空に墮する者多し、若し空を聞きて空に執着せば、是れ斷空の邪見に陥るものにして、實有の見に墮するものと異なることなし、今古修禪の徒兀坐靜照して、形を忘れ心を灰にするを以て、空を悟るとなすもの、亦邪見に墮す

るものなり、故に六祖反覆重説して、慙慙に警策せられしなり、所謂真空は妙有を
含み、空有、二而不二、不即不離なり、故に有を捨て空を取り、空を捨て有を取る、是れ
病見なり、更に真空妙有を執するも、亦是れ病なり、若し夫眞性を了せば、有も亦妙
有にして有なる者なく、空も真空にして空なるものなし、承陽大師が正法眼藏に
「諸惡莫作と願ひ諸惡莫作と行ひもて行く、諸惡作られずなり行く所に、修行力忽
に現成す、この現成は盡地盡界盡時盡法を量として現成するなり」と説かれたる
もの、又此の意を示したまふなり、

善知識。世界。虚空能含萬物色像。日月星宿。山河大地。泉源谿澗。草木
叢林。惡人善人。天堂地獄。一切大海。須彌諸山。總在空中。世人性空亦
復如是。善知識。自性能含萬法。是大。萬法在諸人。性中。若見一切人。惡
之與善。盡皆不取不捨。亦不染着。心如虚空。名之爲大。故曰摩訶。

此れは現實世界の虚空を以て心性に喩ふる也、先づ現實世界の虚空なるものを
見よ、一切万物を包容して遺す所なし、日月星宿も空中にあれば、山河大地も空中
にあり、泉源谿澗草木叢林も此の中にあり、善人惡人惡法善法もこの中にあり、天

堂地獄、一切大海、須彌諸山、大となく、小となく、依正二報皆虚空中に在り、世人が心
性の空なる亦これと同しく、心性能く万法を包含す、色に對して色を知り、聲を聞
て聲を分ち、万法千境一として心に攝まらざるとなし、蓋し本性空寂なればなり、
若し境に對して甲と乙とを取捨し、善と惡とを分て、愛憎を抱くものは、是れ空寂
にあらざ、善と惡とに對して、取らず捨てず、毫も執着をなさざれば、實に空寂なり、
故に之を喩へて心如虚空といふ、既に萬法を包容して一も洩らすとなきが故に、
名けて大となす、即ち没量絶對を強ひて名けて大といふなり、

善知識。迷人口説。智者心行。又有迷人。空心靜坐。百無所思。自稱爲大。
此一輩人。不可與語。爲邪見故。

言ふは易く行ふは難し、只口に談するのみにして、實地に之を行せざるは愚人迷
者の常なり、又た一類の迷者あり、是れ空心靜坐の弊に墮せるものなり、夫れ坐は
禪の正義なり、坐禪は猶ほ蛇を竹筒に入るゝが如し、蛇身如何に紆曲すとも、竹筒
に入るれば眞直となるべし、散亂妄動の吾人が心を治んには、坐禪を以て陶練せ
ざるべからず、坐禪を以て陶練せば所謂三昧の境に到るべし、三昧に入れば陶黙

亦禪、行住坐臥、一毫の罅隙なく、以て行動云爲一切の事に應用するを得べし、然れども智見と定力とは相待たさるべからず、智見足らざる時は所謂空心靜坐の弊に陥ゆるを免れず、空心とは空見の無心なり、強て念を抑へ心を空して分別を起さず、混沌無記なるを錯て無相心地とおもへるなり、是れ既に小乗の灰身滅智と、毫も擇ふ所なく、全く邪見に墮するなり。

善知識。心量廣大。徧周法界。用即了了。分明應用。便知一切。一切即一。一即一切。去來自由。心體無滯。即是般若。

上に摩訶を説き了り、是より般若を釋す、摩訶即ち大といける、物柄は即ち一心なるとは、上に既にいへるが如し、今之を承けて此の一心は廣大無限にして、法界に遍周すといふ、此の心は絶對法界の一心なり、而して吾人が朝な夕なに用らく所は、取りも直さず法界の一心が現象せるなり、然るに用らき様によりては、廣大の心量も小となり、淺となり、一步過たば自己が五尺の鉢内にたに一心の置き所なきに至るなり、之を善く用ふる時は、色心万象一切の諸法を知了するを得べし、其の用に應して知る有様を一切即一、一即一切といふ、即ち一切か自己の一心に

收まり、一心が法界に行渉るなり、一切即一は色即是空に當り、一即一切は空即是色に當るなり、而して坐作進退去來自由にして、毫も滯礙する所なき妙境に到達するなり、是れ即ち般若なり、

善知識。一切般若智。皆從自性而生。不從外入。莫錯用意。名爲眞性。自用。一眞一切眞。心量大事。不行小道。口莫終日說空。心中不修此行。恰似凡人自稱國王。終不可得。非吾弟子。

前に所言一切即一、一即一切の智は即ち般若の智なり、般若の智は人々各々に其の本性より顯現するものにして、決して外部より入り來るものにあらず、然るに一心の外に二物を認め、善惡邪正愛憎好惡の二法を隔て見るものは、所謂錯りて用意するなり、此の邪見妄想の用意をなさざれば、自性の自用なり、而して二法を見ざるは一眞なり、一心が眞實なれば一切の法眞實となる、故に一眞一切眞といふ、若し之に反して吾心に妄想を抱けば一切妄となり、一妄一切妄ともいふべし、蓋し佛教の道理を示さんとするには、眞妄是非などの言葉を假りて表はさるべからず、然れども眞理は言亡慮絶なり、故に相對的以上の事を言ひ願さんとする

る場合には、喝を下し棒を行ずる等、分別に涉らぬ語業を用ゐるなり、禪語に八角磨盤走空裡といふが如き、昨夜石女生木見、燈籠露柱笑阿々など云ふが如き亦非事實的非論理的の分別以外なる語を以て言ひ顯すなり、サテ心量は廣大にして法界に遍周するが故に小道に局促せず、コセ／＼した處に行かず、されど只口に終日終夜空を説くとも、心に般若の行を修せされば、恰も國王にあらざる者口に自ら國王と稱すとも、終に國王となる能はざるか如し、心に行し口に説き身口言行相應せざるべからず、

(五八)

善知識。何名般若。般若者唐言智慧也。一切處所。一切時中。念念不愚。常行智慧。即是般若。行一念愚。即般若絕。一念智。即般若生。世人愚迷。不見般若。口說般若。心中常愚。常自言。我修般若。念念說空。不識真空。般若無形相。智慧心即是。若作如是解。即名般若智。

般若は智慧と譯す、一切處所は空間的なり、一切時中は時間的なり、迷悟染淨苦樂等二法を見るは愚なり、若し一念にても物を二と見れば般若は絶す、若し一念にても生佛を隔てず迷悟を別にせざれば般若生ず、然るに心中には物を二と見な

がら口に我は般若を修すといふものは是れ亦一の禪病なり、空といふは空無にあらず、偏空にあらず、真空なり、真空は妙有を離れず、花は花、山は山と見ながら、其の性の空を知るが真空なり、般若は形相なし、苦樂善惡等の名相を離る、例へば親の子を愛するは親たるもの、本分を顯したるもの、子の親に孝なるは子たるもの、本分を顯したるもの、善にもあらず、又無論惡にもあらず、善惡邪正を超越するものといふべし、之と等しく般若は善惡邪正の程度以上にして、偏空偏有を離れたる所が般若の真空なり、斯くの如く解するを般若の智といふ、

何名波羅蜜。此是西國語。唐言到彼岸。解義。離生滅。著境。生滅起。如水有波浪。即名為此岸。離境無生滅。如水常通流。即名為彼岸。故號波羅蜜。

般若の釋を了りて、次に波羅蜜を釋す、波羅蜜は到彼岸と譯す、般若真空の悟か開く時は、生滅を離る、生滅のみならず去來一異斷常苦樂等を離る、相對する所の境に執著すれば生滅起る、善惡邪正等亦總て然り、是れ境の惡しきにあらず、耳をそばだつれば聲を聞き、目を開けば色を見る、而して見聞すれば分別を生ず、分別を

(五九)

用ゐるは可なり、執着を爲すは甚た不可なり、伊達政宗或時大岡秀吉より下賜せられたる茶碗を玩ひ居りしに、誤りて之を落したり、その落とす途端に、ハット思ひしが、取上げて眺むれば、何處にも傷のつきたる所なし、百万の大軍襲ひ來るも平然として怖るゝとなかりし政宗が、僅か一箇の土器にハット思つた一念が氣に食はぬと、茶碗を庭前の石に抛ちて微塵としたりといふ、虎哉清謙の二人につき參禪せし政宗なればこそ、ハット思ふた一念に耻しき心の起りたるなれ、一掌虎を打殺するの勇者も、蜂のブーンと耳邊に鳴き來れば思はず之を避くる如く、不慮の些事に却て大に驚くものなり、此の缺點を除くは實に執着の妄念を去るにあり、水の波浪あるを此岸とし、常に通流するを彼岸とす、波浪の動搖を以て迷の此岸に喩ふれば、澄靜を以て彼岸に操すへきに、通流の字を用ゐたるは太た妙なり、通流は平穩に流るゝなり、吾人の心に散亂騷動の波浪を起さずして有りの儘に行動云爲し、所謂心の欲する儘にして規を越えざるが即ち到彼岸なり、

善知識。迷人。口念。當念之時。有妄有非。念念若行。異本有般是名眞性。悟。若二字此法者。是般若法。修此行者。是般若行。不修即凡。一念修行。自身等佛。

迷人は口に念す、念茲に立ては眞妄是非の二法を見る、此の眞妄を離れたる相が般若を行するなり、海水一滴に若能く前念後念種々の行欲盡く是を自己眞性の妙用と知るときは、則ち何をか修と曰ひ、又何をか行と曰はん、一法として迷ふへきものあるとなしと了し、一法として佛法にわらずといふとなしと見る、之を此の行を修し此の法を悟る者と謂ふといへり、要するに般若を行すといふは、二法を見ざるなり、實に二法を見ざるのみならず、二法を見すといふとも見ざるなり、

善知識。凡夫即佛。煩惱即菩提。前念迷即凡夫。後念悟即佛。前念著境。即煩惱。後念離境。即菩提。

凡夫と佛との差別如何、煩惱と菩提との差別如何、凡夫も自心の凡夫なり、佛も自心の佛なり、煩惱菩提何ぞ他心あらんや、悉く是れ自心分別の名目のみ、取て天より降るにもあらず、地より生ずるにもあらず、凡塵染淨煩惱菩提一法として自心にあらずといふとなし、されは凡夫が日常の見聞覺知は直に是れ佛智の所知所覺なり、されは何故に煩惱といひ、菩提といふか、念の境に執着するが煩惱なり、境

を離れたるか菩提なり、故に凡夫といひ、佛といふは境の上にあらずして、念の上
にあり、一念の轉所によりて凡夫ともなり、佛ともなるなり、

善知識。摩訶般若波羅蜜。最尊最上最第一。無往亦無來。三世諸佛從
中出。當用大智慧打破五蘊煩惱塵勞。如此修行。定成佛道。變三毒爲
戒定慧。

此の一節は前を結ひて釋するなり、摩訶般若波羅蜜は最尊最上最第一なりといふ
敢て摩訶般若波羅蜜に限らず、味増漉を以て最尊といふも可なり、播粉木を以て
最上といふも可なり、味増漉を中心とすれば其物が最第一なり、播粉木を最第一
といはば、播粉木にて腹を切るとが出来るかと思ふ勿れ、正宗の名刀で味増はす
れぬなり、味増を播る時には播粉木がよし、元來一切諸法に勝劣なし一切の諸法
其中の一を取りて中心とすれば皆最尊なり、最上なり、最第一なり、此の法や盛過
去際盡未來際無限の時間に通徹するが、故に無往無來なり、若し往來ありと思は
ば既に名相に墮す、此くの如く般若の智現在する時は、三世の諸佛汝が心上にあ
り、此の大智慧を以て色受想行識の五蘊の煩惱塵勞を打破するは當り前の事な

り、八万四千の塵勞多しと雖も、根本は貪嗔痴の三毒に過ぎず、波羅蜜多しと雖も、
根本は戒定慧の三徳なり、三毒の實相を了すれば三徳となり、若し情に迷ひて顛
倒すれば徳を以て毒と爲す、古徳の曰はく、無妄の心是れ定、無妄の心を知るこれ
慧、妄心起らざる是れ定と、田の草を取てそのまゝ肥しかば、三毒轉して其儘三徳
となるなり、

善知識。我此法門。從一般若生。八万四千智慧。何以故。爲世人有八万
四千塵勞。若無塵勞。智慧常現。不離自性。悟此法者。即是無念無憶無
著。不起誑妄。用自眞如性。以智慧觀照。於一切法。不取不捨。即是見性
成佛道。

諸法の實相に暗ければ塵勞となり、實相に明かなれば智慧となる、恰も雲の蔽ふ
なくんば月は常に澄むが如く、塵勞なくは智慧常に現す、而して塵勞の無數なる
之を形容して八万四千といふ、然らば塵勞の闇暗れて明かとなる智慧も亦八万
四千といはざるべからず、此の八万四千の智慧は一般若より生ず、この般若の法
を悟れば、無念なり、無憶なり、無著なり、無念無著なるは自の眞如の性なり、此の眞

如の性を用ゐ般若の智慧を以て明に見わたせば、方法の真相は了々分明にして、山は山に任せ、花は花に任せて、不取不捨なり、是れ即ち見性成佛の道なり、見性成佛とは禪家至要の語にして、其の意本來成佛を知了すといふとなり、見性成佛は性を見て佛と成るといふか通例の讀方なれども、天柱和尚は、驢耳彈琴の中に性を見て佛と成るといへば相對に墮す、宜しく見性成の佛と讀むべし、見性成の佛即ち本來成の佛もどく、出來上つて居る佛といふ意義に解せざるべからずと論したり、牽強の弊なきにあらざれども、其の見識は甚た妙といふべし。

善知識。若欲入甚深法界及般若三昧者。須修般若行。持誦金剛般若經。即得見性。當知此經功德無量無邊。經中分明讚歎。莫能具說。此法門。是最上乘。爲大智人說。小根小智人。聞心生不信。

甚深法界とは心量の窮盡すべからざるをいふ、般若三昧とは動靜出沒すべし無念無著なるをいふ、甚深法界般若三昧に入らんと欲する者は金剛經を持誦すべしと、金剛經は六祖大師に因縁深き經なり、禪宗には依憑の經を定めざれども、強ひて其の依經を求めは此の金剛經なるべし、經題は正しく能斷金剛般若波羅蜜

多經といふ、金剛は譬喩なり、能く他の一切の物を切り、自らは他に斷たるゝとなきは金剛なり、八万四千の煩惱を能く斷滅するものは此の經なるが故に、能斷金剛といふ也、此の經所説の法門は最上乘にして、上根大智の人の爲めに説きたるものなれば、下根小智の輩は却て聞ひて疑を起すべしとなり、
何以故。譬如天龍下雨於閻浮提。城邑聚落。悉皆漂流。如漂葉。葉若雨。大海不增不減。

此の譬喩は思益經海喻品より取るといふ、龍は佛に喩へ、雨は説法に喩へ、城邑聚落は二乗等の小機に喩へ、大海は菩薩等の大機に喩ふるなり、

若大乘人若最上乘人。聞説金剛經。心開悟解。故知本性自有般若之智。自用智慧常觀照。故不假文字。譬如雨水。不從天有。元是龍興致。

最上乘の機根の人は金剛經を聞いて直に開悟す、是れ自性本有の般若の智が自ら智慧を以て觀照し、自心本有の實相を了するなり、此の般若の智は佛より得るにもあらず、經卷文字より得るにもあらず、之が開悟するに到るは佛菩薩善知識の指示誘導の外縁に由るなり、譬へば雨は天より下るものなれども、

もど是れ龍の興致するに由るが如し、善智導

今一切衆生。一切草木。有情無情。悉皆蒙潤。百川衆流。却入大海。合爲一體。衆生本性。般若之智。亦復如是。

譬喩は一分なり、今雨百川に落ちて大海に入るといふは、大小圓融して同一般若なるに喩ふ、前段は衆大斥小にして般若の既百川衆流大海に注けば清濁を分たす、同一鹹味となるが如く、一切の衆生、草木、大機も小機も、俱に般若の法雨に潤はさるはなく、又各人自性の大海に入れば、同一心性、無二無別なり、

善知識。小根之人。聞此頓教。猶如草木。根性小者。若被大雨。悉皆自倒。不能增長。小根之人。亦復如是。元有般若之智。與大智人。更無差別。因何聞法。不自開悟。緣邪見障。重煩惱根深也。

頓教の語は今の禪宗の嫌ふ所なり、只階級を経ざるの意と見るへし、小智小根の人は此の般若の教を聞かば、弱小の草木大雨に遭ひて倒れ、却て增長する能はさるが如く、疑惑を生じ、却て誹謗を爲すべし、もとより自性般若の智は大智上根の人と小智下根の人と更に差別あるなし、然かも何故に開悟せざるかといへば、邪

障り重く煩惱の根性深ければなり、

猶如大雲。覆蓋於日。不得風吹。日光不現。般若之智。亦無大小。爲一切衆生。自心迷悟不同。迷心外見。修行覓佛。未悟自性。即是小根。若開悟頓教。不執外修。但於自心常起正見。煩惱塵勞。常不能染。即是見性。

雲は煩惱に喩へ、日は智慧に比す、譬喩は一分なり、日と雲と其の相別なれども、煩惱と智とは其の心無二なり、只其の一分を比擬するのみ、自性般若の智は大機も小機も差別なく大小なし、然れども迷悟の不同ありて、迷は自家の本心に迷ひ、悟は自家の本性を悟る、迷者は自身の本性を省みず、佛を遠き所に置きて、外に修行に勞するもの、内を觀ずして外に覓むる間は自性を開悟すへからず、此の者即ち小根なり、若し外に向て修行の勞を用ゐるなく、岐路邪徑に涉らずして、一切衆生本來成佛、無漏智性本自具足と、直下に自心を透得すれば、是れ正見を起すものにして、塵勞復染汚すると能はず、即ち是れ見性なり、

善知識。内外不住。去來自由。能除執心。通達無礙。能修此行。與般若經本無差別。

これは見性の様を述ふるなり、内外不住とは天柱の曰く、念を防て内腑に繋る、是を内住と爲し、想を馳せて外塵に著す、是を外住と爲すと、内心實に無念無所住にして、外境に執著せざるを内外不住といふ、既に内心外境に住著する所なければ、一去一來、自由自在にして、通達無礙なり、既に我執を除きて一切處無礙なる、之を能く般若の行を修すといふ、又人々具有般若本經と名くへく、般若の經説と冥契して差別する所なきなり、

善知識一切修多羅及諸文字大小二乘十二部經皆因人置、因智慧性方能建立、若無世人一切萬法本自不有、故知萬法本自人興、一切經書因人説有、緣其人中有愚有智、愚爲小人、智爲大人、愚者問於智人、智者與愚人説法、愚人忽然悟解、心開、即與智人無別。

大小二乘、十二部經、一切の修多羅は、すへて人生を救済せんとする大悲の熱誠より溢れ出てたるものにして、皆人のために設くるものなり、故にいふ、方法人によりて興り、一切の經書人によりて説ありと、且つ佛が五十年の横説堅説は人生を痛苦の中より救済せんとするにあり、換言すれば轉迷開悟にあり、されは經卷文

字は月を指す指の如く、眞理を指示する道しるべなり、故に月を認めは指に要なきが如く、決して經卷文字に拘泥すべきものにあらず、故にいふ、教外別傳不立文字と、然るに今の禪家は經を捨て、録に執着し、教相を嫌て公案に拘泥するの弊あり、經と録と何の擇ふ所ある、余は録外別傳不立公案と喝破せんと欲す、人中に智愚の不同あり、愚は小人なり、智は大人なり、愚者は智者に問へ、智者は愚人に教へよ、愚人と雖も一旦豁然として大悟するに至らば、是れ智者なりといふべし、

善知識不悟即佛是衆生、一念悟時衆生是佛、故知萬法盡在自心、何不從自心中頓見眞如本性、菩薩戒經云、我本性元自清淨、若識自心見性、皆成佛道、淨名經云、即時豁然、還得本心。
大珠の曰く、若し性を見る者、之を號して佛となし、佛を讀る人方に能く信入す、佛人に遠さからずして、人佛に遠さかる、佛は是心の作、迷人は文字中に向て求め、悟人は心に向て覺す、迷人は因を修して果を待ち、悟人は心無相と了す、迷人は物を執し我を守りて己と爲し、悟人は般若用に應じて現前すと、又永明の曰く、若し親しく見れば一人として佛に非すと、いふとなし、若し信はされは一佛として人に

非すといふとなし、迷へば則ち常に佛の衆生となり、悟れば則ち現に衆生の佛を證す、人佛異ならず、妄見差を成す、迷悟異なりと雖も、本性恒一なりと、貧富も人の性にあらず、財あれば貧人も富人となり、財なければ富人も貧人となる如く、佛と衆生と其の自性は一なり、只之を悟ると悟らざるによりて生佛を異にす、一切衆生の無明諸惑は、もと如來の根本性より生じ、徒に迷悟染淨自佛他佛等の差別の邪見を起して、眞理に乖戻す、故に若し直下に此の邪見を亡すれば、本來成佛なり、之を我本性元自清淨、即時豁然還得本心等といふなり、

善知識。我於忍和尙處。一聞言下。便悟。頓見眞如本性。是以將此教法。流行。令學道者。頓悟菩提。各自觀心自見本性。若自不悟。須覓大善知識。解最上乘法者。直示正路。是善知識。有大因緣。所謂化導。令得見性。一切善法。因善知識。能發起。故三世諸佛。十二部經。在人性中。本自具有。不能自悟。須求善知識。指示方見。若自悟者。不假外求。若一向執謂。須他善知識。望得解脫者。無有此處。何以故。自心內有知識。自悟。若起邪迷。妄念顛倒。外善知識。雖有教授。救不可得。若起正眞般若。觀照。一

刹那間。妄念俱滅。若識自性。一悟。即至佛地。

此の一段、或は善知識に従ひ、或は經卷に依るは、皆得道の外縁なることを明すなり、六祖いはく、我嘗て五祖大師の處にありて、一たび其の教を聞きて、言下に自心眞如の本性を見ることが得たり、是の故に今この教を弘め、學道の者をして各自ら自心を觀して、其の本性を悟らしめんとす、若し自ら其の本性を見ることが能はざるものは、先づ大善知識を求めて、其の教を請ふべし、最上乘の法を解する者は、直に正路を示さん、生佛を隔て迷悟を別にするものは、皆諸乘に墮す、以て最上乘の法となすべからず、本來の面目を徹見せば、迷の厭ふべきなく、悟の求むべきなし、是れを最上乘の法を解すとはいふなり、己の外に佛を置き、迷の外に悟を見て、分別妄起し、善惡取捨して、二途に迷ふ者は、先づ善知識の指導に因るを肝要とす、蓋し善知識は發心證果の因縁なり、さればこそ一切の善法は善知識に因るといふなれ、譬へば氷はもと水なれども、熱の外縁に依らざれば、解けざるか如く、三世十方の諸佛、十二部の諸經は、皆人々各個の自性の中に本來具有すれども、凡夫は之を自覺すること能はざるが故に、善知識の指示に因らざるべからず、されど上

根の者にして能く自ら悟ることを得る者は、他を假るの要なし。若し善知識の指導を待つべしと聞きて、一向に執着し、善知識に依らされは、全く解脱を得るの道なしと謂はば、是れ大なる誤なり。何故なれば、心性は各人の固有にして、敢て他より附與せらるゝものにあらざれば、自心に自悟せざるへからず。然るに若も徒に外に向て馳求し、邪迷を起し、妄念顛倒し居らば、假令善知識の外より、如何に教ふるも之を救ふに由なし。若し眞個般若の智を以て觀照せば、一刹那の間にも妄念頓に滅すべし。斯くして自心本然の面目を見ば、一悟即ち佛地に至り、三世十方の諸佛と異なることなしと。

善知識。智慧觀照。内外明徹。識自本心。若識自心。即本解脱。若得解脱。即是般若三昧。即是無念。何名無念。若見一切法。心不染著。是名無念。用即徧一切處。亦不著一切處。

正眞般若の智慧を以て觀照すれば、心一切に徧し、智万境に臨み、物として照さるなく、理として通せざるなし、是れを内外明徹といふ。而して自心本來の面目を知るときは、即ち是れ本解脱なり。本解脱の三字最も要的の語なり。解脱とは束縛

を離るゝの義なり。敢て問ふ、誰か汝を縛する。汝自ら汝を縛するなり。束縛を離るれば、寝るがまゝ、起るがまゝ、無碍自在なり。此の無碍自在の眞境に至れば、即ち是れ般若三昧なり。即是れ無念なり。無念とは何ぞや、灰身滅智の無餘涅槃の謂にあらず。無念とて心の動かざるにあらず。緣に隨ひ境に應じて心の動くまゝにして、染着せざるなり。山に對すれば、山水に對すれば、水、見るにつけ、聞くにつけ、所緣の境に任せて住着せざるを無念といふ。故に見一切法、心不染著、是爲無念といふ。而して無念の用きは、一切處に徧して、亦一切處に染着せざるにあり。般若經に於一切法雖無所取、而成辦一切事業、といふもの、此の謂なり。

但淨本心。使六識出六門。於六塵中。無染無着。來去自由。通用無滯。即是般若三昧。自在解脱。名無念行。若百物不思。當令念絕。即是法縛。即名邊見。善知識。悟無念法者。万法盡通。悟無念者。見諸佛境界。悟無念法者。至佛地位。

淨本心とは、無念なるをいふなり。若し自心の無性無念なることを了せば、眼にありては見といひ、耳にありては聞といひ、乃至手にありて執捉し、脚にありて運奔

する等六根門頭無障無礙六塵堆裏無染無着これを來去自在通用無滯といふ即ち是れ般若三昧なり斯くの如く自在解脫なるを無念の行とはいふなり然るに無念と聞きて何事も思はず枯木死灰の如く念を絶無するを無念なりと思ふものあらばこれ法縛にして無念無相にかたよる邊見なり若しまことに無念の法を悟れば其の用は一切方法に通達し娑婆即寂光此の土即ち諸佛の境界にして是身是佛この身即ち佛陀の位地に在るなり

(七四)

善知識後代得吾法者將此頓教法門於同見同行發願受持如事佛故終身而不退者定入聖位然須傳授從上以來默傳分付不得匿其正法若不同見同行在別法中不得傳付損彼前人究竟無益恐愚人不解謗此法門百劫千生斷佛種性

此の文別法などいふ語ありて宗派の見解加はるが如く見ゆ恐くは六祖の真説にあらざるべし同見同行の人とは假令半炷の香に坐せず又一句の文を解せずとも自の本心を知り無念の法を悟り心口言行一致するものは同見同行の人なり假令苦修練行の功を積むも如實に行せざるものは同見同行の人にあらず

善知識吾有一無相頌各須誦取在家出家但依此修若不自修惟記吾言亦無有益聽吾頌曰

六祖いはく吾に一無相の頌あり之を誦して修せよ若し唯吾か語を記するのみにして自ら修せざれば何の益あることなし先づ吾か頌を聽けと

説通及心通如日處虛空唯傳見性法出世破邪宗法即無頓漸迷悟有遲速只此見性門愚人不可悉

説通心通とは其の典據を求むれば楞伽經に出てたる語なり經には宗通説通とあり今宗通を心通となす心通は自己の悟り即ち自利なり説通は他に施す即ち利他なり其の心通説通の様子は日の虚空にあるが如し日は説通に比し虚空は心通に喩ふ唯傳見性法の一句は自利の心通なり出世破邪宗の一句は利他の説通なり以下重ねて心通説通を解釋す法即無頓漸以下は心通に當る法の上には元來頓教漸教などの區別有るべき筈なし唯その法を得るに遲速あるのみ下の文にも迷悟に殊ることあるは見に遲速あるなりとありてこちらの見込に遲速ありて迷悟を分ち頓漸を見るなり然れども法の手前にはもとより頓漸の別な

(七五)

きなりと

說即雖万般合理還歸一煩惱暗宅中常須生慧日邪來煩惱至正來煩惱除邪正俱不用清淨至無餘

此段說通を解釋す自利の心通を他に施すにはもとより機に應せざるべからざるを以て機に万類あらは説にも萬差あるべし機に無量の數あらは説亦無量の差あるべし假令その説は千萬無量ありとも結歸する所の理は一なり譬へは明來れば闇去るが如し然れども明闇もと比較していふのみ慧日照す處明も闇もある等なし苟も明とか暗とか見込を引立つれば其は邪見なりこれ等一切の見を離れたるが正見なり一切の見を離れたるが正見なりと思ふ見も亦除かざるべからず邪正見非見の外に起えて最早除くべきものなきに至れば清淨にして無餘なり

菩提本自性起心即是妄淨心在妄中但正無三障世人若修道一切盡不妨常自見已過與道即相當

菩提は本と自性なり外より來らず善惡邪正愛憎好惡の念は妄染なり菩提の淨

心は此のほしいあしい惜しい可愛の妄念を離れて外に別に存するにあらず妄念亦淨心の外に存せず自性の清淨心妄法に汚されて迷へるのみされば其の心を自性に從て正しく起せば煩惱業報の三障なし既に自性に從つて其の行を正せば世間出世間一舉一動何事を爲すも悉く菩提なり蓋し道は一なり世間道の外に出世間道なしされは唯凡情を盡せ別に聖解なしといへるも此の意にして常に自ら己が過を反省すればそのつから道と相當り則に契ふなりと

色類自有道各不相妨惱離道別覓道終身不見道波々度一生到頭還自換欲得見眞道行正即是道自若無道心闇行不見道

色類とは万物なり萬物には皆各其の道あり火の物を焼くは火の道なり水の物を濕すは水の道なり花には紅なる道あり柳には綠なる道あり親には親の道あり子には子の道あり斯くの如く萬物各その道ありて相互に妨げず柳の綠なるは花の紅なるを妨げず火の焼くは水の濕すを妨げず外典に道は須臾も離る可らず離るべきは道に非ずといへる如く萬物各具ふる道あるに其の道の外に道を求めば身を終るまで遂に道を見る能はず波々として一生を空過し到頭安心

立命することなし、眞道を見んと欲すれば、行正き即是れ道といふ、非常に高尙なることを説くと思へば、足もとへ持ち來る、蓋し高尙幽玄なる眞理を、朝な夕な筆の上げ下しまで應用せしむるは佛法の妙手段なり、

(七八)

若眞修道人。不見世間過。若見他人非。自非却是左。他非我不非。我非自有過。但自却非心。打除煩惱破。憎愛不關心。長伸兩脚臥。

若し眞實に道を修むる、人あらば、他人の上に過を見る筈なし、宇宙万類元來少しも罪あるものにあらざ、蛆蟻糞中に蠢動するを見て、氣の毒なりと言ふ勿れ、いらぬ御世話なり、花の紅に咲くのが氣に入らぬといふに及ばず、柳の緑なるが妙ならずと心配するにも及ばず、花の紅なる、柳の緑なる、各々其の道を守れるなり、我の關する所にあらず、花は紅にてよし、柳は緑にてよし、さるを我より是非の差別を爲すは間違つた話なり、故に憎愛心に關らず、長に兩脚を伸て臥せと、長に兩脚を伸へて臥せといへばとて自由氣儘に晝寝せよといふにあらず、花は必ず紅なるか、花の兩脚を伸へて臥したる相なり、柳の緑なるは、柳の兩脚を伸へて臥したる相なり、親の子に慈なる、子の親に孝なる、共に親子の兩脚を伸へて臥したる相なり、各々其の道を偽りなく正しく行ふか、兩脚を伸へて臥す天眞の相なりと知るべし、(自非却是左の左の字解し難し、天桂云はく、吁懐い、或腹の曹祖師の玄文を以て章ならずとし、俗製聲韻の句調に準據し、混沌面上に鼻目を鑿して、天徳を與ふに似さらんやと)

欲擬化他人。自須有方便。勿令彼有疑。即是自性現。

利他説通の上に他人を化せんとする場合には、方便を用ゐざるべからず、方便とは方法便宜なり、テマテといふほどのことなり、さるに通常方便の話を悪し様に解して、禪宗の人は念佛を以て方便なりと誇るの類例少からず、然らば汝か坐禪は何ぞ、これ方便ならざるか、凡そ形に涉り言論に涉るものは、皆方便なることを忘るべからず、彼をして疑あらしむる勿ければ、即是れ自性現すとは、淨土門を假りていはし、信決定すれば疑はるゝなり、疑去りて信決定するものは、即ち是れ自性の顯現するなり、

佛法在世間。不離世間覺。離世覺。菩提恰如求兔角。正見名出世。邪見是世間。邪正盡打却。菩提性宛然。

何者か是れ佛法なりやと問はし、一法として佛法ならざるなし、佛法とは一切の法に名け、一切の法は皆是れ佛法なり、君臣父子の世間の道に離れざる所が、佛法の世の中に活潑々地に用らく相たなり、權助か符を取て庭を掃き、おさんが水を汲んで飯をかしく、百姓が鋤を取て耕し、天子か南面して手を拱す、皆各々其の道を守るなり、念佛者が佛前に稱名し、禪僧か僧堂裡に坐禪する、皆その道を守るなり、然るに僧にして俗の真似をし、蠶を養ひ魚を釣る如きは、その道を守るものといふへからず、世間の事既に皆菩提の覺道なり、然らば世を離れ、其の本分を捨て、菩提を求むるは間違なり、世間を離れて菩提を求むるが間違ならば、出世間と離れて求むるも、又間違なるを知らざるべからず、正見とは邪見なきなり、迷悟染淨善惡是非の見込を立つるが邪見なり、此の一切の見を無くするが正見なり、而してその一切の見を無くすといふ見も亦除かざるべからず、邪正共に盡く打却し了れば、茲に菩提の性宛然として現するなり、

此頌是頓教。亦名大法船。迷聞經累劫。悟則剎那間。

もとより此の教は頓と云いふべからず、又漸ともいふべからず、しばらく言に立

て、頓教といふのみ、其の言に拘泥すべからざるは勿論なり、此の頓教も聞き様を誤れば實地に到着するには無量の時を經るとあるべし、然れども悟れば即ち一剎那、此の味ひは坐禪も念佛も題目も異なることなし、

師復曰、今於大梵寺說此頓教、普願法界衆生、言下見性成佛、時章使君與官僚、道俗聞師所說、無不省悟、一時作禮、皆歎善哉、何期嶺南有佛出世、

以上第二般若段了る、

疑問 第三

一日章刺史爲師設大會齋、齋訖刺史請師升座、同官僚士庶闔容再拜、問曰、弟子聞和尚說法實不可思議、今有少疑、願大慈悲特爲解說、師曰、有疑即問、吾當爲說、章公曰、和尚所說可不是達磨大師宗旨乎、師曰、是、公曰、弟子聞達磨初化、梁武帝帝問曰、朕一生造寺度僧、布施設齋、有何功德、達磨言實無功德、弟子未達此理、願和尚爲說、師曰、實無功德、勿疑、先聖之言、武帝心邪、不知正法、造寺度僧、布施設齋、名爲

求福不可將福便爲功德。功德在法身中不在修福。

(八三)

此の段は韶州刺史韋瑒達磨無功德の語と西方淨土とに就いて疑問を六祖に質すの一段なり、韋刺史六祖に問うて曰はく、吾聞く梁の武帝達磨に對ひて朕一生に寺を造り經を寫し僧を度し布施設齋する等舉げて數ふべからず、是れいかほどの功德ありやと問へるに、達磨實に功德無しと答へたりと、吾れ未だ達磨の言實に何の謂たるを解する能はず、和尚請ふ吾か爲に之を説明せよと、六祖答へていはく、然り實に無功德なり、先聖指すの至言を疑ふこと勿れ、武帝は心邪にして正法を知らず、此の邪といふは普通に所謂邪惡の意に非ず、物に見込をつくるは都べて邪見なり、茲に功德を校量す、是れ既に邪にして正に非ず、是故に武帝は造寺度僧布施設齋を以て眞に功德ありと思ふなり、造寺度僧の如き之によりて有爲の福德は求るを得べし、福を以て功德とはなすべからずと、此の六祖の答は福を以て有爲とし、功德を以て無爲とするなり、故に無爲の功德は算盤を以て勘定するを得ず、權衡に掛けて見ることも出来ざるなり、武帝の善快は普通にいは固より福德あるに相違なし、達磨が之を無功德とけくり返したるものは、武帝

帝か些少なる人天の福德を買物にする其の見を喝破したるなり、六祖更に其の功德を説明して功德在法身中不在修福といひて、眞の功德なるものは平等の法身にあり、本具圓成天眞の妙徳なり、花の紅なる柳の緑なる是れ皆法身の功德なり、何の處に別に修して得らるへき功德あらんやと

師又曰見性是功。平等是徳。念念無滯常見本性。眞實妙用名爲功德。

六祖更に功と徳との二字を分ち、功は眸に約し、徳は用に約して説明せり、功は鏡の光の如く、徳は鏡の物を寫す作用の如し、功德とて別に或る事物の存するにあらず、要は吾人衆生心の本性を徹見するの外なし、若し直下に自の本性を購得すれば、法眸は明に見るを得るなり、即ち見性は眸にして、平等は其の用なり、暫く之を言に假りて功といひ徳といふのみ、

次に見性を釋して、念々滯りなく本性を見たる用きは、朝な夕な善の上げ下げにまで顯はれて、行住坐臥自由を得へしと、天柱和尚曰く、行かんと欲して行き、坐せんと欲して坐す、不思議の神力不可説の妙用なり、行く時歩々離か行の想を爲さん、坐する處誰か坐の思あらん、七造八次念々滯りなく心々性を見る是れ修に由

(八三)

て得ず、豈又他に從つて傳んや、乃ち是れ諸人者の本徳、眞實の妙用なり、云云と解し得て妙なりといふべし。

(八四)

内心謙下是功。外行於禮是徳。

これ韋刺史官僚家常の事を喩として説示するなり、内心は昧にして外行は用なり、内心に謙退の徳ありて、始めて外に發して禮讓となる、若し内心に誠に謙下の意なくして外に禮を行はば、是れ偽善虚禮なり。

自性建立万法是功。心體離念是徳。不離自性是功。應用無染是徳。若覓功德法身。但依此作。是真功德。

此一節の辨は海水一滴のまゝで能く分る、眞心は形無く妙昧相を絶すと雖も、物として應せざるなく知りて即ち通し、事として辨せざるなく用ゐて動らざ、六合を胸中に懷きて靈鑑餘りあり、万有を方寸に鑑て其智常に寂、千差万般別相異相皆是れ一眞心の妙用なり、故に自性建立万法といふ、機に異念を生すれば物の爲に隔てらる、若し能く念々無生なるとを了知すれば一切の諸法一々法身の徳用なり、故に心昧離念といふ、而して一切非如の法等しく如の中に住し覺了して是れを知り己れは過なく功德なし、若し能く是の如くなれば、自性を離れずして應用無染なり、之を眞實法身の功德となす。

若修功德之人。心即不輕常行普敬。心常輕人。吾我不斷。即自無功。自性虚妄不實。即自無徳。爲吾我自大常輕一切。故。

これ前の内心謙下外行於禮を釋するなり、心に重すべき所なければ又他を輕にする所なし、元來宇宙間に別に輕すべきものなし、是の故に常に功德を修する者は心常に輕んせずして恭敬を行するなり、他を輕んするは己に我心あればなり、若し無我の境に達すれば何物かを重んじ、何物をか輕せんや。

善知識念念無間是功。心行平直是徳。自修性是功。自修身是徳。

念々無間とは心に間隔なきなり、心に隔りなきは念に念相なくして、起る念に任して無礙自在なるなり、内に念相なければ外に發する所の行は平直なり、修性は本なり、修身は末なり、内に性を修めずして何ぞ外、身を修むるを得ん、上來功と徳とを分ちて示す、其の功は昧なり本なり内なり、徳は用なり末なり外なり。

(八五)

善知識功德須自性內見不是布施供養之所求也。是以福德與功德別。武帝不識眞理。非我祖師有過。

(八六)

上に辨する如く、功德は先天的に自性の内に存するものなれば、布施供養を以て求めんとするも得べからず、功德と福德とは別なり、布施供養を以て有爲の福德は求めらるべきも、功德は得べからず、武帝は此の道理を知らざればこそ、達磨に喝破せられたるなれ、祖師達磨の言には固より過失あることなしと。

刺史又問曰。弟子常見僧俗念阿彌陀佛願生西方。請和尚說得生彼否。願爲破疑。師言使君善聽。慧能爲說。世尊在舍衛城中說西方引化經文分明。去此不遠。

疑問段の中第二に往生淨土に就いての疑なり、淨土門と禪宗とは常に衝突を來し、曹洞宗の人は臨濟宗の人よりも殊に念佛を嫌ひ、曹洞宗の人にも殊に天桂流の人は念佛嫌ひなり、此の段にも擲入の文なるが如き所あるも、天桂は淨土門を破するに都合よき所は擲入とも附會ともいはす、卓見彼の如きも尙僻する所あるか、去此不遠とは觀經の文なり、此とは何れを指すか、法華經に我此上安穩天

人當充滿といふ此土も、この此と同じ意義なるべし、又法華經に一心欲見佛不自惜身命時我及衆僧俱出靈鷲山とある靈鷲山も若し天竺の山ならば假令出てたまふとも障子一重の外の見えぬ我等に拜まれ様なし、今此といふも亦同じ、若論相說。里數有十萬八千。即身中十惡八邪。便是說遠。說遠爲其下根。說近爲其上智。人有兩般。法無兩般。迷悟有殊。見有遲速。迷人念佛求生於彼。悟人自淨其意。所以佛言隨其心淨。即佛土淨。

去此不遠は心性の上よりいふ若し相を立ていはいはし其隔りは十萬八千なり、淨土門に於ては始より指方立相と談して相の上に説くものなり、固より法界は無相なれども暫く無相の中に相を立て指すへき方處なれども暫く指さすのみ、若し之を實有と執着すれば淨土門の意にも契はさるべし、阿彌陀經には過十萬億佛土有世界名曰極樂とあれど、里數十萬八千とある典籍を見ず、又十萬八千を十惡八邪八聖道の友對と配當するも餘り妙ならずと思ふ、十萬八千といふは只妄の隔りをいふのみ、八萬四千にても可なり、十萬八千にても可なり、十萬億にても可なり、只語を假りて顯すのみ、西方淨土を遠しと説くものは下根のためなり、近しと説

(八七)

くは上智の爲なり、上智下根は世間普通の智慧をいふにあらず、世間に於て智識ある人も佛法の上には一文不知の翁媪に及はざるものあり、佛教を信解する因縁の厚薄によりて上智下智の別を生ずる也、法には固より遠近淺深の別なし、只之を信解する人の根機に別あるのみ、されば迷悟有殊、見有遲速といひて、こちらの信解に遲速あるが爲に迷悟の差別を生ずるなり、迷人念佛求生於彼とは、己の外に佛を立て心外に念佛するをいふなり、念佛するを以て直に迷といふにはあらず、

次に佛言とあるは大集經の取意の文なり、佛身佛土をいへば直に三身四土などいふ名目に拘泥して眞意を得るもの稀なり、身といふはすべて物の資格を定むるなり、親に向へば子といふ身となり、妻に向へば夫といふ身となり、弟に向へば兄といふ身となるが如し、土といふは立脚の地なり、落つき場處なり、子に對すれば親といふ身となりて、其の立脚地落つき場處は慈なり、子の親に對して孝なるは子の立脚地落つき場處なり、取て佛身佛土に限らず、餓鬼には餓鬼の身土あり、畜生には畜生の身土あり、故にこちらの心たに淨ければ其の資格は淨身となり、立

脚地落つき場處は淨土となりなり、是の故に隨其心淨即佛土淨といふ也、淨は空寂の義なり、空といふは何物も無しといふにあらず、物に染着せざるなり、汚れのつかぬか空なり、故に般若に空無故離故不生、故寂滅故爲淨といへり、

使君東方人、但心淨、即無罪。雖西方人、心不淨、亦有僣。東方人造罪、念佛求生西方。西方人造罪、念佛求生何國。

此の一節甚だ淺膚、恐くは六祖の眞說に非ざるべし、且つ以下の文より見るも、六祖は無暗に西方を嫌へるにあらず、愚瞶なる門弟の附會ならん、東方ならば極樂の東なり、西方ならば極樂の西なり、何ぞ西方の人何れの國に生まれんと怪しむを要せん、

凡愚不了自性、不識身中淨土、願東願西、悟人在處一般。所以佛言、隨所住處、恒安樂。

自己の本心本性を知了すれば、淨土は本心本性の中にあり、然るに凡夫愚人は自己の本心本性を知了せず、之を知了せざるが故に、又本心中に佛あり、本身中に淨土あるを知らず、徒に心外に佛を求めて東を願ひ、若くは西を願ふなり、能く心無礙

なることを了すれば、東西南北在々處々往くとして淨土ならざるなし、故に在處
一般といふ、經に所住の處に隨ひて恒に安樂極樂なりといふも亦此の意なり、

使君心地但無不善、西方去、此不遙、若懷不善之心、念佛往生難到。

身に不善業を行しなから、佛號を唱くて西方に往生せんとするの族多し、斯くの如きの輩は千生万劫を経とも生死を出つべからず、心に不善なければ西方遙なるにあらず、

今勸善知識先除十惡、即行十萬、後除八邪、乃過八千、

意味に差支なければ、此文も恐くは六祖の眞旨にあらずるべし、

念々見性、常行平直、到如彈指、便觀彌陀、

常に自己の本心本性を見て平生正直に行へば、西方淨土に往生するを待たず、彈指の間に自心の本佛を見る、彌陀は此に無量壽と譯す、只に西方淨土の佛を彌陀とのみいはんや、各人の自性本來無量壽なり、

使君但行十善、何須更願往生、不斷十惡之心、何佛來迎、請若悟無生、頓法見西方、只在剎那、不悟念佛求生、路遙如何得達、

維摩經には十善是佛土の語あり、十善取て人天教に限るべからず、十善を行すれば別に念佛して往生を願ふの要なし、然るに十惡の心を斷せずして念佛によりて往生を願ふの徒あり、是れ彌陀をして惡人の後押たらしむるものなり、而して眞宗の信者には此の弊少からず、親鸞上人は信心獲得するものは現生に十益あるとを説けり、然らば現生の十益を得ずして其の行の正しからざるものは未だ信心の得られざるを反證するものといふべし、道理理屈は知らざるも信心獲得の曉には自ら道えたかはず、矩に契ふが淨土の法門なり、然るに今の眞宗の徒は信心たに獲得すれば、如何なる惡事も問ふ所にあらずと心得通るもの多きは歎すべきの至りなり、

慧能與諸人移西方、於剎那間、目目前便見、各願見否、衆皆頂禮云、若此處見、何須更願往生、願和尚慈悲、便現西方、普令得見、師言、大衆世人、自色身是城、眼耳鼻舌是門、外有五門、內有意門、心是地、性是王、王居心地上、性在王在、性去王無、性在心身存、性去身心壞、佛向性中作、莫向心外求、自性迷即是衆生、自性覺即是佛、慈悲即是觀音、喜捨名爲

勢至能淨即釋迦平直即是彌陀。

(九二)

これ六祖の假説にして、且らく心身に就て内外を分ち、心性心王の在去存壞を説き、四無量心を以て二佛二菩薩に配す、これ他に佛を立て他に淨土を求むる者の爲に自己の本分を曉らしめんか爲の善巧施設あり、一念心上の覺と不覺とによりて佛と衆生との差あり、故に自性迷へば衆生、覺れば佛なりといふ。

人我是須彌。邪心是海水。煩惱是波浪。毒害是惡龍。虛妄是鬼神。塵勞是魚鼈。貪瞋是地獄。愚癡是畜生。

穢土は須彌を中心として海水波浪乃至地獄畜生の三界あり、是れ皆我一心の妄念より緣起する妄境界なることを述ふるなり。

善知識常行十善天堂便至。除人我須彌倒。去邪心海水竭。煩惱無波浪滅。毒害忘魚龍絕。自心地上覺性如來放。大光明外照六門清淨。能破六欲諸天。自性內照三毒即除。地獄業罪一時消滅。內外明徹不異西方。不作此修。如何到彼。

十善を行すれば前の三界は轉して安樂淨土となるといふ、これ又勝化の施設なり。

り、こゝに不異西方といひ、又如何到彼といふの語あり、然らば六祖は西方淨土を絶對的に否定したるものにあらざるとを知るべし。

大衆聞說了然見性。悉皆禮拜俱歎善哉。唱言普願法界衆生聞者一時悟解。

師言善知識。若欲修行。在家亦得。不由在寺。在家能行。如東方人心善。在寺不修。如西方人心惡。但心清淨。即是自性西方。

東方西方を以て在家出家に比す、又是隨宜の假説のみ、雲棲大師在家出家に就て四句分別をなしたるものあり、一に在家の在家、これ未だ道に入らざるもの、二に出家の出家、これ身心言行共に如實に道を行するもの、三に在家の出家、これ其形を俗にして心に道を修するもの、四に出家の在家、これ僧にして俗なるもの、今の世最も此種の人多きは歎すべし。

韋公又問在家如何修行。願爲教授。師言吾爲大衆作無相頌。但依此修。常與吾同處無別。若不作此修。剃髮出家。於道何益。頌曰。

在家の者の爲に六祖無相の偈を説く、之を修するものは所謂在家の出家なり、剃

(九三)

髮出家すとも之を修せされば所謂出家の在家なり、此の偈頌は六首にして二十

二句あり、六度の義を示すなり、

心平何勞持戒、行直何用修禪。

六度の中先づ持戒と禪定とを示す、戒は非を防ぎ惡を止めんかためなり、心平なるは心空寂なるの義なり、心平にして空寂なれば又別に戒を持たざるも可なり、禪定を修するは心の散動を静めんか爲なり、行正直にして順道に戒はされば戒て足を屈めて線香の香をかぐにも及はず、

恩則親養、父母義則上下相憐、讓則尊卑和睦、忍則衆惡無喧。

次に忍辱を示す、子たるもの父母に孝養するは恩を知るなり、上たるもの下を憐み、下たるもの上を敬するは義を守るなり、交るに禮讓を以てすれば尊卑上下和睦し、互に忍の心を以て他に對すれば衝突するとなくして惡の生ずることなし、

若能鑽木出火、淤泥定生紅蓮。

これは精進を示すなり、遺經にも木を鑽て火を出すの譬喩を以て精進を勤め、未だ火の出でざるに木を鑽ることを止むれば火終に得べからずと説かれたり、精

進勉強だにすれば淤泥に紅蓮を生ずるが如く、煩惱さながら菩提となるなり、

苦口的、是良藥、逆耳、必是忠言。

これ特に韋刺史官僚を勸誡するの語なり、我意を貫かんとし情見を存すれば以て諫を容るゝ能はず、故に苦逆は忠藥なることを示す、

改過必生智慧、護短、心内非賢、日用常行饒益、成道非由施錢、

次に智慧と布施とを示す、人誰か過なからん、されど過を改むるに吝なるべからず、過を改むるの意なきは我執より起る、若し過を改めずして短を護り非を覆ふは我執の愚なり、賢といふべからず、若し我見なければ自の短處に當て過を知りて必ず改む、之を賢人となす、慈悲饒益は常に行ふべし、常に錢を施すをのみ布施といはんや、

菩提只向心覓、何勞向外求、玄聽說、依此修行、天堂只在目前、

菩提は覺なり、覺りとは、只自性を識得するにあり、若し之を自心に覓めずして他に幽玄なる一物ありと思ひて之を求めば、千劫万劫を累ねども遂に開悟すべからず、但佛説を聽きて如實に修行すれば、天堂極樂は實に目前にあり、又何ぞ西方

に求むるを要せんや。

師復曰。善知識。總須依偈修行。見取自性。直成佛道。法不相待。衆人且散。吾歸曹溪。衆若有疑。却來相問。時刺史官僚在會。信男信女各得開悟。信受奉行。

第三疑問段了る

定慧 第四

師示衆云。善知識。我此法門。以定慧爲本。大衆勿迷言定慧別。定慧一體。不是二。定是慧體。慧是定用。即慧之時。定在慧。即定之時。慧在定。若識此義。即是定慧等學。諸學道之人。莫言先定發慧。先慧發定。各別作此見者。法有二相。

定慧とは三學六度の中にいふ所の禪定と智慧となり。定は心の落着をきめるもの。慧は落着きたる心の用きなり。故に定は慧の體、慧は定の用なりといふ例へは。定は鏡の淨らかなるが如く、慧はその万象を映現するが如し、既に體と用とは離るべからずして不二なり、さらば定慧は必ずその一を偏廢すべからざるものなり。

り、然るに曹洞家と臨濟家との争の根原は、實にこの定慧の二字にありて、洞家は定を先とし、濟家は慧を主とするの風あり、而して其の弊や遂に一は定にのみ力を注ぎて慧は留守となり、一は慧に専らにして定を等閑にするの傾きあるに至る、今より八百年ほど以前に、育王山の大慧禪師と、天童山の宏智禪師と、互に門戸を張り、相競ひて宗風を振興せしが、大慧禪師は慧を先とし、之を磨くに公案を以てし、宏智禪師は定を先として専ら坐禪を修む、而して兩師の門下互に相罵りて一を看話禪といへば、一を默照禪といふ、我邦佛家の白隠は大慧の末流なれども、定力も強く、又宏智を崇ふ洞家の天柱も盲坐禪を嫌ふ、然れども其の末流に至ては亦此の弊を脱する能はず、烏尾得庵居士嘗て坦山和尚と洪川和尚とを批評して、坦山は定力勝るゝも智見洪川に及はず、洪川は智見勝るゝも定力坦山に及はずといへり、兩和尚の長所短所はやがて兩宗の長所短所なり、慧を棄て、唯盲坐禪する家といふも、又定力を修めずして單に公案の攻究に焦慮するも、俱に弊たるは一なり、六祖既に定慧一昧にして不二と説き、定を先にして慧を發し、慧を先にして定を發し、定慧各別なりといふ勿れ、此見を作す者は法に二相ありと賊

め置かれたり、何れも其の弊のある所を顧みて改むる所なかるべからず、
口説善語、心中不善。空有定慧、定慧不等。若心口俱善、内外一種定慧
即等。自悟修行、不在於諍。若諍先後、即同迷人。不斷勝負、却增我法、不
離四相。

定慧は不二なり、然るに口に善を説きて心に不善を思ひ、言に高遠の理を説して
身に實踐するなければ、定慧を修すといふと雖も、定慧等しからず、若し心口言行
内外相應一致するとき、定慧相等しといふべし、又佛道の修行は無我の境に達
するにあり、然るに定慧の先後を諍ふ如きは、佛教に入りながら却て我法を増長
するものにして、凡夫迷者と異なる所なきなり。

善知識定慧猶如何等、猶如燈光、有燈即光、無燈即暗、燈是火之體、光
是燈之用、名雖有二、本同一。此定慧法亦復如是。

定慧は慧用にして不二なり、之を譬ふれば、定は燈の如く、慧は光の如し、燈は火の
體にして、光は其の體より發する用なり、定慧燈光名は二あれども、普く義により
て別つのみ、其の體は本同一なり、猶如何の猶は衍字なるべし。

師示衆云、善知識、一行三昧者、於一切處、行住坐臥、常行一直心、是也。

如淨名經云、直心是道場、直心是淨土。

三昧は正定なり、物に落着きの出來るなり、故に一行三昧とは一事に専らにして
餘行を離へざるをいふ、即ち一切處いつれの場處にありても、行住坐臥造次顛沛
常に直心を行するなり、直心とは正直心なり、正直の心とは濁して飲を求め、飢て
食を求むるが如し、腹のへりて食い度いと思ふときには、食の善惡其否を問はず、
これ餘念を離へざるなり、若し餘念の少しにても離はることあらば直心にあら
ず、されば淨名經維摩經には直心是道場、直心是淨土といへり。

莫心行詔曲、口但說直、口說一行三昧、不行直心、但行直心、於一切法、
勿有執著。迷人著法相、執一行三昧、直言不動、妄不起心、即是一行三
昧。作此解者、即同無情、却是障道因緣。

一行三昧とは、一切處に於て直心を行するあり、直心を行すとは、即ち一切の法に
執著なきなり、然るに迷人は一切の法に執著するものにして、一切の法に執著せ
ざるか、一行三昧なりと聞きて、更に又所謂一行三昧に拘泥執著し、兀坐默然とし

て念を止息して何事も思はず、枯木死灰の如く無情なるを一行三昧と誤るに至る、斯くの如きは却て障道の因縁なり、

善知識道須通流。何以却滯。心不住法。道即通流。心若住法。名爲自縛。若言坐不動。是只如舍利弗宴坐林中。却被維摩詰訶。

初段に陳べたるか如く、應無所住而生其心なるときは、所縁の境に對して愛せず、憎せず、物に應し縁に隨ひて毫も礙滯する所なし、是れを通流といふ、若し物に見取をつけて、法に住著するときは、即ち礙滯して通流せず、是れを自縛といふ、即ち自身の分別妄念の繩を以て自身を繫縛するなり、若し坐して動せず、枯木死灰の如くなるを以て一行三昧なりと思はば、是れ禪病に墮するなり、維摩經の弟子品に舍利弗林中に安坐して、維摩居士に打喝せられたる因縁あるも、舍利弗亦この眞意を解せざればなり、

善知識。又有人教坐看心。觀靜不動不起。從此置功。迷人不會。便執成顛。如此者衆。如是相教。故知大錯。

更に又坐相を執するの愚を駭めて、但坐禪を以て心の靜なるを求め、不動不起に至るを以て得たりとし、坐禪の坐禪たる所以をも解せず、偏に坐相を執して尊き大修行とするものは、是れ只足を屈めて踟躕するの似事を爲すに過ぎずして、是くの如きは相に執するの教なりと、

師示衆云。善知識。本來正教。無有頓漸。人性自有利鈍。迷人漸契。悟人頓修。自識本心。自見本性。即無差別。所以立頓漸之假名。

教を判して大小半滿權實頓漸と別てども、教に本來此の差別なし、唯人の根性に利鈍あるが爲め、之を悟るに遲速あるのみ、鈍根下智の輩は漸々に修行して道に契ひ、利根上智の者は頓に開悟す、既に自心の本性を了すれば何の處にか頓漸の別あらん、故に知る頓漸は全く根機の上より教に與へたる假名なることを、

善知識。我此法門。從上以來。先立無念爲宗。無相爲本。無住爲本。無相者。於相而離相。無念者。於念而無念。無住者。人之本性。於世間善惡好醜。乃至冤之與親。言語觸刺欺爭之時。並將爲空。不思酬害。念念之中。不念前境。若前念今念。後念念々相續。不斷。名爲繫縛。於諸法上。念念不住。即無縛也。此是以無住爲本。善知識。外離一切相。名爲無相。能離。

於相即法體清淨。此是以無相爲體。

(111)

此の段無念無相無住を以て法門の宗とし、本とし、示す。無念とは念を空無にするの意にあらず、無にして念するの意なり、無にして念するとは無念にして念するなり、即ち朝な夕な縁に觸れ境に對して念しなから、毫も境に執着するとなし、執着なきが儘に念するが無念の念なり、故に無念者於念而無念といふ。無念なるが故に彼れの是れのと云ふ相を離れ、善惡是非等の相あるが儘に相に執着せざるなり、故に無相者於相而離相といふ。又無住とは住著せざるをいふ、即ち世間の善惡好醜是非邪正より觸刺欺争の時に於ても對境に執着せずして翻害を思はざるが無住なり、若し念々境に住著し前念後念相續して斷えされれば之を繫縛と名く、之に反して念々住著することなれば即ち繫縛なきなり、故に無住爲本といふ。既に念々執着することなくして、善惡邪正等一切の相を離るれば法體清淨なり、故に無相爲本といふ。

善知識於諸境上心不染。曰無念。於自念上常離諸境。不於境上生心。若只百物不思念盡除却。一念絕即死。別處受生。是爲大錯。學道者思之。若不識法意。自錯猶可。更勸他人。自迷不見。又謗佛經。所以立無念爲宗。

此の段重ねて無念を釋す。所緣の境に對して心の染著執著とせざるを無念といふ。自己心念の上に常に諸の境に染著することなければ、境の上に心を起さず、酒あるを見て飲みたき心を起すは、境ありて心を起すなり、飲み度くなりて酒を買ふは、心ありて境を起すなり、共に境に染著するを以てなり、境に染著せざるが無念なり、然るに無念を以て念を空無ならしむるものと考へ、總ての事を思はず、盡く念を除滅せんとするは、所謂小乘の灰身滅智にして、是れ大なる誤なり、若し正しく法の意を解せずして自ら誤るは、猶ほ可なり、他を勸めて同しく或の中に陥らしむるは、其の罪輕しといふべからず、又實に如來の正法輪を毀謗するものといはざるべからず。

善知識云何立無念爲宗。只緣口說見性迷人。於境上有念念上便起邪見。一切塵勞妄想從此而生。自性本無一法可得。若有所得妄說禪福。即是塵勞邪見。故此法門立無念爲宗。

(112)

無念を立て、宗とすることを示す、迷人は口に見性を説けども、有所得の心を以て境に對して執著の念を生じ、邪見を起し、一切の煩惱妄想又此よりして生ず、自性は本來實法として一も得へきものなし、然るに若し有所得の心を以て禍福を説かば是實に邪見なり、故に無念を以て宗とすと、

善知識無者無何事念者念何物無者無二相無諸塵勞之心念者念眞如本性眞如即是念之體念即是眞如之用。

無念とは木石の瞋喜痛痒を感知せざるか如くなるをいふにあらず、鏡の像を照すが如く、水の月を現するが如く、眼に見耳に聞き思はずして知る、之を無念般若の智と云ふ、無者無何事念者念何物とは、慙慙に無念の二字を分説して、心念の無相自性の清淨なるを明にせんとするなり、無者無二相無諸塵勞之心とは、方法即眞如にして、一切諸法の本體は唯是れ眞如一相なり、如是一相無相を了すれば、塵勞の爲に縛せらるゝことなし、念者念眞如本性とは、念々盡く無念の念にして、念々更に他念なきを眞如の本性を念するといふなり、故に念は眞如の體を念する本得の妙用なり、

眞如自性起念、非眼耳鼻舌能念、眞如有性所以起念、眞如若無眼耳鼻聲當時即壞、善知識眞如自性起念、六根雖有見聞覺知不染萬境而眞性常在、故經云能善分別諸法相、於第一義而不動。

眞如は無性を性とし、無念を念とす、故に眞如自性の起念は恰も響の聲に應し、影の形に添へるが如く、外より來らず、内より出てす、緣に應するの時曾て生せず、緣せざるの時曾て滅せず、故に念といふも眼耳鼻舌の能念にあらず、能念根境の所に緣に滯るときは、計念自縛して生死の根を培ふ、然れども根境は眞如以外のものにあらず、故に若し眞如なくんば眼耳鼻聲等亦なかるべし、既に眞如自性の起念あり、六根に見聞覺知ありと雖も、万境に染着せされは念即無念にして、眞性常に自在なり、されは維摩經に諸法差別の相を分別すと雖も、一相に乖かざることを説けるなり、

坐禪 第五

師示衆云此門坐禪元不著心亦不著淨亦不是不動。

此の一段は他の段に比すれば甚だ簡單なれども、坐禪は禪宗に於ける專門修行

なれば特に注意を要す。此門といふは、外道にも禪定あり、佛教にも小乘大乘、宗旨によりて其の名に少異あれども、何れの宗も禪定を用ゐざるはなし、今は遠塵門下の坐禪を説くものなるが故に、他宗に簡ひて此門坐禪といふ、禪宗の本意はすべての執着を拂ふにあり、禪宗に限らず、佛教に於ては執着は最も禁物なり、故に禪宗はまた佛心宗とも稱し、特に心を主とし、自己の本心本性を徹見するを目的とするの宗旨なるにも拘らず、其の心に執着し、又其淨に執着するを嫌ふ、又坐禪の主とする所は不動にあれども、其の不動にも亦執着すべからず、要するに坐禪はすべての執着を打拂ひ、その打拂ふ心をも亦打拂ふなり、

若言著心。心元是妄。知心如幻。故無所著也。

迷人は妄想分別の心相を認めて實有と執着す、心法は元來假和合のものなれば妄法なり、心は假和合の妄法にして夢幻の如くなるを知れば、何物にか貪着すべけんや、

若言著淨。人性本淨。由妄念故蓋覆。眞如。但無妄想。性自清淨。起心著淨。却生淨妄。妄無處所。著者是妄。淨無形相。却立淨相。言是工夫。作此

見者障自本性却被淨縛

人の自性は坐禪して始めて清淨なるにあらず、本來自性清淨心なり、然るに此の自性清淨心は煩惱妄念の爲に覆はれて、眞如の本性隠れて現はれざるなり、故に妄念妄想の情見亡すれば、同時に自性の清淨自然に顯現するなり、然れども若し心を起し淨に著せば淨と妄と二物を見るときとなる、淨と妄と元來反對せる二物ありと思ふ勿れ、吾人妄念の實性即ち淨の本體なり、別に妄法として存する場所なし、執着すれば妄なり、若し又別に淨相を立て、執着すれば、是れ却て淨に縛せらるゝものにして、之が爲に遂に本性を見るを得ず、妄に自性なく淨に定相なきことを知了すれば、妄の避くべきなく淨の著すべきなし、

善知識。若修不動者。但見一切人時不見人。之是非善惡過患。即是自性不動。迷人身雖不動。開口便說他人。是非長短好惡。與道違背。若著心著淨。即障道也。

他人の是非善惡を見ずとは、目を閉ぢ耳を塞きて聲響の如くなるをいふにあらず、鏡の等しく万象を現する如く、其の醜の來るを拒まず、其の美の去るを住めず、

去來たゞ境に在して住著せざるを是非善惡を見ずといひ又自性不動といふ。迷人は足を屈め手を拱して坐禪の姿を爲せども口を開けば直に他人の是非長短を議す。これ道と違背するなり。元來道には善惡是非の差別なければなり。火は火なり。水は水なり。自は自なり。他は他なり。然るに自の好惡を以て他を是非するは火の燃ゆるを以て水の濕すを議すると一般なり。是れ蓋し迷人の心に住著する所あるを以てなり。故に執着は障道なりといふ。

師示衆云。善智識。何名坐禪。此法門中無障無礙。外於一切善惡境界。心念不起。名爲坐。內見自性不動。名爲禪。善知識。何名禪定。外離相爲禪。內不亂爲定。外若著相。內心即亂。外若離相。心即不亂。本性自淨。自定。只爲見境思境即亂。若見諸境心不亂者。是真定也。善知識。外離相即禪。內不亂即定。外禪內定。是爲禪定。

此は坐禪並に禪定の名義を解釋せるなり。而して此の解釋も前段に功德を功徳と總に分ちし如く。坐と禪とを分ち。禪と定とを分ち。禪は梵語。禪那の略にして。定はその譯語なれば。禪と定とは同一のものを梵漢並へ擧げたるなり。然るに之を分ちて釋する如きは蛇足を書くの嫌なきにあらず。果して六祖が斯くの如く説かれしものなるや。甚だ疑はし。さりながら意味に害なくば何人のいふ所なるも探りて可なるべし。坐禪と禪定と共に之を内外に分ちて釋するは假説なり。固より拘泥すべからず。一切境上六塵堆中も自性なく。内外空寂なることを知了すれば。日常の行動云爲皆是れ無作の大禪なり。然るに境と心とを別にし。境に對して心念を起し。之に住著するか。故に善惡是非の二物を見。之が爲に内心動亂するに至る。若し夫れ諸法の一相無相なることを了せば。一切の境に對して境のまゝに隨ひ心亂るゝことなし。之を坐禪といひ。又禪定といふ。

菩薩戒經云。我本性元自清淨。善知識。於念念中。自見本性清淨。自修自行。自成佛道。

妄の塵垢を脱して更に別に淨相を得るにあらず。佛も衆生も本然の性空寂なり。故に本性元自清淨といふ。清淨は空寂なりといふ。と前に屢辨せしが如し。日常色を見る念の中。塵を聞く念の中に。みづから本性の清淨なるを見。自修自行して佛道を成すべしと。坐禪のとは承陽大師の普勸坐禪備あり見るべし。

時大師見廣韶泊四方士庶駢集山中聽法於是升座告衆曰善來諸善知識此事須從自性中起於一切時念念自淨其意自修自行見自己法身見自心佛自度自戒始得不假到此既從遠來一會于此皆共有緣今可各々胡跪先爲傳自性五分法身香次授無相懺悔衆胡跪

此の段説く所敢て禪宗に限らざれども微頭徹尾自と主とする所は亦他と異なる要點なり而して此段は廣州韶州などより群集せる士庶に對して六祖説法せるものなりすべて自性の中より起るものは止めんとして止むべからず例へば火の燃え水の濕すは各その自性より生ずるものなるが故に之を止むるを得ざるが如し自性より起る自修自行とは疲るれば寝ぬ夜か明くれば起くこれ自修自行の姿なり既に一切時に於て念念清淨に自修自行すれば別に佛や神の御厄介になるに及はず自度自戒してみづから自己の法身自己の佛即ち自分の本心本性を見るべし何ぞわざ／＼此に來るに及ばん併し折角遠方より此に來會するもの亦宿縁なきにあらず各々胡跪やよ自性五分法身香及び無相の懺悔を傳

へんと胡跪とは俗に片足を折り片足を立つるをいへど眞の胡跪の式は別に説かれども今は要なければ略す今は只印度佛教の儀式を用ひしむると見れば好し五分法身香とは戒定慧解脫解脫知見の五分法身を香に喩ふるなり佛教にては儀式の前に香を焼くを例とすその香を焼くに當り五分法身の偈を唱ふ故に五分法身の偈を亦焼香の偈ともいふ而して自性五分法身といふ他より來るにあらず自分より熏發するものあることを示すなり

師曰一戒香即自心中無非無惡無嫉妬無貪瞋無劫害名戒香

通常戒法といへば五戒八戒十戒二百五十戒などあれど要するに戒は防非止惡を義とし惡を爲さざるが戒の本分なり然るに今は通常戒法の話を爲さざる所却て妙味あり曰く自心の中に非惡嫉妬貪瞋劫害なきを戒とすと自心の中には本來此等の惡はなきものなれども境に迷ふが故に生ずるなりもとより戒其者は法身なり天理なり殺生偷盜等は釋迦が戒法を設けて止めたるによりて惡事なるにあらず自分の命を取られ自分の物を取らるゝとの厭ふべくんば他の命を取り他の物を取ることの惡事たるは分り切つたる話なり

二定香。即觀諸善惡境相。自心不亂名定香。

定は善惡の境に對して心の亂れざるなり。佛を見て喜ひ、閻魔を見て恐るゝは、閻魔に借金あるか、佛に御無心申したき野心あればなり。これ境の爲に心の亂るゝなり。若し諸法本來寂滅不動なることを了せば、善惡の境によりて心の亂るゝことなかるべし。一切善惡の境に對して取らず捨てずして、而も心相を妨げず、能く心性を觀するを自性不亂の定香といふ。

三慧香。自心無礙。常以智慧觀照。自性不造諸惡。雖修衆善。心不執著。敬上念下。矜恤孤貧。名慧香。

慧は定によりて起り、定は戒によりて起る。上下著けて甚句は踊られぬ如く、形正しければ従ひて心も正しくなるなり。今定を以て形を正しくし、常に眞智を以て自性を觀照すれば、自ら惡は造られず、善を行するなり。而して惡を造らぬ儘にまた惡を造らぬといふ心も起らず、善を修すれども亦善を修するといふ所に目をつけず、斯くの如く善惡を見されども、自ら上を敬ひ下を慈み、貧窮孤獨を矜恤愛憐するの思あり、之を慧香とす。

四解脫香。即自心無所攀緣。不思惡。不思善。自在無礙。名解脫香。

解脫は慧によりて生ず、心に束縛なくして自在無礙なるを解脫といふ。攀緣を惡むは惡を思ふなり、解脫を願ふは善を思ふなり、攀緣も解脫も思はされは攀緣する所なきなり。

五解脫知見香。自心既無所攀緣。善惡不可沈空守寂。何須廣學多聞。識自本心。達諸佛理。和光接物。無我無人。直至菩提。眞性不易。名解脫知見香。

前の解釋より顯るゝ智慧の用が解脫知見なり、既に惡をも思はず、又善をも思はず、境に對して見取りを著くるとななければ、その空寂といふ者にも亦執着することなし、若し空寂に執着すればこれ二乘の斷見に墮するなり、既に諸法の無相空寂なると了し、自の本心を曠得すれば、これ諸佛の理に通達するなり、是に於て和光同塵して攝化利生の方便を爲す、之を解脫知見香といふ。前の四は自利なり、今この解脫知見香は利他なり。

善知識。此香各自內熏。莫向外覓。

香の内より熏發するか如く、自性の智火冥に一心に熏して發現するなり、他に向て之を求むれども得べき様なし、

今與汝等授無相懺悔滅三世罪令得三業清淨善知識各隨語一時道弟子等從前念今念及後念念念不被愚迷從前所有惡業愚迷等罪悉皆懺悔願一時消滅永不復起弟子等從前念今念及後念念念不被僞誑染從前所有惡業僞誑等罪悉皆懺悔願一時消滅永不復起弟子等從前念今念及後念念念不染嫉妬從前所有惡業嫉妬等罪悉皆懺悔願一時消滅永不復起善知識已上是為無相懺悔

通常懺悔には佛前懺悔對衆懺悔などいふあり、此等を有相の懺悔とす、今は世間に所謂有相の如き儀式に拘らざるを以て無相の懺悔といふ、三世の罪を滅すといふは過現の罪は明なれども、未來の罪を滅すといふは解し難きが如し、東京の空氣を一分動かせば世界中の空氣にその波動を及ぼすが如く、時間も空間に同じく、三世は通貫して本來一枚のものなればなり、是非曲直善惡邪正を認めずして罪福心を全くなくしたるが懺悔なり、懺悔には普通花嚴經の我昔所造の偈を

唱ふれども、今は此等の儀式に拘らす、愚迷僞誑嫉妬の三を諸惡の首となす、愚迷は痴なり、僞誑は貪なり、嫉妬は瞋なり、

云何名懺。云何名悔。懺者懺其前愆。從前所有惡業愚迷僞誑嫉妬等罪悉皆盡。懺永不復起。是名為懺。悔者悔其後過。從今以後所有惡業愚迷僞誑嫉妬等罪。今已覺悟。悉皆永斷。更不復作。是名為悔。故稱懺悔。凡夫愚迷只知懺其前愆。不知悔其後過。以不悔故。前愆不滅。後過又生。前愆既不滅。後過復又生。何名懺悔。

懺は梵語、懺摩の零語なり、譯して悔過といふ、禪定の如く梵漢並べ用ゐたる熟語なり、之を分ちて釋するも甚た可笑しきことなれど、音聲に拘泥せず、其意を取れば味あり、懺は前愆、愆は過なり、を悔ひ悔は後過を悔ゆるといふ、即ち懺は過去にして、悔は未來を指す、悔は元來既往を指す言なるに未來の過を悔ゆるとは自爾相違せるが如きも、三世は通貫して一枚なるが故に、眞個前過を悔ゆるれば未來に再び過を犯すことなかるべき理なり、若し再び前と同じき過を犯すことあらば、假令前過を悔ゆといふと雖も、未だ眞の懺悔とはいふべからざるなり、

善知識。既懺悔已。與善知識發四弘誓願。各須用心正聽。自心衆生無邊誓願度。自心煩惱無邊誓願斷。自性法門無盡誓願學。自性無上佛道誓願成。

(一六)

通願別願といふことは、菩薩に限らず、一家内にも家内安穩息災延命商賈繁昌は夫婦子供權助おさんに至るまで等しく希ふ通願なり、されどまた亭主は亭主、家内は家内、權助は權助おさんはおさん、各主とする役目もあれば、其人々々に殊なれる別願あるべし、今その四弘誓願はすべての佛菩薩の通願なり、彌陀の四十八願、藥師の十二願などは別願なり、さてこの四弘誓願に今は自心又は自性の二字を冠したり、其の意に他宗と異なる所あるを知るべし、次下一々の願に就て釋す、善知識。大家豈不道。衆生無邊誓願度。恁麼道。且不是慧能度。善知識。心中衆生。所謂邪迷。心誑妄。心不善。心嫉妒。心惡毒。心如是等。心盡是衆生。各須自度。是名眞度。何名自性自度。即自心中。邪見煩惱愚痴。衆生。將正見度。既有正見。使般若智打破愚痴迷妄。衆生。各々自度。邪來正度。迷來悟度。愚來智度。惡來善度。如是度者。名爲眞度。

大家といふにいろ／＼の說あれど、諸君子といふほどのことなるべし、前に四弘願一々に自心の二字を冠せり、されば今衆生といふは自己心中の衆生を指す也、自心中の衆生とは、即ち邪迷誑妄不善嫉妬惡毒などの心といふ、斯くの如き惡心は實に數ふべからざるが故に無邊といふ、既に自心中の衆生なり、他に依て度せらるへからず、宜しく自性自度すべきなり、自性自度とは邪見の心は正見を以て度し、愚痴は智慧を以て度し、惡は善を以て度する如きをいふ、斯くの如く自心に自心を度するを眞の濟度といふなり、今邪來正度、迷來悟度、愚來智度、惡來善度といふは、且らく對待していへるなり、邪の無性無性なるを知るが即ち正を以て度するなり、乃至惡の眚性なきを知るが即ち善を以て度するなり、既に邪や迷や愚や惡や之を打拂ひ了れば、同時に正も悟も智も善も存すべからず、病あるが故に之に對する健康あり、病を治し了りて健康となれば、同時に健康といふことをも存せざるが如し、

又煩惱無邊誓願斷。將自性般若智除却虛妄思想心也。

凡夫の虛妄分別の思想を以て、煩惱と菩提とを別にし、生死と涅槃とを隔つ、煩惱

(一七)

や恰も夢中の所作の如く、無所有にして實に断すべきものあることなし、今自性般若の智を以て虚妄の思想を除却し、煩惱即菩提、生死即涅槃の理を体達する、之を煩惱を断すといふなり、

又法門無盡誓願學。須自見性。常行正法。是名真學。

見性とは只自己の心を見るのみにあらず、一切諸法の性をも見るをいふ、常行正法とは火の焼き水の濕すが如く、疲るれば睡り、飢ふれば食ひ、親に對すれば孝、君に對すれば忠、運水搬柴、煎茶炊飯、日常聖末の一舉一動、すべて自在無礙なるが常行正法なり、之を自性の真學といふ、

又無上佛道誓願成。既常能下心。行於真正。離迷離覺。常生般若。除妄即見佛性。即言下佛道成。常念修行是願力法。

無上とは一切絶對畢竟空の義なり、佛道とは正覺なり、道は通達無碍を義とす、昔し僧あり古人に問ふ、如何なるか是れ道、曰く、牆外庭垣の外にあるでないか、這箇の道を問はず、いや垣の外の小路のことではない、那箇の道を問ふ、曰く、大道、大道は長安に透る、諸侯も通れば乞食も通る、此の山高水長底の大道、往くとして碍あり

ることなきが如く、自心本然の正覺は一切の境界處として通せざることなし、之を佛道といふ、迷を離るれば覺なり、妄を除けば真なり、然れども迷も妄も別に覺と真との外に存するに非ず、迷を離ると共に覺を離れ、妄を除くと同時に真亦去る、是れ即ち佛性を見、佛道を成するなり、此の如く常に念して修行するを願力の法といふ、禪門の修行は證上の修にして果上の行なれば、恰も真宗に信心獲得したる後の報恩の行と等しく、悟に向ふものにはあらで、悟りたる上より、為人度生の修行なれば、いつまでといふ限りあるべからざるなり、

善知識。今發四弘誓願了。更與善知識授無相三歸依戒。善知識歸依。覺兩足尊。歸依正離欲尊。歸依淨衆中尊。從今自去稱覺爲師。更不歸依邪魔外道。

三歸戒は諸宗共に之を用ふれども、彼のは有相なり、今は無相の三歸戒なり、三歸とは佛法僧の三寶に歸依するなり、三寶に一時と住持と現前との三種の差別あり、住持三寶とは、木佛金佛が佛寶、黃卷赤軸が法寶、剃染持戒の徒が僧寶也、現前三寶とは、釋迦が佛寶、三藏十二部教が法寶、阿難迦葉等が僧寶なり、今は一時三寶に

就いていふ、兩足尊離欲尊、衆中尊とは、諸宗にも唱ふる所なれど、其の上に覺正淨の字を冠せるが今の特殊なる所とす、兩足尊とは福智(身心)二嚴の満足するをいふ、二嚴満足は即ち自覺覺他覺行圓滿なり、覺行圓滿する者は佛陀の外にあるとなし、故に兩足尊は佛を指す、佛は覺なり、覺は迷なきなり、されど覺者を取て遠く求むるに及ばず、吾人の自性本來迷なきなり、故に覺兩足尊を詳かにいへば、自らの覺の兩足尊といふべし、離欲尊とは離欲は煩惱を離るなり、又離塵尊と云、即ち法寶を指す、水の濕し火の燃やすは權利にもあらず、義務にもあらず、法の儘に顯るゝは離欲の姿なり、此の法は邪にあらず、故に正の字を冠す、衆中尊とは和合にして、即ち僧寶なり、天地間に存在する事物は其數無量無限なれども、而も秩然として存在するものは諸物互に和合すればなり、故に天地間にありて最も尊きものは和合なり、故に和合を以て衆中尊といふ、此の和合には一切の汚穢を離る、故に淨の字を冠す、若し自心の覺と正と淨との外に佛法僧の三寶ありとするものは邪魔外道なり、又諸宗共に受戒の儀式には三師七證などあれど、今は自の一鉢三寶を説くものなるが故に、他人を證據人とするに及ばず、自分の性の上に具有

する覺正淨を證據人とすべしといへり

勸善知識、歸依自性、三寶、佛者覺也。法者正也。僧者淨也。自心歸依、覺邪迷不生。少欲知足、能離財色。名兩足尊。自心歸依、正念々無邪見。以無邪見、故即無人我貢高貪愛執著名離欲尊。自心歸依淨、一切塵勞愛欲境界、自性皆不染著名衆中尊。若修此行、是自歸依。

自ら自性の三寶に歸依すへきことを示す、兩足離欲衆中と三尊の稱あれども、只是一心具有の本徳なり、財色人我愛欲等の名あれども、一念著我の妄計を出でず、自歸依のことは、華嚴經に説かれて、諸宗どもに常に唱ふる文の如し、

凡夫不會從、日至夜受、三歸戒。若言歸依佛、佛在何處。若不見佛、憑何所歸。言却成妄。善知識各自勸察、莫錯用心。經文分明、言自歸依佛、不言歸依他佛。自佛不歸、無所依處。今既自悟、各須歸依自心、三寶、內調心性、外敬他人、是自歸依也。

自心の本佛を指して他佛に歸依すれば、毫も依る所なく、其の歸依すといふ言既に虛妄に陥るを以て、各自心の三寶に自歸して自悟すへきことを勸む。

善知識既歸依自三寶。竟各々至心。吾與說。一鉢三身自性佛。令汝等見三身。了然自悟。自性總隨我道。於自色身歸依。清淨法身佛。於自色身歸依。千百億化身佛。於自色身歸依。圓滿報身佛。善知識。色身是舍宅。不可言歸。向者三身佛。在自性中。世人總有爲自心迷。不見內性。外覓三身如來。不見自身中。有三身佛。汝等聽說。令汝等於自身中。見自性。有三身佛。此三身佛。從自性生。不從外得。何名清淨法身。世人性本清淨。万法從自性生。思量一切惡事。即生惡行。思量一切善事。即生善行。如是諸法。在自性中。如天常清。日月常明。爲浮雲蓋覆。上明下暗。忽遇風吹雲散。上下俱明。万象皆現。世人情常浮游。如彼天雲。善知識。智如日。慧如月。智慧常明。於外著境。被妄念浮雲蓋覆。自性不得明朗。若遇善知識。聞真正法。自除迷妄。內外明徹。於自性中。万法皆現。見性之人。亦復如是。此名清淨法身佛。

上に三歸戒を了り、次に法報化三身の義を示す。法身は絶対平等の本體なり、報身は万法差別界より平等の法身へ戻りたる姿なり、而して化身は其の本體より更

に反射して作用を差別界に現する姿なり、報身は向上的にして、化身は向下的なり、今は法化報の次第とす、此の三身は別々のものにあらずして、一鉢の上の三身なり、而して此の三身は自性の中にあリ、故に一鉢三身自性佛といふ、何名清淨法身以下は法身を別釋す、一切衆生の自性即ち本體は本來清淨の法身佛なり、此の自性より一切善惡染淨の万法を生ず、然るに外境に執著して忘念の浮雲常に自性の天を覆ひて清淨の光を現せしめず、故に執著を拂ひ迷妄を除けば本體眞如朗然として茲に現し、内外明徹にして万法此中に炳現すべし、之を清淨法身佛と名く、所謂見性とは此の法身の顯現するをいふ也、
善知識。自心歸依。自性。是歸依眞佛。自歸依者。除却自性中不善心。嫉妒心。諂曲心。吾我心。誑妄心。輕人心。慢他心。邪見心。貢高心。及一切時中不善行。常自見已過。不說他人好惡。是自歸依。常須下心。普行恭敬。即是見性通達。更無滯礙。是自歸依。

此の文は前の三歸戒の末なる是自歸依也の下に在るを可とす、恐くはこれ前後倒置するかと天桂和尚はいへり、文解し易し、讀みて知るへし、

何名千百億化身。若不思方法。性本如空。一念思量。名為變化。思量惡事。化為地獄。思量善事。化為天堂。毒害化為龍蛇。慈悲化為菩薩。智慧化為上界。愚痴化為下方。自性變化甚多。迷人不能省覺。念々起惡常行惡道。廻一念善。智慧即生。此名自性化身佛。

前に法身を示し、第二に化身を説く。千百億化身とは梵網經に、我今盧遮那方に蓮華臺に坐す、周圍せる千花上に亦千の釋迦を現はす、一花に百億の國ありて、一國に一釋迦ありといへり、雙林に涅槃を示せる八十の老比丘のみ化身佛なるにはあらず、耶蘇も孔子もソクラテスもカントも皆化身佛なり、更に手近き所にていへば、水となりては吾人の渴を醫し、米となりて飢を救ふもの、亦皆法身の化現ならざるはなし、豈に皆に千百億の化身ならんや、其の實は無量无边の化身釋迦あるなり、さて前の法身は吾人本心の清淨ある部分を指していふ、今化身は吾人の諸法に對して思量分別する部分をいふ、而して其の思量分別が法身に向て反射するを報身とす、今吾人は方法を思はず、愛憎好惡の念を全く離るれば、如空にして法身なり、若し食ひ度ひ飯みたひと一念思量するときは、種々の變化をなす、迷

人は常にその念を起して惡事を行し、地獄となり、龍蛇となりて、惡化身を現す、若し一念善に歸りて善事を行すれば、天堂となり、菩薩となりて、善化身を現す、此の善化身を自性の化身佛と名くるなり。

何名圓滿報身。譬如一燈能除千年暗。一智能滅万年愚。莫思向前已過。不可得常思於後。念々圓明自見。本性善惡。雖殊。本性無二。無二之性。名為實性。於實性中。不染善惡。此名圓滿報身佛。自性起一念惡。滅万劫善因。自性起一念善。得恒沙惡盡。直至無上菩提。念々自見。不失本念。名為報身。

此の文は第三に報身を釋す、圓滿とは因圓果滿なり、物の確かに歴然と具りたる相をいふ、恒沙の惡盡くるも、万劫の善を滅するも、皆一念の轉處にあり、故に念々自らその本性を見て、本性を失はず、善惡に染著せざる之を報身といふ。

善知識從法身思量。即是化身佛。念々自性自見。即是報身佛。自悟修修。自性功德。是真歸依。皮肉是色身。色身是舍宅。不言歸依也。但悟自性。三身即識自性佛。

平等法身の本跡より方法を見渡すは化身なり、差別の方法より法身へ反射するは報身なり、例へば化身は君より万民を見るか如く、報身は万民の心が君一人に歸し、君の心を以て心とするか如し、眞の歸依なる者は自性本然の功徳を自見自悟自修するをいふ、若し自性を措いて他に佛を求むるものは眞の歸依に非ず、皮肉色身は心性の住する舍宅なり、色身を以て木佛、經像を禮し、以て眞に歸依すと思ふは甚しき心得違なり、臨濟禪師のいはく、**偏**、一念心上、清淨光是偏、**偏**、屋裏、法身佛、**偏**、一念心上、無差別光是偏、**偏**、屋裏、報身佛、**偏**、一念心上、差別光是偏、**偏**、屋裏、化身佛、此三種身是汝、即今日前聽法底人、祇不向外馳求有此功用と、

吾有二無相頌、若能誦持、言下令汝積劫迷罪一時消滅、頌曰、迷人修福不修道、只言修福便是道、布施供養福無邊、心中三惡元來造、擬將修福欲滅罪、後世得福罪還在、但向心中除罪緣、各自性中真懺悔、忽悟大乘真懺悔、除邪行、正即無罪、學道常於自性觀、即與諸佛同一類、吾祖惟傳此頓法、普願見性同一體、若欲當來覓法身、諸離諸法、相心中洗、努力見、莫悠悠、後念忽絕、一世休、若悟大乘、得見性、虔恭合掌

至心來。

此の偈頌は七言にして二十句あり、罪福心を除きて自性を觀し大乘を悟るべきことを勸むるあり、凡夫は常に福徳を修して道を修せず、其の福徳は皆目的を立て報酬を得んとするにありて、布施供養するも皆後に報酬を得、之によりて罪を滅さんとする者なり、元來罪福を二と見るは迷見なり、此の根本の迷見を去らすして、福を脩し以て罪を滅せんとするは永嘉大師の天に仰いて箭を射るが如し、勢力盡くれば箭自から落つといはれたる如く、福力盡くるときは罪復本の如く、依然として存すべし、故に但向心中除罪縁といふ、眞個に道を修するとは自性を觀するなり、之を大乘を悟るといふ、大乘とは、要するに一切衆生をして諸共に安穩快樂を得せしめんとするにあり、一切衆生の快樂とは宇宙の万象をして各其所を得せしむるなり、花をして花たらしめ、紅葉をして紅葉たらしむるは即ち大乘なり、瓦は屋の上に在り、土臺は椽の下にあり、瓦は屋根の上にあるまゝに光を放ち、土臺は椽の下にあるまゝに光を放つ、是れ大乘なり、瓦は上に居るを以て尊大なり、土臺は下に居るを以て謙遜なりといふべからず、元來上下尊卑の別なき

(二二八)
なり。宇宙万象元來尊卑貴賤なく、之と等しく罪福もあることなし。但時により場所によりて、其の分に應じて行ふが是れ大乘にして、眞の懺悔なり。斯くの如く常に自性を觀すれば、即ち諸佛と同一類なり。吾祖惟傳此頓法以下は至心に法を求むべきとを勸むるなり。

師言善知識總須誦取。依此修行。言下見性。雖去吾千里。如常在吾邊。於此言下不悟。即對面千里。何勤遠來。珍重好去。一衆聞法。靡不開悟。歡喜奉行。

言下に見性せば吾を去る千里と雖も常に吾が邊にあるが如しといへり。只に六祖のみならんや。朝々佛を抱きて起き、夜々抱きて眠るもの。豈に亦樂しからずや。珍重とは左様ならんといふが如し。禪宗に多く聞ふる支那の俗語なり。

機緣 第七

師自黃梅得法。回至韶州曹侯村。人無知者。有儒士劉志略。禮遇甚厚。志略有姑。爲尼。名無盡藏。常誦大涅槃經。師暫聽。即知妙義。遂爲解說。尼乃執卷問字。師曰。字即不識。義即請問。尼曰。字尙不識。焉能會義。師

曰。諸佛妙理。非關文字。尼驚異之。遍告里中耆德。云。此是有道之士。宜請供養。有魏武侯玄孫曹叔良及居民。競來瞻禮。時寶林古寺自隋末兵火已廢。遂於古基重建梵宇。延師居之。俄成寶坊。師住九月餘日。又爲惡黨尋逐。師乃遁于前山。被其縱火焚草木。師隱身換入石中。得免。石今有師跌坐膝痕及衣布之紋。因名避難石。師憶五祖。懷會止藏之囑。遂行隱于二邑焉。

諸法の眞理は本來無名相なり。この無名相を悟解せしめんが爲に強ひて名相を假りて説示するものなり。故に無名相を悟らば同時に名相を捨てざるべからず。然るにいつまでも名相に執着し拘泥するものは、門開きて尙瓦を握るが如し。六祖が諸佛の妙理文字に關はるに非すと喝破せるもの。其の旨深しと謂ふべし。末文の六祖身を石中に隠して難を免るといふ怪談は、後人の附會説たることといふまでもなし。

僧法海。韶州曲江人也。初參祖師。問曰。即心即佛。願垂指諭。師曰。前念不生。即心。後念不滅。即佛。成一切相。即心。離一切相。即佛。吾若具說。窮

劫不盡。聽吾偈曰。即心名慧。即佛乃定。定慧等等。意中清淨。悟此法門。由汝習性。用本無生。雙修是正。法海言下。大悟。以偈讚曰。即心元是佛。不悟而自屈。我知定慧因。雙修離諸物。

(110)

法海の傳は傳燈錄第五五燈會元第二に出つ以下出づる所六祖門六祖壇經はこの法海の編する所なりといふ。法海即心即佛の旨を問ふ。六祖答ふるに不生不滅を以てす。其の意は一念起動すれば同時に生滅あり。其の念の起動する生滅其のまゝが不生不滅なることを了すれば即心即佛なり。而て茲に念あれば一切の相を成す。然れども見るかまゝ、聞くかまゝ、其相に執着せざるが即心即佛なりと。六祖更に偈を説く。其の意は各自の心性は靈鑑不昧なるか故に即心を慧と名け。寂靜不動なるを以ての故に即佛を定とす。然れども定慧別体あるに非ず。定は慧に等しく慧は定に等しければ等々といふ。等々一本等持といふ。意中本然清淨あれども此の法門を悟るは習性に由る。習性とは修性といはんが如し。修は性上の修性は修中の性。性の外に修なく。修の外に性なし。修性本と無二にして本性本修無修無性なり。是を以て修習に由るといへども、其の用心や本然無生自性清淨なり。

即ちこれ定慧雙修、眞實の正修行なり。故に用本無生雙修是正といふ。法海言下に大悟し、偈を以て讚す。其の意は心は本來是れ佛なり。然るに自心の本來佛たることを悟了せずして、佛と衆生とを隔て、自ら屈して迷人とす。定慧等しきことを悟りて双修すれば迷相を離ると。

僧法達、洪州人。七歲出家。常誦法華經。來禮祖師。頭不至地。師訶曰。禮不投地。何如不禮。汝心中必有一物。蘊習何事。耶。曰。念法華經。已及三千部。師曰。汝若念至萬部。得其經意。不以爲勝。則與吾偕行。汝今負此事業。都未知過。聽吾偈曰。禮本折慢幢。頭奚不至地。有我罪即生。亡功福無比。師又曰。汝名什麼。曰。法達。師曰。汝名法達。何曾達法。復說偈曰。汝今名法達。勤誦未休歇。汝今有緣故。吾今爲汝說。但信佛無言。蓮華從口發。達聞偈。悔謝曰。而今而後當謙敬一切。弟子誦法華經。未解經義。心常有疑。和尚智慧廣大。願畧說經中義理。師曰。法達。法即甚達。汝心不達。經本無疑。汝心自疑。汝念此經。以何爲宗。達曰。學人根性暗鈍。從來但依文誦念。豈知宗趣。師曰。吾不識文字。汝試取經誦一編。吾當

(111)

爲汝解說。法達即高聲念經。至譬喻品。師曰。止。此經元來以因緣出世爲宗。縱說多種譬喻。亦無越於此。何者。因緣。經云。諸佛世尊。唯以一大事因緣出現於世。一大事者。佛之知見也。世人外迷著相。內迷著空。若能於相離相。於空離空。即是內外不迷。若悟此法。一念心開。是爲開佛知見。佛猶覺也。分爲四門。開覺知見。示覺知見。悟覺知見。入覺知見。若聞開示。便能悟入。即覺知見本來真性。而現出現。汝慎勿錯解經意。見他道。開示悟入。自是佛之知見。汝輩無分。若作此解。乃是謗經毀佛也。彼已是佛。已具知見。何用更開。汝今當信。佛知見者。汝自心更無別物。蓋爲一切衆生自蔽。光明貪愛塵境外緣。內擾甘受驅馳。便勞他世尊。從三昧起。種々苦口勸令勸息。莫向外求。與佛無二。故云。開佛知見。吾亦勸一切人。於自心中常開佛之知見。世人心邪。愚迷造罪。口善心惡。貪瞋嫉妒。諂佞我慢。侵人害物。自開衆生知見。若能正心。常生智慧。觀照自心。止惡行善。是自開佛之知見。汝須念念開佛知見。勿開衆生知

見。開佛之知見。即是出世。開衆生知見。即是世間。汝若但勞々執念。以爲功課。者何異。犂牛愛尾。達曰。若然者。但得解義。不勞誦經。耶。師曰。經有何過。豈障汝念。只爲迷悟在人。損益由己。口誦心行。即是轉經。心悟轉法華。聽吾偈曰。心迷法華轉。心悟轉法華。誦經久不明。與義作隣家。無念念即正。有念念成邪。有無俱不計。長御白牛車。達聞偈。不覺悲泣。言下大悟。而告師曰。法達從昔已來。實未曾轉法華。乃被法華轉。再啓曰。經云。諸大聲聞。乃至菩薩。皆盡思共度量。不能測佛智。今令凡夫。但悟自心。便名佛之知見。自非上根。未免疑謗。又經說。三車。羊鹿牛車。與白牛之車。如何區別。和尙再垂開示。師曰。經意分明。汝自迷背。諸三乘人。不能測佛智者。患在度量也。饒伊盡思共推轉。加懸遠。佛本爲凡夫說。不爲佛說。此理若不肯信者。從他退席。殊不知坐却白牛車。更於門外覓三車。况經文明向汝道。唯一佛乘。無有餘乘。若二若三。乃至無數。方便種々。因緣譬喻。言詞是法。皆爲一佛乘故。汝何不省。三車是假。爲

昔時故。一乘是實。爲今時故。只教汝去假歸實。歸實之後實亦無名。應知所有珍財盡屬於汝。由汝受用。更不作父想。亦不作子想。亦無用想。是名持法華經。從劫至劫。不釋卷。從晝至夜。無不念時也。

法達といふ僧少より出家し、常に法華經を讀誦す、自ら善業を修せりと心に慢し、來りて六祖を禮するに、甚た不遜なり、六祖之を見て喝破し、汝か心中に一物あるべしと詰る、果して法達得々として法華を誦する三千邊に及ふと答ふ、天竺曰く、乞食のガツ、六祖いはく、万部を念して經意を解すとも、其の功に誇らず、何とも思はざるに至らば吾と偕に行かん、汝今僅に三千部を誦して慢心を懷き、其の邊を知らざるは愚なり、吾が偈を聽け、禮は讓なり、慢心を去らざるべからず、汝何の不遜ぞ、禮して頭地に至らず、罪は慢他の我心より生ず、我心を去り功徳を亡ずれば、福比類なしと、六祖又彼が名の法達と稱するを聞き、何そ法に違せんと嘲り、復偈を説く、佛一代の説法一字不説といふことを了して讀誦すれば、蓮花口より發すべし、徒に空誦して休歇せざるも何の益あるべきと、法達教を蒙り慚謝して自今禮恭なるべきとを誓ひ、且つ曰はく、弟子經を誦すれども其の義を解せず、常に疑

を懷く請ふ爲に經中の義理を説けど、法達法即甚達乃汝心自疑の十八字傳灯に無し、六祖乃ち法達をして經を誦せしめ、警諭品に至り之を止めしめて曰はく、此の經元來因緣出世を以て宗趣とす、因緣とは經に曰はく、諸佛世尊唯以一大事因緣出現於世とある是なり、所謂一大事とは佛の知見なり、知見は佛に限らず、衆生にも衆生の知見あり、狗にも猫にも皆各其の知見あり、今佛の知見は因にありては一大事といひ、果にありては一切種智といふ、佛は一切衆生離れ彼れの差別なく、佛と同じき知見を起さしめんとするか佛出世の本懷なり、衆生をして聲聞たらしめ菩薩たらしむる教は多けれど、所有衆生をして此のまゝ佛知見を開悟せしめんとするものは唯法華の一經のみ、然るに世人は外境に對して相に執着し、内心に於て空に住着して迷ふ、若し境に對して境のまゝに着せざれば是れ相を離るゝなり、相を離るれば即ち空寂なり、されど其の空といふものをも止めず、相を離ると同時に空も又離る、是れ内外俱に迷はざるなり、此の如く了するを佛知見を開くといふなり、世人外迷より而得示現に至る八十四字傳灯に無し、見よ他の道ふことを開示悟入は自ら是れ佛の知見なり、我輩衆生の分齊にあらずと、

此くの如く思へるものは謗經毀佛の罪人なり、何人とも雖も佛知見を具せざるはなし、何その他の佛祖を勞して之を開くことを要せんや、佛知見は只汝が自心なり、豈に自心以外に別佛あらんや、然るに一切衆生は自ら自己の光明を陰蔽して、五塵の外境に貪着愛執し、外境に縁して内心擾亂し、甘受驅馳するが爲に、他の諸佛世尊は憐みて方便說法したまふなり、されは一切衆生は外に向て佛を求むる勿れ、衆生と佛と本來無二無別同一法性なり、此くの如く一念之を了するを開佛知見といふなり、吾常に一切の人に向て自心の中に佛知見を開くべきことを勤むれども、世人の愚迷なる、口善に心悪しく、貪瞋嫉妬諂佞我慢を事として、只衆生知見を開くのみ、若し正心にして自の智慧を生し自心を觀照すれば、自ら佛知見を開くべし、吾亦勸より、即是世間に至る百字傳燈に無し、汝若し但勞々役々として讀誦を爲し、之に執して功課とせば、羸牛の尾を愛するに同じ、羸牛尾を愛すとば、羸牛の尾に毒あり、羸牛自を害するを知らずして、之を嘗むといふ、自を害するものを愛するの喩なり、法達尙祖意を了せずして曰はく、若し然らば經を解するを得ば經を誦せざるも可なりやと、六祖いはく、經に何の過かある、經汝の念を障ゆ

ることなし、迷悟は人にあり、經にあらざ、損益汝に由る、經に由らず、故に口に讀みて心に行すれば汝經を轉するなり、口に讀むも心に行せざれば汝經に轉せらるゝなりと、法華云云法華の事は承陽大師の正法眼藏に參せよ、六祖更らに偈を説き、有念の念は即ち邪なり、念するまゝ念に着せざる無念の念は正なり、有念の念を去ると同時に無念といふ念も亦去り、有無俱に遣りて計せざれば大白牛車に御するなりと、法達偈を聞き、始めて廓然として大悟す、更に問して曰はく、經に聲聞菩薩いかに佛智を測らんとするも得ずと説く、今凡夫の自心を悟るを佛知見と名くといふは、上根の者に非すば信し難し、又法華に三車の喩あり、羊鹿牛車と白牛車との區別如何と、六祖答へて曰はく、汝分明なる經意に感ふ、三乗の人佛智を測る能はざるは、考へるから分らぬなり、考ふれば考ふるほど分らぬ様になるなり、佛は元來佛の爲に説くにあらす、迷者の衆生に説けるなり、故に此の理を信すること能はざる者は、勝手に退座するを妨げざりしなり、殊に白牛車に坐し佛の傍にありながら、更に門外に三車を覓むるが如きは、以ての外なり、經に既に唯有一乘法無二亦無三と説く、其の他種々の方便因緣譬喩等の如きは、皆是れ一佛

乘に入らしめんが爲のみ、三車は法華已前の三乘教なり、是れ一乘に入らしめんか爲の方便權教なり、今の白牛車の一乘は實教なり、權假は眞實に入らしめんか爲め、眞實は權假に對するもの、既に權假を去りて眞實に入れば、權假の名なきと共に亦眞實の名をも止めず、長者窮子の喩に於けるも亦然り、父子たること分りて一切の家財悉く窮子に譲り了れば父と思ひ子と思ふの想なし、此くの如く了すれば之を法花を受持すと名く、是れを從劫主、劫手に卷を釋かず、從晝至夜念せざる時なしといふべし、法達はに於て歡喜に堪へず、偈を以て讚す、經を誦すること三千部自ら勝業に誇りしが、曹溪の一句にて亡したり、未だ諸佛因縁出世の旨を明めずんば、生々世々の迷狂は止むべからず、三車の權假方便なることを了達すれば、初中後共に善となり、有相火宅の身は本來法王の家なりしことを知ると、六祖乃ち法達に向つて、汝は今より念經僧と號すべし、法達玄旨を領して一生經を誦することを止めざりきといふ。

僧智通、壽州安豐人。初看楞伽經、約千餘遍、而不會三身四智。禮師求解。其義師曰：三身者、清淨法身、汝之性也。圓滿報身、汝之智也。千百億

化身、汝之行也。若離本性、別說三身、即名有身無智。若悟三身無有、自性即明四智。菩提、聽吾偈曰：自性具三身、發明成四智。不離見聞緣、超然登佛地。吾今爲汝說、諦信永無迷。莫學馳求者、終日說菩提。通再啓曰：四智之義可得聞乎。師曰：既會三身、便明四智。何更問耶。若離三身、別談四智、此名有智無身。即此有智還成無智。復偈曰：大圓鏡智性清淨、平等性知心無病。妙觀察智見非功、成所作智同圓鏡。五八六七果因轉、但用名言無實性。若於轉處不留情、繁興永處那伽定。通頓悟性智、遂呈偈曰：三身元我體、四智本心明。身智融無礙、應物任隨形。起修皆妄動、守住非眞精。妙旨因師曉、遂亡染汚名。

智通といふ僧初め楞伽經を讀むこと千餘遍、未だ三身四智の義を領會せず、來りて其の義を問ふ。六祖曰はく、汝が本心本性は性有機、清淨法身なり、汝が智動の所は圓滿報身なり、汝が行動作のは千百億の化身なり、即ち三身は皆汝が自心に本具有するものなれば、若し本性を離れて別に三身ありと説かば、之を有身有智と名く、若し三身別に自性なきことを悟れば、即ち四智を了する也、吾に偈あり、人

々自性に三身を具す此の三身發して四智となるされば之を遠きに求むべからず、日常色を見聲を聞きて緣するまゝ佛地に登る(差別に即して平等なり)自性の外に三身四智を求めて東西に馳驅し終日菩提を説くとも得へき様なし彼の馳求者を學ぶこと勿れど智通再ひ四智の義を問ふ六祖答へていはく既に三身を了すれば併せて四智を明むるものなり何故なれば三身の外に四智なければなり若し三身を離れて別に四智を談せば之を有智無身と名くべし否その有智は却て無智となるべし大圓鏡智は自性清淨なるをいひ平等性智は心に見病なく無礙なるをいひ妙觀察智は物に見取りを立てぬそこで日用動作が其儘に成所作智となるに依て日用動作さながらに大圓鏡智の自性清淨に同しとある而して此の四智は識の轉したるものにして前五識轉して成所作智となり第六識轉して妙觀察智となり第七識轉して平等性智となり第八識轉して大圓鏡智となる此の中第六識と第七識とは因中に轉し前五識と第八識とは果上に轉すされどこの轉すといふとも唯名言だけのことにして其實躰實性の轉するにあらずされは吾人か日常万境に對して心の轉するも轉するまゝにして執着せず即ち

情を留めされは朝な夕な心の繁く興るとも永く龍定に入り大圓鏡智の形に契ふものなり那伽定とは人天眼目にいはく那伽定者龍定也龍常靜思念攝故有定力能現大變今佛而四威儀中常在定故喻龍也と智通頓に性智を悟り偈を呈す三身は吾躰なり四智は本心なり吾か身と智と圓融して無礙なれば物に應し形に隨へとも自性自如なり修の相を起せば妄動なり性に執着するも精明の本眞にあらず師の誨諭によりて妙旨を悟り今は名相の執着を滅亡すと

僧智常信州貴谿人髫年出家志求見性一日參禮師問曰汝從何來欲求何事曰學人近往洪州白峰山禮大通和尚蒙示見性成佛之義未決狐疑遠來投禮伏望和尚慈悲指示師曰彼有何言句汝試舉看曰智常到彼凡經三月未蒙示誨爲法切故一夕獨入丈室請問何如是某甲本心本性大通乃曰汝見虛空否對曰見彼曰汝見虛空有相貌否對曰虛空無形有何相貌彼曰汝之本性猶如虛空了無一物可見是名正見無一物可知是名眞知無有青黃長短但見本源清淨覺躰圓明即名見性成佛亦名如來知見學人雖聞此說猶未決了乞和

尙開示。師曰。彼師所說猶存見知。故令汝未了。吾今示汝。一偈不見。一法存無見。大似浮雲遮日面。不知一法守空知。還如大虛生閃電。此之知見。瞥然興。錯認何曾解。方便汝當一念自知。非自己靈光常顯現。常聞偈已。心意豁然。乃述偈曰。無端起知見。著相求菩提。情存一念悟。寧越昔時迷。自性覺源林。隨照枉遷流。不入祖師室。茫然趣兩頭。智常一日問師曰。佛說三乘法。又言最上乘。弟子未解。願爲教授。師曰。汝觀自本心。莫着外法相。法無四乘。人心自有等差。見聞讀誦。是小乘。悟法解義。是中乘。依法修行。是大乘。万法盡通。万法俱備。一切不染。離諸法相。一無所得。名最上乘。乘是行義。不在口爭。汝須自修。莫問吾也。一切時中。自性自知。常禮謝執侍。終師之世。

智常といへる僧は、垂髮の頃より出家せる人にして、嘗て見性を求めんと欲し、大通和尙神秀のこゝにの門に投ぜしが、大通見性成佛の義を指示するに、本性は無形無相貌の虚空の如く、一物の見るべきなきこれ正見なり、一物の知るべきなきこれ眞知なりといひ、色相あることなく、本源清淨覺林圓明と見るを見性成

佛と名くといへり、智常狐疑して決する能はず、來りて六祖を禮し、實を告げて教示を請ふ、六祖いはく、彼の師の所説は見取りをつくる所あり、尙悟りの跡方見ゆるが如し、吾一偈を示さん、一法の見るべきなしと見るは、尙一法の見るべきなしと見る見解を存す、此の見は斷無の見なり、何ぞ正見といはん、此の見は自性の光明を遮ること浮雲の如し、又一法の知るべきなしと知るは、尙一法なしと知るの知を存す、これ亦空無の邪知なり、何ぞ眞知といふを得ん、この知は自性の上閃めく電の光し、此くの如き無見空知根本となりて一切の知見を起すべし、見知を認めて悟と思ふは錯りなり、無知無見に認着して如何にしてか祖佛の方便を領解せんや、元來知見の根本は一念にあり、若し一念その非なることを自知せば、これ見性の入路にして、此の門に入得すれば見性の靈光常に顯現するなりと、知常偈を聞きて心意豁然として悟る所あり、偈を呈していはいはく、端なく一念の知見を起し、外相に住着して外に菩提を求む、一念も悟りたりと思ふ情あらば矢張迷にして、昔の迷と異なることなし、自性本覺の跡が万法を照すまゝに隨ふの外なし、吾若し師の室に入らされば茫然と二邊に趣き、本源一味の境界を悟ること能は

ざりしならん。

智常一日問師以下は傳灯會元等に載せず六祖知常が四乘の問に答へて四乘は元來法の上にあるに非ず迷者が心の上此の差別をなすなりされは只經を空誦する如きは小乘なり教相を解する如きは中乘なり如法に修行するは大乗なり若し法界に通達して方法一心に備り境に對して染着せず諸法の相を離れ生死の厭ふべきなく涅槃の樂ふべきなく無所得を悟了する之を最上乘と名く乘は行の義行は進趣なり又行業なり口に争ふにあらず汝外相に着せず自の本心を觀て修すべし然るときは一切時中自性自如なりと。

僧志道廣州南海人也請益曰學人自出家覽涅槃經十載有餘未明大意願和尚垂誨師曰汝何處未明曰諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂於此疑惑師作麼生疑曰一切衆生皆有二身謂色身法身也色身無常有生有滅法身有常無知無覺經云生滅滅已寂滅爲樂者不審何身寂滅何身受樂若色身者色身滅時四大分散全然是苦苦不可言樂若法身寂滅即同草木瓦石誰當受樂又法性是生滅之

躰五蘊是生滅之用一躰五用生滅是常生則從躰起用滅則攝用歸躰若聽更生即有情之類不斷不滅若不聽更生則永歸寂滅同於無情之物如是即一切諸法被涅槃之所禁伏尙不得生何之樂之有師曰汝是釋子何習外道斷常邪見而議最上乘法據汝所說即色身之外別有法身離生滅求於寂滅又推涅槃常樂言有身受用斯乃執者生死耽著世樂汝今當知佛爲一切迷人認五蘊和合爲自躰相分別一切法爲外塵相好生惡死念々遷流不知夢幻虛假枉受輪回以常樂涅槃翻爲苦相終日馳求佛愍此故乃示涅槃眞樂刹那無有生相刹那無有滅相更無生滅可滅是寂滅現前當現前時亦無現前之量乃謂常樂此樂無有受者亦無不受者豈有一躰五用之名何況更言禁伏諸法令永不生斯乃謗佛毀法聽吾偈曰無上大涅槃圓明常寂照凡愚謂之死外道執爲斷諸求二乘人目以爲無作盡屬情所計六十二見本妄立虛假名何爲眞實義情有過量人通達無取捨以知五

蘊法。及以蘊中。我外現衆。色像。一々音聲相。平等如夢幻。不起凡聖見。不作涅槃相。二邊三際斷。劫火燒海底。風鼓山相擊。眞常寂滅樂涅槃。相如是。吾今強言說。令汝捨邪見。汝勿隨言解。許汝知少分。志道聞偈。大悟踊躍而退。

(二四六)

志道といへる僧、十有餘年涅槃經を讀みて未だ解せざる所あり、來りて垂聽を請ふ、其の疑ふ所は諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂の四句にあり、志道其の疑點を陳べていはく、一切衆生には色身と法身との二身あり、その色身は無常にして生滅あり、法身は常住にして知覺なし、さらば二身は全く相反したるものなり、二身の二あるを知らず然るに經に生滅々已寂滅爲樂と説けるものは不審、二身の内孰れか寂滅し、孰れか樂を受くるや、若し色身なりといはば色身滅する時色身を組織する地水火風の四大分散するのみ、これ全然傳燈會元共に苦なり、樂といふべからず、是れ斷見若し法身なりといはば、無知無覺の法身の寂滅ならば草木瓦石に同じ、誰か樂を受けん是れ常見なりに、見る人又若し之を法身の上より見ば、法身法性は法にして色身五蘊は用なりといふべし、一の法に具ふる五の用

ならば、生滅は常住ならん、即ち生は法より用を起し、滅は用を收めて法に歸すといはざるべからず、更に又若し生を更へて樂を受くるとならば、有情の類はいくたび更はるとも不斷不滅なるべし、常見若し生を更ふるといふこと無しといはば、枯木死灰の如く無常のものと同じくなるが涅槃の寂滅なりや、是くの如く生を受けざるか樂みならば、諸法は寂滅の理に禁せられて生することなかるべし、さらば樂みといふこともあるまじき理なりと、この志道が見解は實に邪見に墮するものといふべし、勝鬘經に云はく、見諸行無常、是斷見、非正見、見涅槃常、是常見、非正見、妄想見、故作如是見と、然れどもこれ只に志道のみ獨り墮れるものといふべからず、今の圓頂方袍の徒も、多くは爾かく迷信するものなり、慈雲律師は此等の徒を呵して、斷常二見兼帶の外道といへり、されば今六祖は志道の見解を聞きて呵していはく、汝はこれ釋子ならずや、何ぞ外道斷常の邪見に習うて最上乘の法を譏するや、汝か所説傳燈會元共にに據らば色身と法身とは全く別物にして、色身の外に別に法身あり、生滅を寂滅と全く別法にして、生滅を離れて別に寂滅を求む、又涅槃の常樂を以て凡夫人が肉身に受くる樂みと同一視す、傳燈會元共に

(二四七)

可なり作る。是れ尙生死に執着し、世樂に耽着するものにあらずや、佛は凡夫迷人が五蘊の和合を認めて我の躰とし、方法を分別して外界の實在とし、生を好み死を惡み、念々遷流して夢幻虛假たるを知らず、業を造りて生死に輪廻し、涅槃を以て却て苦相となし、終日役々として馳求するか爲に、佛之を惑みて涅槃の眞樂を示したまふなり、要するに、生死を厭ひ涅槃を求めしむるは凡夫迷者を誘引するの方便のみ、生死と涅槃とを全く別物とし、厭ふべき生死あり、樂ふべき涅槃ありと思ふは、是れ既に迷なり、世人は常に生死を出離すといふことを以て、罪人の半獄を出つるが如く考ふ、是れ大なる謬見なり、惠澄律師は、生きるとか死ぬるとか云ことが氣にかゝらぬやうになりたるが生死を出離したるなりといはれたり、又承陽大師の正法眼藏生死の篇に云はく、若人生死外、求於佛、猶如北轍而向於越、南面而見北斗、無生死、可厭、無涅槃、可願、夫生者一時位、而既有先有後、是故言生即不生、滅亦一時位、而又有先有後、由是言滅即不滅、言生則生、外無物、言滅則滅、外無物、生來則但是生、滅來則但是滅、勿言勿希向滅、而可會と、生は生に任せ、滅は滅に任せは利那も生相滅相なし、生滅の相なければ又滅すべき生滅なし、之を寂滅現前といふ、

寂滅現前には時間的の差別もなければ、空間的の差別もなし、強て名けて常樂といふ、常樂といふも唯その名を假りたる者なれば、此の樂は受くる受けぬといふ差別もなし、受くる者あらば寂滅にあらず、又受けざるものあらば寂滅にあらず、さらは何の處にか一躰五用の名あらんや、又何ぞ涅槃は諸法を禁伏すといふことあらんや、汝が見解は實に謗佛毀法の大罪なりと、六祖更に偈を脱く、無上大涅槃、圓明常寂照、涅槃に法身般若解脱の三徳圓滿することをいふは世樂に耽着する凡夫は、世樂を受けざるが故に之を死と謂ひ、有相を執する外道は、有相に非ざるが故に之を斷となす、又聲聞緣覺は、灰身滅智して之を無作となす、是れ皆妄情所計の邪見なり、此の妄情所計の見は六十二見となり、種々の名字を造る、されど是れ皆虛妄なれば眞實の義にあらず、たゞ一切に超越せる器量の人即ち見性の人、は萬法に通達して善惡是非彼此取捨なし、取捨なければ五蘊の法も、五蘊の中の我も、外界の万境色聲香味觸法の六塵も、皆平等自性の上に現するものにして、夢幻の如しと知了す、此くの如く知了すれば、凡夫も聖者も更に差別なく、生死を見ざるのみならず、涅槃の解も作すべきものなきが故に、斷常の二邊過現未の三

際此に断して六十二見の沙汰なし、而して日常目に色を見耳に聲を聞きて、常に六根の用に應しながら、用の想もなく、一切方法を分別すれども、分別しなから分別の想なし、三災壞劫の時大火起て海底を燒きて、涸渴せしめ、大風起て須彌山顛倒し、世界破滅するに至るも、涅槃の相は宛然として、眞常の寂滅なり、この涅槃の相は實に文字言句の詮顯し得べき所にあらず、唯汝が邪見を捨てしめんか爲に、強ひて言説を用ゐるのみ、汝言説に隨て解する勿れ、若し一句にても認むるあらば、少分をも知ること能はずと、志道六祖が感敷の訓誨を蒙り、大悟頓證して、退坐せり。

(一五〇)

行思禪師生吉州安城劉氏、聞曹溪法席盛化、徑來參禮、遂問曰、當何所務、不落階級、師曰、汝曾作什麼來、曰、聖諦亦不爲、師曰、落何階級、曰、聖諦尚不爲、何階級之有、師深器之、令思首衆、一日師謂曰、汝當分化一方、無令斷絕、思既得法、遂回吉州青原山弘法紹化。

青原の行思禪師六祖大師に謁し問うて曰はく、當何所務、不落階級と、人には各其の所務(仕事)あり、所務は人々の本分なれば、彼の所務は尊く此の仕事は賤しなど

いふ、高下尊卑の階級あるものにあらず、然るに僅かなる慈善事業が鼻の先にアラ下る如く、所務よりも階級を重んずるが凡夫の情なり、宇宙万象所務あるまゝに階級に墮せざるが万物各其の所を得たるなり、六祖いはく、汝曾作什麼來、汝は是れまでどんな所務をして居つたか、思いはく、聖諦亦不爲、何んにもしない、天柱曰はく、聖諦も爲さざるが故に一切爲す事なし、一切爲す事なければ事として爲さざるなしと、六祖いはく、落何階級、所務なきに何の階級に落ちたか、思いはく、聖諦尚不爲、何階級之有、何んにもしないから階級といふこともない、と、六祖深く之を器とし大衆の上首となす。

六祖大師の門下に得法の弟子數十人あり、中に就いて青原の行思、南嶽の懷讓二師の識見證契、難兄難弟にして、嫡庶を別つこと能はず、故に二人を等しく六祖の正嫡とすといふ、南嶽は我邦臨濟黃檗二宗の祖にして、青原は曹洞宗の祖なり。

行思禪師は本州安城の劉氏の子なり、幼にして出家し、長して六祖の法席に参す、後法を得て青原に歸住し、法を石頭希遷に傳ふ、唐開元二十八年(我天平十一年)

(一五一)

月十三日寂す、傳宗、弘濟禪師と證す

懷讓禪師、金州杜氏子也。初謁嵩山安國師。安發之曹溪。參扣讓。至禮拜。師曰。甚處來。曰嵩山。師曰。什麼物。恁麼來。曰。說似一物即不中。師曰。還可修證否。曰。修證即不無。汚染即不得。師曰。只此不汚染。諸佛之所護念。汝即如是。吾亦如是。西天般若多羅讖。汝足下一馬駒踏殺。天下人應在汝心。不須速說。讓轉然契會。遂執侍左右。一十五載。日臻玄奧。後往南嶽大闡禪宗。

南嶽の懷讓禪師は、初め嵩山の慧安國師の五祖黃梅の弟子の門に入る。慧安指圖して六祖に參せしむ。讓至りて六祖を拜するや、祖問うて曰はく、甚處來とこから來たか。讓曰はく、嵩山より來る。祖はいく、什麼物。恁麼來。跡が來たのか、心が來たのか、地獄から來たか、極樂から來たか。讓はいく、說似一物即不中古來此語曾說す私が佛とか菩薩とか何と、か之を一物に言うて見た所で、何と言うても當らぬ。天柱許して曰はく、不說則又將中乎と、祖はいく、還可修證否。修行して悟りを開くことがあるかな、どうだ。尙平たくいへば、どうぢや。飯食つたり、着物着たり、寝たり起きたり

するかなど。讓はいく、修證即不無。汚染即不得。飯も食へば、着物も着る。修行はするが、その物に染着して汚さるゝといふことはなし。祖はいく、只此不汚染。諸佛所護念。汝即如是。吾亦如是。そこだ、その不汚染といふ所だと、印可を與へたり。げに地獄にあらは地獄のまゝ、苦しまず、極樂にあらは極樂のまゝ、樂しまず、盡十方法界苦樂の相なきが不汚染なり、故人が、寧ろ異趣に趣きて且つ輪廻せん、彼毛帶角も亦是れ一段の風流といへるも亦味ふべし。

懷讓禪師、姓は杜氏、金州の人なり。唐の儀鳳二年我邦の白生る、十五歳にして荆州の玉泉寺に往いて弘景律師に依て出家し、後嵩山の慧安和尚に謁す、安之を啓發し更に命して六祖に參せしむ、師六祖の左右に侍すること十有五年、先天二年衡嶽に往いて般若寺に居す、入室の弟子六人、常浩、智達、坦、然、神、照、嚴、俊、道一あり、法を馬祖道一に傳ふ。馬祖の門下八十餘名の皆知識あり、其大天寶三年我平十八年八月十一日衡嶽に圓寂す、壽六十八、大慧禪師と證す

永嘉玄覺禪師、温州載氏子。少習經論。精天台止觀法門。因看維摩經發明心地。偶師弟子玄策相訪。與其劇談。出言暗合。諸祖策云。仁者得

法師誰曰我聽方等經論各有師承後於維摩經悟佛心宗未有證明者策云威音王以前即得威音王以後無師自悟盡是天然外道曰願仁者爲我證據策云我言輕曹溪有六祖大師四方雲集並是受法者若去則與偕行覺遂同策來參遠師三匝振錫而立師曰夫沙門者具三千威儀八萬細行大德自何方而來生大我慢覺曰生死事大無常迅速師曰何不體取無生了無速乎曰體即無生了本無速師曰如是如是玄覺方具威儀禮拜須臾告辭師曰返太速乎曰本自非動豈有速耶師曰誰知非動曰仁者自生分別師曰汝甚得無生之意曰無生豈有意耶師曰無意誰當分別曰分別亦非意師曰善哉少留一宿時謂一宿覺後著證道歌盛行于世

永嘉の玄覺禪師は、少うして出家し、普く三藏を探り、天台の止観、圓妙の法門を究め、維摩經を見て心地を發明し、四威儀の中に於て禪觀を冥す、偶、六祖の弟子玄策なるもの訪ひ來り、之と談するに、玄覺の言ふ所六祖の旨に符合する所あり、策問ふて曰はく、仁者得法の師は誰ぞ、覺曰はく、大乘の經論を學修したるは、それく

師承あれど、維摩經に依りて佛心の宗佛心宗の悟たるは別に證明したる人なしと、策いはく、威音王經律の法の初り以前無法の時、は自悟を許す、佛法流布の後には師の證明を受けざる者は自然外道にあらざや、蓋し我を増長すればなり、覺いはく、然らば仁者も前が證明してくれては如何、策いはく、我言輕し曹溪に吾師六祖大師あり、受法の者四方より雲集す、かしこに行かんとらば同行すべしと、依て共に來りて六祖に參す、覺至りて祖の座を遷ること三邊、錫を振て立つ、六祖いはく、沙門には、三千の威儀、八方の細行ともいひて、それくの儀式あり、大徳何處より來て大我慢を生ずるや、覺いはく、生死事大、無常迅速、生死無常は一大事因縁なり、吾れ之が爲に來ると、我慢を阿せらるるも前祖いはく、何不、取無生了無速乎、生死を無生と昧し、迅速を無速と了すればよいでないか、天桂曰取無生了無速乎、生死を無生と昧し、迅速を無速と了すればよいでないか、天桂曰過るぢやない、可覺いはく、昧即無生了、即不速、生死に昧達すれば生死即無生なり、迅速を了すれば無速なりと、祖印可を與へて如是々々といふ、覺乃ち威儀を正して師弟の禮を爲し、直に別れを告ぐ、祖いはく、何ぞ歸ること甚だ速なるや、覺いはく、本來動に非ず、不動なれば遅いも速いもなし、祖いはく、動に非ずとは、誰が知

つたか、覺いはく、仁者が自分に分別を生じたのである。天柱曰く、祖いはく、汝能く無生の意を解し得たり、覺いはく、無生に意は御座るまい、祖いはく、意なければ分別の生し様なし、覺いはく、其の分別も意に非すと、覺よく絶對を悟得して答ふ、是れに於て祖いはく、善しく、マ、マ、マ、一晩宿れと、遂に一宿し、翌日山を下りて温州に還る、時人稱して一宿覺といふ、後ち證道歌一首及禪宗悟修圖旨を著す、慶州の刺史魏靖輯めて之に序し、十篇となし、題して永嘉集といふ、證道歌の明々佛勅曹溪是といひ、自認得曹溪路了知生死不相關といひ、六祖を慕ふこと甚だ切なりしが、先天二年十月十七日(我和銅六年)寂す、證して無相大師といふ。

禪者智惶初參五祖、自謂已得正受。庵居長坐積二十年。師弟子玄策遊方至河朔、聞隍之名、造庵問云、汝在此作什麼。隍曰、入定。策云、汝云入定、爲有心入耶、無心入耶。若無心入者、一切無情、草水瓦石、應合得定。若有心入者、一切有情、含識之流、亦應得定。隍曰、我正入定、時不見有無之心。策云、不見有有無之心、即是常定。何有出入。若有出入、即非大定。隍無對。良久問曰、師嗣誰耶。策曰、我師曹溪。六祖。隍曰、六祖以何

爲禪定。策云、我師所說妙湛圓寂、鉢用如々五陰本空、六塵非有、不出不入、不定不亂、禪性無住、離住禪寂、禪性無生、離生禪想、心如虛空、亦無虛空之量。隍聞是說、徑來謁師。師問云、仁者何來。隍具述前緣。師云、誠如所言、汝但心如虛空、不著空見、應用無礙、動靜無心、凡聖情忘、能所俱泯、性相如如、無不定時也。隍於是大悟。二十年所得、心都無影響。其夜河北士庶聞空中有聲、云隍禪師今日得道。隍後禮辭、復歸河北開化四衆。

禪者智隍は五祖黃梅の門下にして、自ら正受即ち禪三昧を得たりとなし、卷を結ひて居ること二十年、偶々六祖の弟子玄策その名を聞ひて至り訪ひ、隍か入定すといへるに就て、大に詰責する所あり、問對の意解し、隍答ふる能はず、遂に策受法の師を聞き、その禪定の意を質す、策いはく、妙鉢圓寂、その鉢は湛然として相もなく、其用は圓通して用の相もなし、鉢用如々、鉢も用も別の相なくして一如なり、五陰本空、六塵非有、迷人は五蘊もて自身の相とすれども、本空なるが故に身相なし、六塵の縁影を自身の相とすれども有に非ざるが故に心相なし、この故に出入定

亂なし、林の如禪性無住、離住、禪寂、禪生、無生、離生、禪想、無住を以て禪性とするが故に、住と不住とを離れて禪定す、定に定相なければ寂なり、又無生を以て禪性とするが故に、生と無生とを離れて禪想す、寂に寂相なきが故に、想といふ用の如心、如虚空亦無虚空之量、既に無住無生を以て禪性とするが故に、心虚空の如く一も著する所なく、其の著する所なしといふ量も亦離るゝなりと、隨この説を聞きて未だ疑情止まず、遂に曹溪に至りて決を請ふに、祖意策のいふ所に同じ、隨始めて開悟す、汝但心以下の三十五字一本に無しといふ可なり、

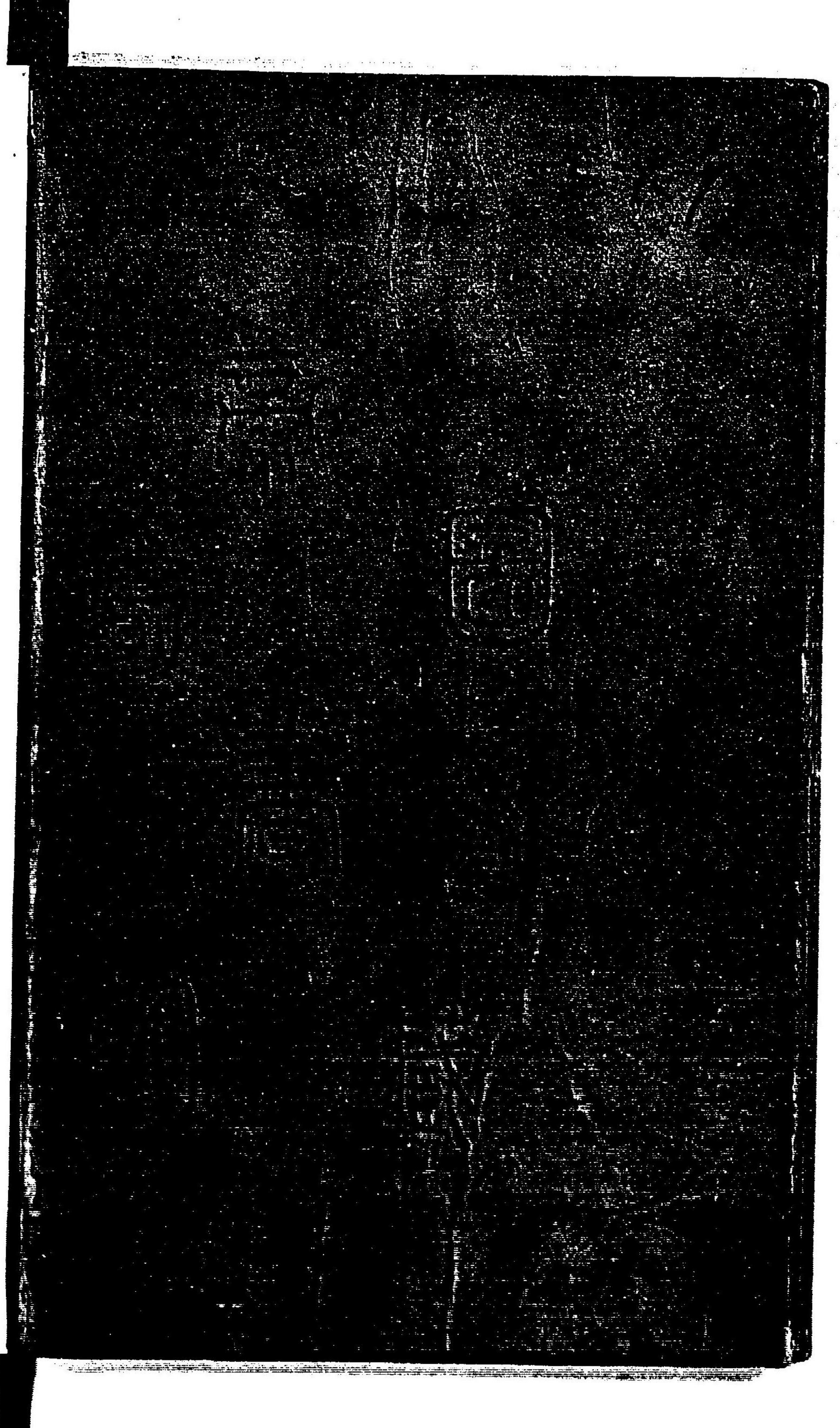
一僧問師云、黃梅意旨甚麼人得、師云、會佛法人得、僧云、和尚還得否、師云、不會佛法、師一日欲濯所授之衣而無美泉、因至寺後五里許、見山林鬱茂、瑞氣盤旋、師振錫卓地、泉應手而出、積以為池、乃跪膝浣衣、石上忽有一僧來禮拜云、方辯是西蜀人、昨於南天竺國見達摩大師、囑方辯速往唐土、吾傳大迦葉正法眼藏及僧伽梨、見傳六代於韶州曹谿、汝去瞻禮、方辯遠來願見我師傳來衣鉢、師乃出示、次問上人攻何事業、曰善塑、師正色曰、汝試塑看、辯罔措、過數日、塑就、真相可高

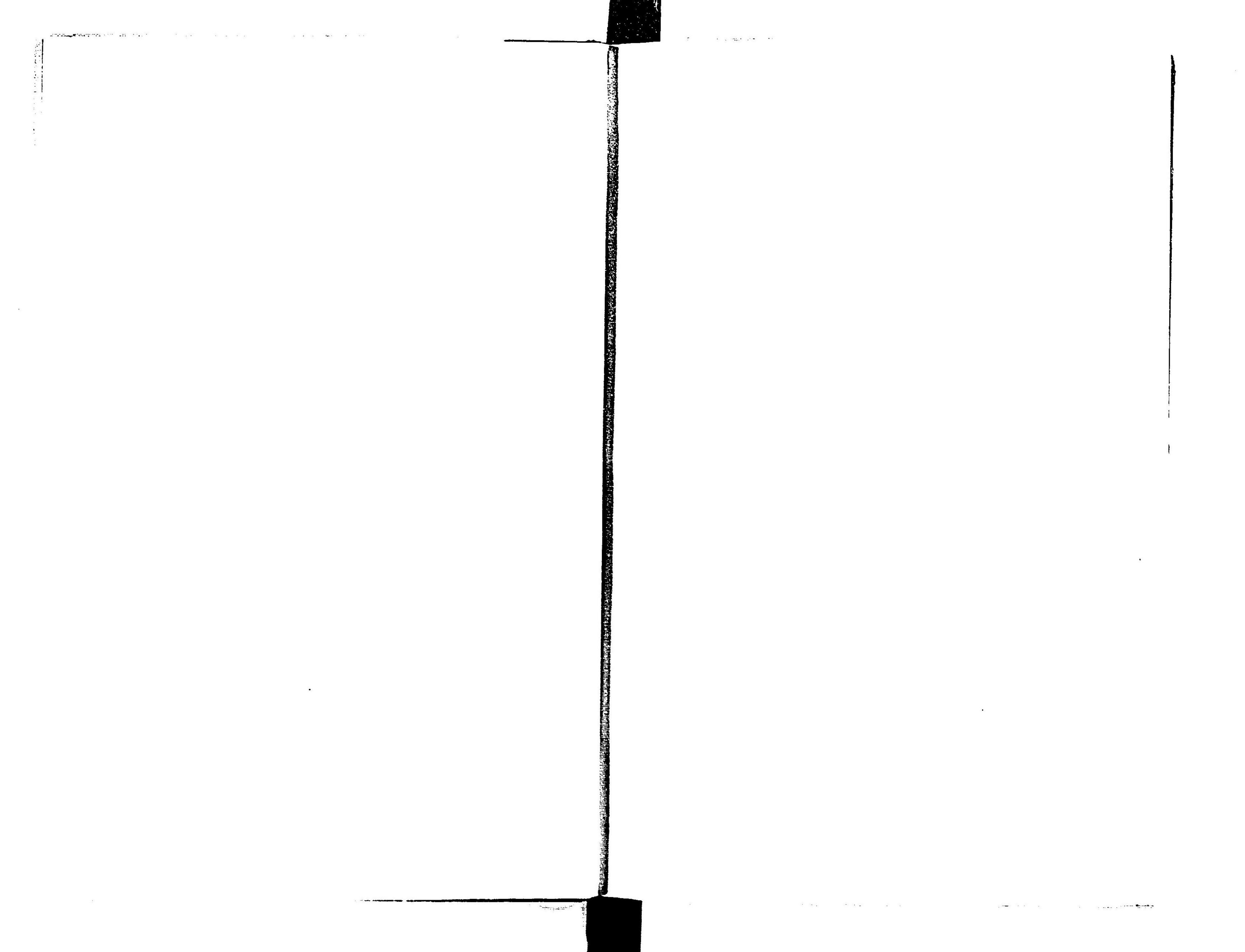
七寸、曲盡其妙、師笑曰、汝只解塑性、不解佛性、師舒手摩方辯頂曰、永為人天福田、有僧舉臥輪禪師偈曰、臥輪有伎倆、能斷百思想、對境心不起、菩提日日長、師聞之曰、此偈未明心地、若依而行之、是加繫縛、因示一偈曰、慧能沒伎倆、不斷百思想、對境心數起、菩提作麼長、

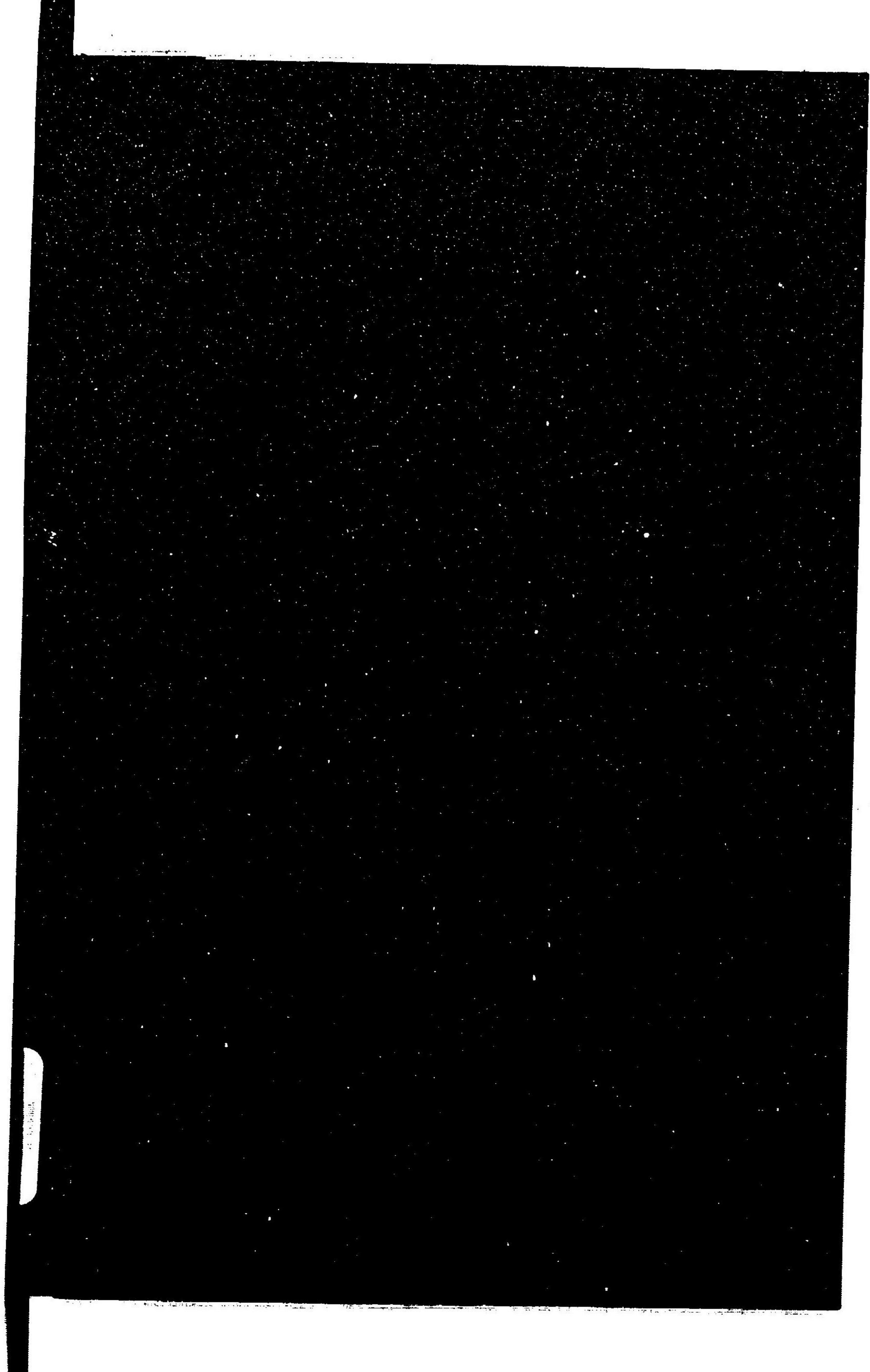
忽有一僧以下七十六字一本に無し、たゞ有蜀僧方辯、詔師問云云とありといふ、是れ可なり、又泉の涌出する事を記するは後人の附會なること論せずして明なり、以上第七機緣段了る、是れより以下第八頓漸、第九宣詔、第十付囑の三段あり、然れども本書の肝要なる所は以上の七段にあり、以下は後人の攪入偽作する所また少なからざれば、茲にて本講義の完結を告ぐることにせり、讀者諒焉、

14
224

非
仙







100-100000-100000

14
224

019886-000-9

14-224

六祖法宝壇經講義

大内 青巒 / 著

M33

ABG-0718



